

54
34

大 佐
山室軍平著
儿力傳餘師
東京神田
救世軍本營



始



504
34



大 佐

山室軍平著

力傳餘師

東京神田

救世軍本營



Vertical text on the right edge of the cover, possibly a library or collection number.

504-34



大 佐
山室軍平著
力儿傳餘師

東京神田
救世軍本營



大正
11. 5. 20
内交

はしがき

日本は必ず、基督教によりて教化せられねばならぬ。而して其の爲に最も緊要なるは、聖書を一般民衆の讀物たらしめ、家々に、人毎に、之を愛誦するに至らしむることである。著者は平生此うした所信を有するものから、幾分でも其の大事業の補ひをなさん爲に、敢て自ら措かず、進んで新約聖書の平民的講解を作らんことを思ひ立ち。さきには「マタイ傳餘師」「マルコ傳餘師」「使徒行傳餘師」を著し、今又此の「ルカ傳餘師」を公にすることとなつたのである。

其の主意とする所は、どこ迄も平易簡明に、聖書の實際的教訓を敷衍するにあり。それさへ精々、自分の貧弱なる思想や、意見を述ぶることを避けて、出来るだけ、昔から神に祝福せられた聖徒等が、聖書の各條に就いて學んだ所、實驗した所を紹介せんことを、試みたのである。そのため唯三四頁の原稿を書くに、概ね數十頁若くは數百頁の参考書籍を涉獵すべき必要あり。これは平生軍務多端の私に取りては、決して

容易い業ではなかつたのである。

もとより淺學薄信の身であるから、幾ら刻苦勉強したからといふて、其の道の専門家から見たら、嘸かし杜撰な所が多く、又不満足の點も少くないとを見出さるゝであらう。それにも拘らず、著者としては、これでも自分の現在、最善の努力を籠めたものであると、言ひ得るのが、せめてもの慰藉である。

何卒毎朝少くとも十五分か二十分間を、神の前に過す習慣を養ふて欲しいものである。而して出来ることなら、此の書を其の時の、一参考書として使用して戴きたい。又は之を唯個人的に讀まるゝのみならず、併せて家族の禮拜に、病人の慰問に、店員又は職工の會合に、或は求道者會、信仰修養會等に、用ゐらるゝことを得たならば、著者の本懐之に過ぐるものはない。既に東京の或教會では「餘師」を毎日曜日の聖書研究會に用ゐて、其の益が多いと言はれて居るのである。

著者は今日まで、救世軍出版及供給部から、未だ曾て一錢の原稿料をも、印税をも、申受けたことがない。自分の書いた物から生ずる純益は、悉く救世軍の事業費の中

に納められて居る。これは著者の樂みである、又光榮とする所である。どうか此の書が亦廣く世に行はれ、心靈上には、多くの祝福を其の讀者に齎らし、物質上には、救世軍が少からの利益を得んことを、願ふて止まない。若夫れ著者としての私が受くべき報酬は、唯斯くして神の榮光が顯はれ、能く幾分でも我が同胞の救に資せんことその他にないのである。

大正十一年の紀元節に際し

山室軍平

私は幾度となく、祈禱からメンに
またメンから祈禱に轉じた。

(中將ブース、ムツカー)

ルカ傳餘師

目次

【一】	ルカ傳及び其の著者……………	一
【二】	老祭司 (ルカ傳第一章一至二十)……………	一
【三】	處女マリヤ (同、第一章二十一至三十八)……………	六
【四】	聖徒の交際 (同、第一章三十九至五十六)……………	三
【五】	此の子は如何なる者にか成らん (同、第一章五十七至八十)……………	二七
【六】	クリスマス (同、第二章一至二十四)……………	二二
【七】	少年時代 (同、第二章二十五至五十二)……………	二七
【八】	少年時代のヨハネ (同、第三章)……………	三三
【九】	悪魔の試み (同、第四章一至三十)……………	三九
【一〇】	カペナウム (同、第四章三十一至四十四)……………	四一

【一〇】 深處に乗り出せ (同、第五章一至十六) 五一

【一一】 汝の罪赦されたり (同、第五章十七至三十九) 五六

【一二】 幸福なる哉貧しき者よ (同、第六章一至二十六) 六二

【一三】 父の慈悲なる如く (同、第六章二十七至四十九) 六七

【一四】 預言者以上の預言者 (同、第七章一至三十) 七三

【一五】 知己難 (同、第七章三十一至五十) 八〇

【一六】 種は神の言なり (同、第八章一至二十五) 八五

【一七】 耶穌に觸れよ (同、第八章二十六至五十六) 九一

【一八】 十二使徒の派遣 (同、第九章一至十七) 九三

【一九】 神の基督 (同、第九章十八至三十六) 一〇八

【二〇】 枕する所なし (同、第九章三十七至六十二) 一〇九

【二一】 七十人の弟子 (同、第十章一至二十四) 一一五

【二二】 善きサマリヤ人 (同、第十章二十五至四十二) 一二〇

【二三】 祈ることを教へ給へ (同、第十一章一至二十八) 一二六

【二四】 身の燈火 (同、第十一章二十九至五十四) 一三二

【二五】 愚なる富人 (同、第十二章一至三十一) 一三八

【二六】 戦争的の宗教 (同、第十二章三十二至五十九) 一四四

【二七】 汝等も悔改めずば (同、第十三章一至二十一) 一五一

【二八】 我は進み往くべし (同、第十三章二十二至三十五) 一五七

【二九】 人々を強ひて連れ來れ (同、第十四章一至二十四) 一六二

【三〇】 十字架を負へ (同、第十四章二十五至三十五) 一六八

【三一】 罪人を迎へて (同、第十五章一至十) 一七三

【三二】 放蕩息子の譬喩 (同、第十五章十一至三十二) 一七六

【三三】 不義なる支配人 (同、第十六章) 一八四

【三四】 信仰を増し給へ (同、第十七章一至十九) 一九一

【三五】 ロトの妻を憶へ (同、第十七章二十至三十七) 一九七

【三六】 幼児等を我に來らせよ (同、第十八章一至二十三) 二〇一

【三七】 誰か救はるゝことを得る (同、第十八章二十四至四十三) 二〇八

【三八】 取税人の長 (同、第十九章一至二十七) 二一四

【三九】 石叫ぶべし (同、第十九章二十八至四十八) 二一九

【四〇】 天よりか人よりか (同、第二十章一至二十六) 二二五

【四一】 生ける者の神 (同、第二十章二十七至四十七) 二三二

【四二】 克己献金 (同、第二十一章一至十九) 二三六

【四三】 刑罰の日 (同、第二十一章二十至三十八) 二四二

【四四】 告別の食卓 (同、第二十二章一至二十三) 二四七

【四五】 誘惑に入らぬやうに祈れ (同、第二十二章二十四至四十六) 二五三

【四六】 暗黒の權威 (同、第二十二章四十七至七十一) 二五九

【四七】 十字架につけよ (同、第二十三章一至二十六) 二六四

【四八】 父よ彼等を赦し給へ (同、第二十三章二十七至五十六) 二七〇

【四九】 復活の日曜日 (同、第二十四章 一至三十二) 二七六

【五〇】 上よりの能力 (同、第二十四章三十三至五十二) 二八二

ルカ傳及び其の著者

(一)

ルカ傳は四福音書の第三番目にありて、比較的最も長篇である。即ちマタイ傳が千〇七十一節、マルコ傳が六百七十八節、ヨハネ傳が八百七十九節あるに對し、ルカ傳は實に千百五十一節より成つて居る。之を編輯の仕方から言ふても、ルカ傳はバプテスマのヨハネの誕生より書き起して、耶穌のベツレヘムに産聲を揚げ給ふた始末、其の献兒式、其の十二歳の當時のこと等を記し。それより三年間の公生涯を経て、十字架復活、昇天に至るまで、其の記事が比較的最も組織立ちて、且つ詳細を極めて居る。一説に、マタイ傳は主として耶穌の説教、マルコ傳は耶穌の事業、ヨハネ傳は耶穌の談話を載せたるに對し、ルカ傳は耶穌の生活を録したものといはれて居る。他の説に又、マタイ傳は王としての耶穌、マルコ傳は僕としての耶穌、ヨハネ傳は神の子としての耶穌を傳ふるに對し、ルカ傳は人の子としての耶穌を紹介したものである。

ると、いはれて居る。

何れにもあれ、ルカ傳は、最も人間味の豊かなる耶穌を、世に傳へたものであることは、萬人の齊しく認めて、感佩に堪えざる所である。

(二)

ルカ傳の著者ルカは、多分シリヤのアンテオケに生れたギリシヤ人であつた。或は彼を七十人の弟子の一人であつたとも、又は耶穌に謁えんことを求めたギリシヤ人の一人であつたとも、或はエルサレムからエマオ村に往つた二人の弟子の、一人であつたとも、種々言傳へて居れど、其の一つも信據するに足るものはないらしい。

最も確實と思ほしき彼の經歷は、紀元十一年の頃、彼がトロアスにて、當時第二の傳道旅行中に在りしパウロに従ひ、マケドニヤに渡り。パウロが其の地を去りたる後も、獨りピリビに留りて、當時尙至つて幼稚であつた改心者の養成に、従事しつつ、併せて諸方面の開拓に盡瘁すると數年。紀元五十七年に至り、パウロが其の第三傳道旅行の終りに、今一度ピリビに立寄りたる時、之と同行してエルサレムに上り。爾

來パウロの存命中は、之と全く其の行動を共にしたものの、如く見える。即ちカイザリヤに於ける彼が二年間の縲紲にも、地中海上に於ける危険なる航海にも、マルタ島への漂着にも、續いて其のロマに於ける第一次、第二次の入獄にも、斷ず随伴して。なにくれとなく彼を世話し、彼を輔佐しつつ、其の殉教の最後を遂ぐる日まで、行末を見届けたものらしい。

(三)

ルカの本業が醫者であつたことに就いては、パウロが彼を「愛する醫者ルカ」(西四〇十四)と呼んだのを見ても、之を知ることが出来る。さなきだに餘り強壯の方ではないパウロが、不斷の過勞の爲に、疲勞困憊を覺ゆる時にも、ルカが傍に在つて行届いた手當をなし、之をいたはり慰めて、能くあれ程の活動を續けしめた、其の隠れた功績は、眞に言語に盡くせぬほど、大なるものがあつた。彼が醫者としての知識と經驗とは亦、彼が耶穌を傳ふるに當りても、他の記者の企て及ばぬ精到なる觀察をなし、又細密なる記事を作る上に、多くの便宜を與へたものと、考へられて居る。

其の最後に就いては、ローマにて死んだとも、ギリシヤで歿したとも、又ペロポネソスのエレアにて、橄欖の樹に懸けて殺されたともいひ。其の年齢の如きも、或は七十六歳であつたといひ、八十歳、八十四歳であつたなどともいはれ、其の何れが眞實なるかを判断し難い。

(四)

彼がルカ傳を著した目的は、其の第一章の始の數節に明かである。曰く「我等の中に成りし事の物語につき、始よりの目撃者にして、御言の役著となりたる人々の、我等に傳へし其のまゝを書き列ねんと、手を著けし者數多ある故に、我も凡ての事を最初より詳細に推し尋ねたれば、テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の慥なるを悟らせん爲に、これが序を正して書贈るは、善き事と思はるゝなり」と。(路一〇一至四)テオピロといふのは、彼と同じギリシヤ人にて、多分平生から彼を庇護して居つた人であらう。其の之を著したのは、彼がパウロに伴ふて、二年間をカイザリヤに過した時のことにて、即ち紀元五十七年から五十九年の間であつたともいへば。まう數年後のことであ

つた様にも、言ふ人がある。

彼はルカ傳を書いて後に、また使徒行傳を著した。使徒行傳の中に其の自ら閱歷した所を録す折には「彼」とか「彼等」とか言ふ代りに「我等」といふ文字を用ゐてゐるのが、如何にも目立つて見える。即ち其の第十六章一より、十七まで、第二十章五より十五まで、第二十一章一より十八まで、第二十七章一より第二十八章十六まで、少くとも約九十七節が其の部分である。

(五)

ルカは最初の讚美歌の作者であつたと言はれて居る。即ちルカ傳第一章及び第二章にある、マリヤ、ザカリヤ、エリサベツ、シメオン等の頌は、後世までも之に譜をつけ、随分廣く歌はれたものである。此の福音書は又感謝の精神に充ち溢れて居るのが、其の特徴の一つである。即ち第一章にマリヤが「我が心主を崇め、我が靈はわが救主なる神を喜び奉る」と、歌ふたのから始めて、第二十四章の終りに、弟子達が「常に宮に在りて、神を讚め居たり」といふに至るまで。全篇神を讚め、其の恵を謝するの精

神が、之を貫いて居るのである。

ルカ傳は又祈禱の記事に最も重きを置いて居る。即ち耶穌がバプテスマの時と、癩病人を潔めたる後と、十二使徒を擇ぶ前と、變貌山とに於て、祈り給ふた事。及び十字架上已を殺す者の爲、又其の靈魂を父に托する爲に祈り給ふた事の如き。何れも他の福音書に見えずして、殊にルカ傳にのみ書きのこされた記事である。ルカは又耶穌が斷えず祈禱すべきことを教へ、夜半にパンを借りにゆく譬諭と、不義なる裁判人の譬諭とを以て、其の道理を力説し給ふたことを、載せて居る。

(六)

ルカ傳には又多く耶穌の譬諭を録し、其の數實に二十三に達して居る。中にも有難いのは、放蕩息子の譬諭と、善きサマリヤ人の譬諭とが、此の傳の中に保存せられたことである。神は父である、私共は子供である、しかも現在放蕩息子同然の有様に陥つて居る私共を、父が尙も赦して其の家族となし給ふといふのは、どうした大なる福音であらう。唯此の放蕩息子の譬諭一つあるが爲に、幾百萬、幾千萬の罪の子等は、

之によつて望を得、救を得て、今一度神の子供の數に加へらるゝ事が出来るのである。ルカが放蕩息子の譬諭を書きのこしてくれた功德は、天地と共に傳へらるゝであらう。善きサマリヤ人の譬諭は、私共に、其の隣人を愛すべきことを教ふるものである。即ち耶穌に救はれた者が、進んで他人を救ふべきことを示すものである。又一凡て人に爲られんと思ふことは、人にも其の如くすべきことを「(太七〇十二)警告するものである。しかも唯此の愛の實行によりてのみ、人種問題も、男女問題も、勞働資本の問題も、あらゆる人生の難問題は、其の徹底的の解決を見出さるべきものではないか。私共は第三福音書に、此の善きサマリヤ人の譬諭の書きのこされたことを、感佩して止まぬものである。

(七)

ルカ傳は或意味に於て勞働者の福音書である。マタイ傳には、耶穌の降誕の時、東方の博士が訪ねて來たことを書いてあれど。ルカ傳には牧者の群が、之を拜みに來たことを記してある。同じ漁夫が召を受けた記事にも、ルカ傳のみは、其の前夜、彼等が徹夜

無駄骨折をした始末を、細かに書きのせてある。三年無花果の實を求めて得ざりし農夫の事も、「我等は無益の僕なり、爲すべきことを爲したるのみ」といふ記事も、「我々汝等の中にて事ふる者の如し」といはれた御言も、十人の僕に各金十ミナを預けられた物語も、皆ルカ傳にのみ出て居る記事である。ルカ傳は取分け労働の尊貴を教へ、労働者を重んじたる福音書であると、言ふても差支あるまい。

(八)

ルカ傳は又婦人の經典である。エリサベツとマリヤと會見の條など、眞に一幅の活畫ではないか。その他マリヤとマルタと行違の話、十八年サタンに縛られた女の安息日に醫された物語、根氣好く裁判官を督促した寡婦の譬喩、「幸福なる哉、汝を宿し、胎、汝の哺ひし乳」と叫んだ女、又多くの女達が耶穌に従ひ、其の財産を以て彼に事へた事、耶穌がカルバリ山に往き給ふ途上、多くの女達が泣きつゝ従ふた事等、何れもルカ傳にのみ見ゆる記録である。ルカ傳は殊に婦人の地位を認め、其の信仰と奉仕とに格別の注意を拂ふたもの、如く見える。

ルカ傳は又少からず、幼年少年の記事を載せて居る。これは他の福音書にもあることながら、ルカ傳に特別の記事としては、バプテスマのヨハネの誕生の事、「馬槽に臥したる嬰兒」の事、耶穌が十二歳の時の事、又ナインの寡婦の子の甦へられた事等がある。

(九)

貧民は又ルカ傳中に、特別の所を興へられて居るやうである。「幸福なる哉、貧き者よ」といふ句は、唯此の傳にのみ出て居る御言である。而して一面に愚なる富人の譬喩、又富める人とラザロとの物語を載せられて居ると共に、他の半面には、「饗宴を設くる時は、寧ろ貧き者、不具、跛者、盲人などを招け、彼等は報ゆること能はぬ故に、汝等幸福なるべし」など、教へられて居る。それ故、貧民はルカ傳を讀んで、耶穌の恵の、特に彼等に厚きを悟ることが出来るのである。

此の福音書は又、人種民族の差別を徹廢して居る。サマリヤ人は平生ユダヤ人から、狗のやうに見做されて居つた。けれどもルカ傳には、ヤコブとヨハネとが、其のサマ

リヤ人を滅さんことを願ふて、叱られたことや。又はサマリヤ人が祭司よりも、レビの人よりも愈りて、愛の實行者であつたことや。又は醫されたる十人の癩病人の中、唯一人のサマリヤ人のみが、恩を知つて之を感謝したことなどを載せ。耶穌が如何に人を偏り視ないお方であるか。又彼が如何に萬國萬民の救主であるかと、いふ様なことを、明かに示してある。

(一〇)

ルカ傳の耶穌は特に罪人の友にて在し給ふ。如何なる極悪非道の人も、彼によりて救はれざるはないのである。即ち取税人の長ザカアイが救はれた事も、他の取税人が「神よ罪人なる我を憫み給へ」と祈り、パリサイ人に愈りて義とせられたことも、涙にて耶穌の足を濕し、頭の髪にて拭ふた罪ある婦人のことも、十字架上に悔改めて、「今日汝は我と偕にパラダイスに在るべし」との御聲を聞いた盗人のことも、専ら此の福音書に出て居るのである。

第三福音書は又、耶穌が如何に「我等の弱を思ひやり給ふ」かを示すものである。即ち

彼がペテロにむかひ「シモン、シモン、視よサタン、汝等を麥の如く篩はんとて請ひ得たり。されど我汝の爲に其の信仰の失せぬやうに祈りたり」と宣ふたことも。又は彼が失望した二人の弟子を相手に、エマオに往く途上、之を指導し給ふたことなども、特に此の傳の中に記されて居る。ルカ傳を讀めば、如何なる罪人にも、落伍者にも、意氣地なしにも、失意の人にも、尙希望のあることが、解るのである。

ジョンソンの言に「基督教は、人道の最高の完成なり」とあり。私共は其の完成したる人道の福音を、ルカ傳に見。又其の完成したる人道の權化を、ルカ傳の耶穌に見出すことが出来る。聖書の何れの部分に優り劣りのあらう筈はなけれど、私共は今日の場合、殊に心を潜めて、此の「人道の福音書」なる、ルカ傳に學ぶべき必要を感じるるのである。

ルカ傳餘師

(一) 老祭司

山室軍平著

【ルカ傳第一章一至二十】

一 我らの中に成りし事の物語につき、始よりの目撃者にして、二 御言の役者となりたる人々の、我らに傳へし、其のままを、書き列れんと、手を著けし者あまたある故に、三 我も凡ての事を最初より詳細に推し尋ねたれば、四 テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の體なるを悟らせん爲に、これが序を正して、書贈るは善き事と思はるるなり。五 ヌエダヤの王

ヘロテの時、アビヤの組の祭司に、ザカリヤといふ人あり。その妻はアロンの裔にて名をエリサベツといふ。二人ながら神の前に正しくして、主の誠命と定規とな、みな缺なく行へり、セエリサベツ石女なれば、彼らに子なし、また二人とも年邁みぬ。入さてザカリヤその組の順番に當りて、神の前に祭司の務を行ふとき、九 祭司の慣例にしたがひて籤を

ひき主の聖所に入りて、香を焼くこととなりぬ。十一
香を焼くとき民の群みな外にありて祈りたり。十二
時に主の使あらはれて、香壇の右に立ちたれば、十三
ザカリヤ之を見て、心騒ぎ懼を生ず。十三 御使いふ
「ザカリヤよ懼るな、汝の願は聴かれたり。汝の妻エ
リサベツ男子を生まん、汝その名をヨハネと名づく
べし十四 汝に喜悦と歡樂とあらん、又おほくの人も
もその生るるを喜ぶべし十五、この子、主の前に大なる
らん、また葡萄酒と濃き酒とを飲まず、母の胎を出
るや聖靈にて満されん。十六 また多くのイスラエルの
の子らな、主なる彼らの神に歸らしめ、十七 且エリ

二二
ヤの靈と能力とをたもて、主の前に往かん。これ父の
心を子に、戻れる者を義人の聰明に歸らせて、整へ
たる民を主のために備へんとてなり」十八 ザカリヤ
御使にいふ「何に據りてか此の事あるを知らん、我
は、老人にて妻もまた年邁みたり」十九 御使こたへ
て言ふ「われは神の御前に立つガブリエルなり、汝
に語りてこの喜き音信を告げん爲に遣はさる。二十 視
よ、時いたらば、必ず成就すべき我が言を信ぜぬに
困り、なんぢ物言へずなりて、此らの事の成る日ま
では語るこゝ能はじ」

◎ルカ傳福音書を、其の著者ルカから贈られたテオピロとは、如何なる人であつたか、
今から之を知るに由縁がない。多分相當に身分ある人にて、早く基督者となつて居つ
たものであらう。ルカは「凡ての事を最初より詳細に推し尋ね」「これが序を正して」
書き録したといふて居る。之によりても知らるゝは、基督の宗教が飽迄も事實に基く

ものだといふことである。即ち之は耶穌基督の人格と事業とに立脚する所の宗教であ
る。それ故私共の信仰の根據は堅い。ジョンソン博士が、「凡て正直なる人は、長
く不信仰に止まることが出来ない。なせかといふに、誰にても一通り基督教を研究し
た人は、其の確實なる證據を否定し能はぬ故である」と、いふたのは、如何にも最も
の話である。(一至四)

◎ユダヤの王ヘロデは至つて殘忍酷薄なる人にて、其の人民は亦不信仰と邪惡とに陥
つて居つた。斯かる時代に、ザカリヤとエリサベツとの如き有徳の人を見るのは、墨
を流したやうな天に、一つ二つの明星を認むる趣がある。ザカリヤは二十四組に別
れた祭司の、第八なるアビヤの組に屬し、其の妻と「二人ながら、神の前に正しく
して、主の誡命と定規とを皆缺げなく行ふ」て居つた。「此の如く夫婦の中を愛のセ
タシトにて結ばれ、敬虔の徳にて堅められたものは、能く三倍の幸福を樂しむことが
出来る。既に神に結合せられた上に亦、相互に結合せられた家庭の生活には、誰も水
をさし得るものがない。生に於ける一切の誘惑も、死に伴ふ凡ての恐怖も、彼等を奈

何ともすることが出来ない。」彼等は眞に幸福なる老夫婦であつた。(五至七)

◎唯一つ兩人の間に物足りないのは、子供のないことであつた。彼等は其の爲に、多年神に祈つて居つたものと見える。ザカリヤは其の組の順番に當り、祭司の慣例にしたがふて籤をひき、エルサレムの宮の聖所に入りて香を焼くこととなり、群衆は外庭にて祈禱する時、忽ち天の使が現はれて香壇の右に立ち、「ザカリヤよ、懼るな、汝の願は聽かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生まん。汝其の名をヨハネと名くべし」と告げた。彼等の長い間の祈禱は、斯くして終に神の應驗を見るに至つたのである。それにつけても、私共は應驗の遅い祈禱を、拒絶せられたものの如く、思達へてはならぬ。アブラハムの子孫にカナンの地を與へんとすの御誓は(創十五〇八)五百年の後に實現せられ(書二一〇四三至四五)カレブにヘブロンを得させんとすの約束は、四十五年の後に成就せられたではないか。(書十四〇六至十四)大切なるは如何なる場合にも「落膽せずして常に祈るべき」(路十八〇一)ことである。(八至十四)

◎天の使はヨハネの人物を豫言して、彼が主の前に大なるべき事、葡萄酒と濃き酒とを飲まぬ事、及び母の胎を出るや聖靈にて満さるゝ事の三箇條を擧げた。主の前に大なるとは、人格の優れたことである。又人を役ふ爲にあらず、多くの人に奉仕する爲に生くることである。葡萄酒と濃き酒とを飲まぬとは、克己の謂である。パウロが「我が體を打擲きて之を服従せしむ」(哥前九〇二七)といふたのは、其れである。聖靈にて満さるゝとは、又神の靈によりて照され、潔められ、動かさるゝことである。何卒私共も、此うした意味に於て、彼の生活にあやかり度ものである。(十五)

◎ヨハネの事業に就ては、彼は豫言者エリヤと同じ精神、又能力を以て、往いてイスラエルの民心を神に歸嚮せしめ、間もなく世に現はれんとする耶穌基督を、彼等に紹介せんとして居る。こゝに「父の心を子に、戻れる者を義人の聰明に歸らせ云々」とあり。其の如く父の心に、これ迄等閑にして居つた我が子の救を案じ煩ふやうになるのは、リバイバルの一つの特徴である。又「戻れる者を義人の聰明に歸らしむ」ることは、ヨハネの場合と同じく、今日の私共が亦、専心努力せねばならぬ所の務ではないか。(十六、十七)

◎ザカリヤは折角天の使によりて示された、「此の嘉音信」を疑ふた爲に、暫し物いふことの出来ぬ聖者となつた。神が彼の不信仰を戒め給ふたのである。聖潔に關する著述家マーシャルが青年時代に、甚しく己が罪に責められ、到底神の怒を免れぬものと、懊惱して居る時。グッドウイン博士は彼にむかひ、「成程君の從來犯せる罪は重い。しかし乍ら君は現在それよりも大なる罪を犯して居る。即ち神が耶穌によりて、君を救ひ給ふことを拒絶する、不信仰の罪を犯して居る」といふのを聞いて、マーシャルは大に發明する所あり、それから新しい恵に進み入つたといふことである。それ故私共も戒めて、不信仰の罪に陥つてはならぬ。(十八至二十)

(二) 處女 マリヤ

【ルカ傳第一章二十一至三十八】

二二 民はザカリヤを俟ちて、其の聖所の内に久しく留まるを怪しむ。二三 遂に出で來りたれど語ること能はれば、彼らその聖所の内にて、異象を見たる

ことを悟る。ザカリヤは、ただ首にて示すのみ、なほ、啞なりき。二三 斯て務の日滿たれば、家に歸りぬ。

二四 此の後その妻エリサベツ孕りて五月ほど隠れたりて言ふ、二五 『主、わが耻を人の中に雪がせんとして我を顧み給ふときは、斯く爲し給ふなり』
二六 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレといふガリラヤの町に在る處女のもとに、神より遣はさる。二七 この處女はダビデの家のヨセフといふ人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云ふ。二八 御使、處女の許にきたりて言ふ『めでたし、恵まるる者よ、主なんちと偕に在せり』二九 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、三十 御使いふ『マリヤよ懼らな 汝は神の御前に恵を得たり。三一 視よ、なんち孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし、三二 彼は大

ならん、至高者の子と稱へられん。また主たる神これに其の父ダビデの座位をあたへ給へば、三三 ヤコブの家を永遠に治めん。その國は終ることなかるべし』三四 マリヤ御使に言ふ『われ未だ人を知らぬに、如何して此の事のあるべき』三五 御使こたへて言ふ『聖靈なんちに臨み、至高者の能力なんちを被はん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と稱へらるべし。三六 視よ、なんちの親族エリサベツも、年老いたれど、男子を孕りり。石女といはれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。三七 それ神の言には能はぬ所なし』三八 マリヤ言ふ『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』三九 御使はなれ去りぬ。

◎ザカリヤは啞者となりて聖所の外に出で來つた。これは不信仰なる宗教家が、人の前に口を開く資格のないことを、示すものとも言へやう。スボルジョンは或集會にて、

先頃疑惑と恐怖との中を通つたといふ様な話をする。其の長老の一人が聞答あて、
 「貴君は宗教上の指導者として、私は先頃人の物を盗んだとか、又は暴言を吐いたとか、いふ様なことが言へますか。若しそれが言へないなら、どうして神を疑ひ奉つた罪のみ、さう公けに吹聴せられますか」と、言はれて。スボルジョンは恐縮し、其の不注意を謝したといふことがある。それ故私共も浮かり不信仰の事を口外せぬやうに注意し、反つて機會さへあつたら、信仰の道を人に傳ふることを心がけねばならぬ。(二一至二三)

◎エリサベツは老年に及んで妊娠し、「主わが耻を人の中に雪がせんとて、我を顧み給ふ時は、斯く爲し給ふなり」といふて、其の人の母たるの特權を與へられたるを感謝した。乃ち「天國は母の足下にある。」(ロウバツク)「妻たるよりも愈れること一つあり、母たることは是れである。」(セツファー)「一人の善き母は百人の教師に匹敵する。」(ハーバート)「母の一斤は宗教家の十斤に當る。」(西班牙の諺)などいふこともあれば。人の母たる者は其の大なる特權を自覺して、それに副ふだけの奉仕をなさん覺悟が何より肝

要である。(二四至二五)

◎傳説によれば、マリヤは中肉中脊にて、金色の頭髮を戴き、淡褐色の眼を備へた、美しき處女にて、其の性質は敬虔、柔和、質朴、熱誠、好んでダビデの詩を唱ひ、凡ての人から敬慕せられて居つた。神の使ガブリエルが彼女に現はれたのは、或朝彼女が町の西南の端にある泉に、水をくみに出た時のことであつたと、いふてある。ガブリエルは言ふた「めでたし、恵まるゝ者よ、主汝と偕に在せり」と。昔ソクラテスは、彼が人と生れて動物と生れざりし事と、自主に生れて奴隸に生れざりし事と、男に生れて女に生れざりし事とを、感謝したといひ。「孔子は女子と小人とは養ひ難し」と説き。佛教には又「女人惡人」外面如菩薩内心如夜叉などいふ語があるらしい。しかし乍ら基督教は女性を尊敬する宗教である。アウガスチンが「基督は女から生れ給ふた。これは男女兩性の、どちらも失望するとなからしめん爲である」といふた如く。神の子が人となり給ふ時、殊に聖き婦人に宿り給ふたといふのは、又一しほに女性の尊貴を示すものと見ねばならぬ。(二六至二八)

◎天の使は又マリヤに告げて言ふた、「視よ、汝孕りて男子を生まん、其の名を耶穌と名ぐべし」と。耶穌とは救主といふの意味である。或人の言に「神といへば其の威嚴を示し、エホバといへば其の自存をあらはし、主といへば權力、基督といへば任務、インマヌエルといへば親和、仲保者といへば執成、助主といへば、援助を意味する。しかし乍ら耶穌てふ以外に、私共のよりたのみて、救はるべき他の名を賜ひしことはない」とあり。ベルナルドは又「耶穌てふ御名は、我等の口には蜜、耳には音楽、心には喜である」といふて居る。げに「耶穌にまさる名は天地にない」のである。
 (一九五三三三)

◎マリヤはまだ結婚もしない身に、どうして斯かる事のあり得べきかを訝かると。天の使は答へて、「聖靈汝に臨み、至高者の能力汝を被はん。此の故に汝が生む所の聖なる者は、神の子と稱へらるべし」と云ふた。つまり神の獨子が聖靈によりて、彼女に宿り給ふべきことを示されたのである。耶穌の奇跡的降誕に就いて、アウガステンは言ふた、「其の初に麥の種のない所に麥を生せしめた神は、亦能く人の種のない所に、

人を宿らせ給ふたのである」と。アサナシアスは又、神が人となり給ふ秘義を説いていふた、「モーセがホレブの山にて見た火焰は、棘に燃えて、しかも棘を燃やさなかつた如く、神は人の姿をとり給ひたれども、人では在し給はなかつたのである」と。乃ち「耶穌は基督、活ける神の子なり」(太十六〇十六)とは、基督教の最も大切なる根本真理であることを知らねばならぬ。(三四至三七)

◎マリヤは言ふた「視よ、我は主の婢女なり、汝の言の如く我に成れかし」と。彼女が如何に自任自重して、神への奉仕を勵んだか、想像せられるではないか。カザリン、ブースが「我今にして一箇の婦人たるは、天の使の長ガブリエルたるに愈るを知る」といふたのも、思ひ合はされる。カーライルの言に「最も恐ろしき不信仰は、汝自らに對する不信仰である」とあり。私共は神が我が如き者をさへ、用ゐ給ふといふ確信によりて、起ち上らねばならぬ。(三八)

(三) 聖徒の交際

【ルカ傳第一章三十九至五十六】

三九 この頃マリヤ立ちて、山里に急ぎ往き、ユダの町にいたり、四十 ザカリヤの家に入りてエリサベツに挨拶せしに、四一 エリサベツ、その挨拶を聞くや、兒は胎内にて躍れり。エリサベツ聖靈にて満され、四二 聲高らかに呼びはりて言ふ「なんなの中に汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。四三 わが主の母われに來た、われ何によりてか之を得し。視よ、なんぢの挨拶の聲、わが耳に入るや我が兒、胎内にて喜びをどれり。四五 信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり」四六 マリヤ言ふ「わが心、主を崇め、四七 わが靈は、わが救主なる神を喜び奉る。四八 その婢女

の卑しきをも顧み給へばなり。視よ、今よりのち萬世の人、われを幸福とせん。四九 全能者、われに大なる事を爲し給へばなり、五十 その御名は聖なり、その憐愍は代々、畏み恐るる者に臨むなり。五一 神は御腕にて、權力をあらはし、心の念に高ぶる者を散し、五二 權勢ある者を座位より下し、卑しき者を高らし、五三 飢ゑたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給ふ。五四 また我らの先祖に告げ給ひし如く、五五 アブラハムと、その裔とに對する憐愍を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給へり」五六 斯てマリヤは、三月ばかりエリサベツと偕に居りて、己が家に歸れり。

◎昔の人は「快意の事友に若くなく、快友の快は談に若くなし」といふた。況して同じ愛の神に屬する信仰の友が、相見て隔てなく心の誠を語り合ふ位、愉快な事が滅多にあらうか。マリヤは天の使の告げを受くるや、乃ち起ちて山里なるユダヤの町に往き、エリサベツを訪ねて、そこに三ヶ月ばかり滞在した。斯くて年齢こそ異れ、二箇の篤信なる婦人が、共に談じ、共に歌ひ、共に祈りて、過した月日は、どんなに楽しいものであつたらうか。ソロモンは言ふた、「鐵は鐵を研ぐ、斯の如く其の友の面を研ぐなり」と。(箴二七〇十七) 彼等が之によりて復一段と、深い神の恩寵を味ひ、一層奉仕の精神を強うしたのは、想像に難くない。實に聖徒の交際は床しきものである。(三九至四四)

◎エリサベツは言ふた、「信せし者は幸福なる哉、主の語り給ふ所は必ず成就すべければなり」と。その事に就いて或人の説に、「神が若し其の約束を行ひ給はぬ如きことがあつたとすれば、之によりて最も大なる損害を被る者は、私共ではなくて神である。なぜかといふに、それでは神の恩恵も、正義も、愛も、聖潔も、成立たないからであ

る。けれども神は固より、そんな不眞實なお方でないから、私共は何時もダビデと共に、神萬づ備はりて、鞏固なる永久の契約を我になし給へり（母後二三〇五）と、言はねばならぬ」といふてゐる。大將ウイリアム、ブリスが「汝若し唯信せば、神の約束は確實なり」との言は、亦同じ意味を語つたものではないか。（四五）

◎マリヤは言ふた「我が心主を崇め、我が靈は我が救主なる神を喜び奉る」と。此の如く眞の宗教の中に、言ひ難きの歡喜がある。神への奉仕の中に、快樂が見出される。それ故アブラハムの妻サラは「神我を笑はしめ給ふ」（創二一〇六）といひ。ネヘミヤは「エホバを喜ぶことは、汝等の力なるぞかし」（尼八〇十）と、其の人民に告げたのである。今日の私共も亦、此の神より來る歡喜を以て、世の懊惱煩悶の中にある人々を慰め得る様でなくてはならぬ。「救世軍人の笑顔は貧民窟の日光だ」と、稱へられて居るではないか。（四六至四八）

◎彼女は尙續いて言ふた「全能者、我に大なる事をなし給へり」と。或學者の説に、「太古に若し罪が婦人を通じて世に入つたものとするれば、後の世に救主は、婦人を通じて

世に現はれ給ふた。即ちベツレヘムはエデンを償ひ、マリヤはエバによりて失はれたものを恢復した。基督教は婦人の地位を一變したのである」とあり。ツラムバルは又「マリヤは婦人の地位を高め、母性を崇めしむる爲に神から選ばれたものである。それ故彼女は凡ての婦人と、又凡て其の母、妻、姉妹、及び娘を愛する男子とによりて、尊敬を受くべきものである」と説いて居る。げに神はマリヤを通じて彼女のみならず、凡ての人類に、大なる事を爲し給ふたのである。（四九、五十）

◎歴史家ギツポンは羅馬の舊都を訪ねて、昔驕奢を極めた跡が、今は廢墟となつて居る状態を見て、徐ろにマリヤが「神は御腕にて權力をあらはし、心の念に高ぶる者を散らし、權勢ある者を座位より下し云々」の言を思ひ浮べて、感慨に堪ず。それから羅馬衰亡論の著作を思ひ立つたのだと、傳へられて居る。奈破翁が露西亞を攻めんとする時、或婦人が彼に對ひ「人は計畫すれども神は處置し給ふ、御注意あれ」と忠告すると。彼は笑ふて、「貴夫人よ、私は自分で計畫も處置もするのである」といふたが、それにも拘らず、彼の計畫は全然齟齬した。彼の運命はモスコの敗軍以來、日日没落

に赴いたのである。神は此の如く「心の念に高ぶる者を散らし、權勢ある者を座位より下し」給へば、私共は其の公義なる審判を畏まねばならぬ。(五一至五三)

◎神が救主耶穌を世に降し給ふことは、殆んど創世からの御約束であつた。ダンニグ博士の説によれば、「神は紀元前四千年、アダムに對ひて、救主が婦人の苗裔より出づべき事を告げ。(創三〇五) 紀元前二千年、アブラハムに對ひて、耶穌が彼の子孫より現はるべきことを示し。(創二二〇八) 紀元前千七百年、ヤコブに對ひては、彼がユダの族より出づべき事。(創四九〇十) 紀元前七百三十年、イザヤに對ひては、彼がエツサイの家筋より生るべき事(賽十一〇二) 紀元前七百年、ミカに對ひては、彼がベツレヘムに産聲をあぐべき事。(米五〇二) 紀元前五百五十年、ダニエルに對ひては、彼が來るべき時の事。(但八〇二四)を豫告し。いよいよ彼が誕生の間際になりては、マリヤに其の人を、(路二〇二一)牧者に其の日を、(路二〇二二)東方の博士に其の家を、(太二〇九)教へ給ふた」とあり。耶穌の降世は神が長い間の御約束を、實現せられたものに外ならないのである。(五四至五六)

(四) 此の子は如何なる者にか成らん

【ルカ傳第一章五十七至八十七】

五七 惜エリサベツ産む期みちて男子を生みたれば、
 五八 その最寄のものの親族の者ども主の大なる憐憫を
 エリサベツに垂れ給ひしことを聞きて、彼とともに
 喜ぶ。五九 八日めになりて其の子に割禮を行はんと
 て人々來り、父の名に因みてザカリヤと名づけんと
 せしに、六十 母こたへて言ふ「否、ヨハネと名づく
 べし」六一 かれら言ふ「なんぢの親族の中には此の
 名をつけたる者なし」六二 而して父に首にて示し、
 いかに名づけんと思ふか、問ひたるに、六三 ザカリヤ
 書板を求めて「その名はヨハネなり」と書きしかば、
 みな怪しむ。
 六四 ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物

いひて神を讃めたり。六五 最寄に住む者みな懼ない
 だき、又すべて此等のこと徧くユダヤの山里に言ひ
 難されたれば、六六 聞く者みな之を心にとめて言ふ
 「この子は如何なる者にか成らん」主の手かれと偕に
 在りしなり。六七 斯て父ザカリヤ聖靈にて満され預
 言して言ふ、六八 「讀むべきかな、主イスラエルの神
 その民を顧みて贖罪をなし、六九 我等のために救ひ
 角を、その僕ダビデの家に立て給へり。七十、これぞ古
 へより聖預言者の口をもて言ひ給ひし如く、七一 我ら
 を仇より、凡て我らを憎む者の手より取り出したま
 ふ救なる。七二 我らの先祖に憐憫をたれその聖なる
 契約を思し、七三 我らの先祖アブラハムに立て給ひ

し御誓を忘れずして、七四 我らを仇の手より救ひ、
七五 生涯主の御前に、聖と義とを以て懼なく事へし
め給ふなり。七六 幼児よ、なんぢは至高者の預言者と
稱へられん。これ主の御前に先立ちゆきて其の道を
備へ、七七 主の民に罪の赦による救を知らしむれば

なり。七八 これ我らの神の深き憐愍によるなり。こ
の憐愍によりて、朝の光、上より臨み、七九 暗黒と
死の陰とに坐する者をなてらし、我らの足を平和の路
に導かん。八十 斯て幼児は漸に成長し、その靈強く
なり、イスラエルに現るる日まで荒野にゐたり。

◎ 儲エリサベツは、期満ちて男子を生んだが、兼て天の使に示された通り、之にヨハ
ネといふ名を命けた。(路一〇十三) ヨハネとは「神の恵」或は「神の賜」といふやうな意
味である。しかも彼は名詮自稱、眞に神の恵、又は賜として生れた、所謂申し子で
あつた。申し子といへば、アブラハムの子イサクも、ハンナの子サムエルも、亦親達
が眞實を籠めた祈禱の應驗として、授けられたる申し子であつた。而して何れも後、
神に悦ばれ、又用ゐらるゝ人物となつたことを見れば、大切なるは人の親たる者の祈
禱である。ナポレオンは其の當時の佛國に、最も缺けた者は母であるといふたが。同
じ筆法を以てすれば、今の日本に最も缺けた者は、祈禱する母であると、言はねばな
るまいと思ふ。(五七至六三)

◎ 是に至りてザカリヤの口は忽ち開け、其の舌ゆるみ、物いひて神を讚美したとある。
元來不信仰には歌がない。讚美は信仰生活の附屬物である。「信仰と喜悅とは、歌の
源泉である。」ザカリヤは去九ヶ月間、沈黙の中に深く自ら省み、これ迄にないほど厚
い神の恵を味ふて居つた故、今一度物いふことが出来る様になると、直ぐに聲張りあ
げて、御名を讚美したものと見える。ジョン、ウエスレーが、ブラムエルに初對面の
節、其の一番初めの挨拶は、「兄弟よ、君は神を讚美し得るか」といふことであつた。
私共は神を讚美し得る基督者とならねばならぬ。「讚美は直き者に適はしきなり」(詩
三三〇一)と、詩篇の作者は言ふたのである(六四)

◎ 附近の人々は、此の不思議なる童子の事を聞傳へ、「此の子は如何なる者にかなら
んと」噂し合ふた。昔獨逸の片田舎に一小學教師があり、途をゆく時其の教へ子に會
ふと、一々丁寧に帽子を脱いで之に敬禮した。「なぜ、そんなになされますか」と、問
ふ者があると。答へて、「此の子女等の中から、他日如何なる偉人が出るかも知れない
からである」といふたが。果して彼の教へ子の中から、マルチン、ルーテルが現はれ

たといふことがある。それ故私共は兒童を尊重し、必ずしも所謂偉人が、彼等の中から出でずとも、少くとも神の御旨に適ふ善人が現はるるやう、養育せんことを心がけねばならぬ。三十四年後の天下は、今日小學校に通學する子供等の天下となるのではないか。(六五、六六)

◎ザカリヤは聖靈にて満され、神が應て耶穌基督によりて、與へんとし給ふ恵を預言して言ふた。「讚むべき哉主イスラエルの神、民を顧みて贖罪をなし、我等の爲に救の角を其の僕ダビデの家に立て給へり。これぞ古へより聖預言者の口を以て、言ひ給ひし如く、我等を仇より、凡て我等を憎む者の手より、取り出し給ふ救なる」と。之は救の事である。彼は又言ふた、「我等の先祖に憐憫を垂れ、其の聖なる契約を思し、我等の先祖アブラハムに立て給ひし御誓を忘れずして、我等を仇の手より救ひ、生涯主の御前に聖と義とを以て、懼なく事へしめ給ふ也」と。これは聖潔の事である。私共は神が耶穌によりて備へ給ふた此の救と、聖潔と、二重の恵を経験して居らねばならぬ。「エホバの器を擔ふ者よ、汝等潔くあれ」(賽五二〇十二)と、命せられて居るではない

か。(六七至七五)

◎彼は又其の子ヨハネの將來に就いて云ふた。「幼兒よ汝は至高者の預言者と稱へられん。これ主の御前に先立ちゆきて其の道を備へ、主の民に罪の赦による救を知らしむればなり」と。これは彼が救主耶穌の先驅者として、往いて人民に悔改めを促がし、彼等が救に入るの準備をなさしむべきことを言ふたものである。フィリップ、ブルツクスの言に「私が若し主の道に、煉瓦一つでも置いて、其の修理をたすけ、後世子孫をして其の上を通つて、神の國に入らしむることが出来たならば、私の本望である」と、いふてある。私共もどうか、然うした覺悟にて、耶穌の爲に其の道備へをさせ戴きたいものである。(七六至七九)

◎ヨハネは野の人として、飽迄も敬虔、眞實、熱誠、剛毅なる品性を養ひ上げたものと見える。「斯くて幼兒は漸に成長し、その靈強くなり、イスラエルに現はる、日まで荒野に居たり」とは、其の謂ではないか。古人の言に「自然は神の舊約聖書である。」(モオドル、マーカー)「自然は神の默示である。」(ロンクフェラウ)「自然は神を著者とする書

卷である。「ハアツエー」天才に取りては唯一巻の書ありて、それは自然である。「マダ
ム、アルゼー」など、あれば私共は周圍を取巻く自然によりて、教へらるゝ所がなくて
はならぬ。即ち神が自然を通じて語り給ふ御聲を、聞きわけたいものである。(八十)

(五) クリスマス

【ルカ傳第二章一至二十四】

一 その頃、天下の人を戸籍に着かすべき詔令カイザ
ル、アウグストより出づ。二 この戸籍登録は、クレ
ニチ、マリヤの總督たりし時に行はれし初のものな
り。三 さて人みな戸籍に着かんとて、各自その故郷
に歸る。ヨヨセフもダビデの家系また血統なれば既
に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に着かんと
て、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダ
ビデの町ベツレヘムといふ處に到りぬ。六 此處に居
るほどに、マリヤ月満ちて初子をうみ之を布に包み

て馬槽に臥させたり。旅舎に在る處なかりし故なり。
この地に野宿して夜、群を守りたる牧者ありしが、
九 主の使その傍らに立ち、主の榮光その周圍を照し
たれば、甚く懼る。十 御使かれらに言ふ「懼るな。視
よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を
我なんぢらに告ぐ、十一 今日ダビデの町にて汝らの
爲に救主うまれ給へり、これ主キリストなり。十二
なんぢら布にて包まれ、馬槽に臥したる嬰兒を見ん
はその徴なり」十三 忽ちあまたの天の軍勢御使に加

はり、神を讚美して言ふ、十四 「いと高き處には榮
光、神にあれ。地には平和、主の悦び給ふ人にあれ」
十五 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがひに語
る「いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給ひし起
れる事を見ん」十六 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセ
フと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあふ。十七 既に
見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば
十八 聞く者はみな牧者の語りしことを怪みたり。
十九 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思
ひ回せり。二十 牧者は御使の語りしことと凡ての事
を見聞せしによりて神を崇め、かつ讚美しつつ歸れ

り。
三二 八日みちて幼児に割禮を施すべき日となりたれ
ば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、そ
の名をイエスと名づけたり。
三三 モーセの律法に定めたる潔の日満ちたれば、彼
ら幼児を携へて、エルサレムに上る。三三 これは主
の律法に「すべて初子に生るる男子は主につける聖
なる者と稱へらるべし」と録されたる如く、幼児を
主に獻げ、三四 また主の律法に「山鳩、一對あるひ
は家鴿の雛二羽」と云ひたるに遵ひて、犠牲を供へ
ん爲なり。

◎ユダヤは當時羅馬の屬國となつて居つた。羅馬皇帝は名をカイザル、アウグストと
呼び、其の任命したるシリヤの總督クレニオの下には又、ユダヤの屬王ヘロデが支
配をして居つた。(太二〇一)元來羅馬の風習として、人民は其の現住地にて戸籍調査を受
けるのであつたが。唯ユダヤ人のみは、之を其の原籍地にて行ふ習慣であつた故。「人

皆戸籍に著かんとて、各自その故郷に歸る様な始末となり。ヨセフも既に孕める許嫁の妻マリヤと共に、現住地ナザレを立出で、ベツレヘムに赴くこととなつたのである。此の如く耶穌の御誕生が、戸籍登録の事と關係があつたといふのは、暗示に富んだ物語である。なせかといふに、彼は人間社會の彼方此方に離散せる、族籍不明の人民を呼集めて、之を天國の民たらしめん爲に、世に現はれたお方だからである。彼が後其の弟子達に對ひ「汝等の名の天に録されたるを喜べ」(路十二十)と仰せられたのは、其の爲ではないか。諸君の名は既に天の戸籍簿に登録せられて居るであらうか。(一至五)

◎ベツレヘムに滞在中マリヤは月満ちて耶穌を生み、之を布に包みて馬槽に臥さしめた。これは旅舎に居る處なかりしが爲であつた。それから百年程後に出たジャスチン、マターは、耶穌が生れ給ふたのは、洞穴にて、平生厩に用ゐられた所であつたといふて居る。何れにもせよ、萬民の救主たるべき彼が、厩に生れて馬槽に置かれ給ふたといふのは、如何にも恐れ多いことである。その事に就いてペルナルドは言ふた、「なせ主は厩の中に生れ給ふたか。これは世の榮華を賤み、人生の虛榮を戒むる爲であつ

たに相違ない。彼の穉き御姿は、其の儘私共にとつての大なる教訓であつた」。けれども今日の私共は、其の當時の世の人のやうに、耶穌をして身を置くの所なからしむる如きことがあつてはならぬ。「視よ、我戸の外に立つて叩く」(黙三〇二十)と、彼は宣ふて居るのではないか。各自心の戸を廣く開いて、彼を迎へ入れねばならぬ。(六、七)

◎天の使は夜、羊の群を守る牧者に現はれて、耶穌御降誕の事を告げ。「視よ、此の民一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を、我汝等に告ぐ云々」といふた。これは實際「大なる歡喜の音信」であつた。なせかといふに、「悔改むる一人の罪人の爲に神の使達の前に歡喜あるべし」(路十五十)ともありて。此の世に罪人の救に入る位、喜ばしい事はない。然るに耶穌は、其の罪人(救の爲に世に現はれ給ふたからである。彼が御誕生の報導は、斯くして、誰よりも先に、質朴單純なる勞働者仲間に傳達せられた。所謂「貧き者は福音を聞かせらる」(太十一〇五)とは、その事ではないか。

◎忽ち數多の天の使達が現はれ、神を讚美して言ふた「至高き所には榮光神にあれ、地には平和、主の悦び給ふ人にあれ」と。耶穌が世に現はれ給ふた一つの大きな目的

は、平和を地上に齎らし給ふことであつた。「汝等の中の戦争は何處よりか。分争は何處よりか、汝等の肢躰の中に戦ふ慾より來るにあらずや。」(雅四〇一)しかし乍ら耶穌は人を其の私わたくしの慾よくより救ふて、愛の生活せいくわつに入らしめ給ふ。それ故彼の福音の普及する處には、それだけ平和が世に普及する。「エホバは諸ろの國を鞫き、多くの民をせめ給はん。斯くて彼等は其の劍をうちかへて鋤となし。其の鎗をうちかへて鎌となし。國は國に對ひて劍を擧げず、戰鬪の事を再び學ばざる可し。」(賽二〇四)耶穌によりて、箇人箇人が先づ其の胸中に平和を興へられ。終には推及ばして、世界に眞の平和の時代の到來せん日を、只管待ち望むのである(十三、十四)

◎牧者は馬槽の嬰兒を見に来て、其の子に就き、天の使の言ふたることを吹聴した。其の如く私共も神の恵を、見た儘、聞いた儘、證言せねばならぬ。然るにマリヤは凡て此等の事を心に留めて思ひ回した。同じ様に、私共は又心を潜めて、神の御業の不思議なるを思ひめぐらさねばならぬ。「暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ、耳を當て聽くことを屋の上にて宣べよ。」(太十〇二八)私共の宗教には、靜に坐して祈

講黙想する半面と、又外に出て大聲に宣傳する半面と、兼ね備はつて居らねばならぬ。(十五至二十)

◎八日目に、當時の風にしたがふて幼兒に割禮を行ひ、兼て天の使から示された通り、之に「耶穌」といふ名を命じた。耶穌とは救主といふ意味である。又四十日目にエルサレムの宮に連れ行きて、之に獻兒式を行ふた。彼等が「山鳩一對、或は家鴿二羽」を供ふる形式を採用したのは、其の生活の豊かならざる爲に、殊に略式の方を實行したものと見える。(利十二〇六至八)今日の私共も亦、逸早く其の子供を神に獻げ、之を神からの預り物として、大事に育てる必要がある。「幼兒らの我に來るを許して止むな」(路十八〇十六)と、耶穌は宣ふて居るではないか。(二一至二四)

(六) 少年時代

【ルカ傳第二章二十五至五十二】

三五 觀よ、エルサレムにシメオンといふ人あり。こ

の人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められん。

とを待ち望む。聖霊その上に在す。二六 また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、二七 此のとき、御霊に感じて宮に入る。兩親その子イエスを携へ、この子のために律法の慣例に遵ひて、行はんとて來りたれば、二八 シメオン、イエスを取りいだき、神を讀めて言ふ、二九 「主よ今こそ御言に循ひて、僕を安らかに逝かしめ給ふなれ、わが目は、はや主の救を見たり。三〇 是もろもろの民の前に備へ給ひし者、三一 異邦人を照す光、御民イスラエルの榮光なり」三二 かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、三四 シメオン彼らを祝して母マリヤに言ふ「視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん爲に、また言ひ逆ひを受くる徴のために置かる。三五 一劍なんちの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顯ばれん爲なり」

預言者あり、年いたく老ゆ。處女の時、夫に過きて七年ともに居り、三七 八十四年寡婦たり。宮を離れず夜も晝も、斷食と祈禱とを爲して神に事ふ。三八 この時すすく寄りて神に感謝し、また凡てエルサレムの拯贖を待ちのぞむ人に、幼児のことを語れり。三九 さて主の律法に遵ひて、凡ての事を果したれば、ガリラヤに歸り、己が町ナザレに到れり。四十 幼児は漸に成長して健かになり、智慧みち、かつ神の恵その上にありき。四一 斯てその兩親、過越の祭には年毎にエルサレムに往きぬ。四二 イエスの十二歳の時、祭の慣例に遵ひて上りゆき、四三 祭の日終りて歸る時、その子イエスはエルサレムに止りたまふ。兩親は之を知らずして、四四 道伴のうちに居るならんと思ひ、一日路ゆきて、親族、知邊のうちを尋ねれど、四五 遇はぬに因りて復たづれつつエルサレムに歸り、四六 三日のち、宮にて教師のなかに坐し、かつ聴き、かつ問

ひる給ふに遇ふ。四七 聞く者は皆その聰と答とを怪しむ。四八 兩親イエスを見て、いたく驚き、母は言ふ「兒よ、何故かかる事を我らに爲しぞ、視よ、汝の父と我と憂ひて尋ねたり」四九 イエス言ひたまふ「何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか」五十 兩親はその語りたまふ事を悟らず。

五一 斯てイエス彼等とともに下り、ナザレに往きて順ひ事へたまふ。其の母これらの事をことごとく心に藏む。五二 イエス智慧も身のたけも彌増り神と人となすます愛せられ給ふ。

◎「彼の額には十二月の季節が來て居れど、彼の心には五月の暖い風が吹いて居る」と。シメオンは、此うした種類の老人であつた。彼は義且つ敬虔にして、兼々救主の出現を待ち望む人であつたが。神は彼に「主の基督を見ぬうちは死を見ず」といふ、有難き啓示を賜はつた。それが愈々時節到來して、幼き耶穌を目のあたり見、之を抱き上げる事が出來たのであるから、彼の喜は知るべきである。「主よ、今こそ御言に循ひて、僕を安らかに逝しめ給ふ」と、彼は満腔の感謝を捧げたのである。或人が此のシメオンの事を語りて、「彼の頭上には神あり、其の唇には歌あり、其の腕には耶穌あり、其の眼には天國があつた」といふて居る。彼は眞に祝福せられたる老人であつ

◎シメオンはマリヤに對ひて言ふた、「此の幼兒は、イスラエルの多くの人の、或は倒れ、或は起たん爲に云々。」又「これは多くの人の心の念の顯はれん爲なり」と。其の如く、耶穌は人生の最大試金石である。「坩堝によりて銀を驗し、鎗によりて金を驗す」(箴二七〇二二) 如く、耶穌によりて人の心と、生活とは驗めされる。即ち「凡て惡を行ふ者は光を憎みて光に來らず、其の行爲の責められざらん爲なり。眞を行ふ者は光に來る。其の行爲の神によりて行ひたることの顯はれん爲なり。」(約三〇二十、二二)とある通りである。シメオンは又マリヤに就いて、「劍汝の心をも刺し貫くべし」といふた。これは彼女が耶穌の爲に、一方ならぬ苦勞をなすべきことを預言したのである。「耶穌の母と雖も、十字架なしには冠が得られなかつた」と、ホール教授が言ふたのは、眞實のことである。(三三三至三五)

◎「アンナは聖書中、最も幸福なる寡婦であつた」と、いふた人がある。彼女は當時八十四歳であつたのか、又は寡婦になつてから八十四年を過したのか、詳かでない。

若し後者であれば、彼女は當時百歳を、すつと越して居らねばならぬ勘定である。使徒パウロは後に、「眞の寡婦にして、獨り残りたる者は、望を神に置きて夜も晝も絶えず、願と祈とを爲す」(提前五〇五) といふたが、其の言通りを實地に行ふたのが、彼女であつた。彼女は又婦人にして、耶穌を世に證言したる第一人者であつた。さても大なる特權を賦與せられたものと、言はねばならぬ。(三六至三八)

◎兩親に連れられてナザレに歸りたる後の耶穌は、「やゝに成長して健かになり、(健康上) 智慧滿ち、(智識上) 且つ神の恵其の上にあき(心靈上)」とある。如何に彼が、完全なる發育を遂げられたか、想像せられるではないか。ルーテルの書いた物に、或監督が頻りに耶穌の幼時を偲んで居ると、或夜の夢に彼はナザレにて、ヨセフが家の外に立たずみ、内の様子を窺ふと見た。そこにはヨセフが、大工をする傍に、耶穌が木屑を拾ふて居られる。折柄マリヤは食事の支度が出来たといふて兩人を呼ぶと。耶穌は食卓に就かうとして、戸外に立たずむ彼を認め、「母上よ、彼の人も一緒に呼ばませうか」と、言はれると思ふと、目が醒めたとある。耶穌の幼時は大方そんな風に、

質朴、勤苦、敬虔、慈仁なる家庭に、楽しく過されたものかと考へらるゝ。(三九、四十)

◎當時のユダヤでは、男子は十二歳にして「律法の子」と稱へられ、何彼に一人前の待遇を受くる習であつた。耶穌は十二歳の時、両親に伴はれ、始めて過越の祭にエルサレムに上られた。祭の日終りて歸る時、両親は彼がエルサレムに止り居るを知らず。道伴の中に居るならんと、浮つかり一日路ゆきて後に、彼が群の中に居らざることを見出し。翌日エルサレムに引返し、其の翌日彼が宮にて教師の中に坐し、問答して居られるのに遇ふた。人々は彼の聰明なるに驚いて居つたとある。此の如く耶穌は幼い時から道に志ざつた。彼は早くから聖書の研究に熱心せられたのである。モファアツトが少年にして家を出でんとする時、其の母は彼を戒めて、「汝は何處に往きても、聖書殊に新約聖書を読み、就中耶穌の御言を載せた福音書を讀め」といふと。モファアツトは必ず然かなすべきことを約束して去つたが、爾來嚴重に之を實行して、後あれほどの大宗教家となつたと、傳へられて居る。それ故大切なるは「幼き時より聖なる書を識る」(提後三〇十五)ことである。(四一至五十)

◎斯くて耶穌は両親と共にナザレに歸り、之に「順ひ事へ給ふ」たとある。彼は身を以て、人の子たる者が父母に孝順なるべき、模範を示されたのである。パウロは後に「子たる者よ、凡ての事皆両親に順へ、これ主の喜び給ふ所なり」(西三〇二十)といふて居る。彼が其の以後十七八年を如何に過されたかに就ては、「耶穌智慧も、身のたけも彌増り、神と人とに益々愛せられ給ふ」といふ、短い一句の中に盡されて居る。彼は理想的青年として、生活して居られたのである。(五一、五二)

(七) バプテスマのヨハネ

【ルカ傳第三章】

一 テベリオオ、カイザル在位の十五年ポンテオ、ピラトは、ユダヤの總督、ロテはガリラヤ分封の國守その兄弟ピリポは、イザリヤ及びテラコニテの地の分封の國守、ルサニヤはアピレネ分封の國守たり、ニアンナスとカヤパとは大祭司りしとき、神の言

荒野にてザカリヤの子ヨハネに臨む。三 斯くてヨルダン河の邊なる四方の地にゆき、罪の赦を得さす悔改のバプテスマを宣傳ふ。四 預言者イザヤの言の書に「荒野に呼はる者の聲す。主の道を備へ、その路すぢを直くせよ。もろもろの谷は埋められ、五もろ

もろの山と岡とは平げられ、曲りたるは直く、嶺しきは坦かな路となり、大人みな神の教を見ん」とと録されたるが如し。七 惜ヨハネ、バプテスマを受けんとて出できたる群衆にいふ「曠の裔よ、誰が汝らに来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ、八さらば悔改に相應いき果を結べ。なんぢら「我らの父にアブラハムあり」と心のうちに言ひ始む。我なんぢらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等を起し得給ふなり。九 斧ははや樹の根に置かる。然れば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし」十 群衆ヨハネに問ひて言ふ「さらば我ら何を爲すべきか」十一 答へて言ふ「二つの下着をもつ者は、有たぬ者に分與へよ、食物を有つ者もまた然せよ」十二 取税人もバプテスマを受けんとて来りて言ふ「師よ我ら何を爲すべきか」十三 答へて言ふ「定りたるもの外、なにをも促るな」十四 兵卒もまた問ひて言ふ「我らは何を爲すべきか」答へ

て言ふ「人を劫かし、また誣ひ訴ふな、己が給料をもて足れりとせよ」
 十五 民待ち望みたるれば、みな心の中にヨハネをキリストならんかと論ぜしに、十六 ヨハネ凡ての人に答へて言ふ「我は水にて汝らにバプテスマを施す、されど我よりも能力ある者きたらん、我はその鞋の紐を解くにも足らず。彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。十七 手には箕を持ちたまふ。禾場をきよめ、麥を倉に納めんとてなり。而して穀は消えぬ火にて焚きつくさん」
 十八 ヨハネこの他なほ、さまざまの勸をなして民に福音を宣傳ふ。十九 然るに國守ヘロテ、その兄弟の妻ヘロテヤの事につき、又その行ひたる凡ての悪しき事につきて、ヨハネに責められたれば、二十 更に復一つの悪しき事を加へて、ヨハネを獄に閉ぢこめたり。
 二 民みなバプテスマを受けし時、イエスもバプ

テスマを受けて祈り給へば、天ひらけ、三三 聖靈形をなして鳩のごとく其上に降り、かつ天より聲あり、曰く「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ」三三 イエスの教を宣べ始め給ひしは、年おほよそ三十の時なりき、人にはヨセフの子と思はれ給へり。ヨセフの父は、ヘリ、二四 その先はマタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセ、二五 マタテヤ、アモス、ナホム、エスリ、タンガイ、二六 マハテ、マタテヤ、シメイ、ヨセク、ヨダ、二七 ヨハナン、レサ、ゾロバベル、シヤルタル、ネリ、二八 メルキ、アテイ、コサム、

エルマダム、エル、二九 ヨセ、エリエセル、ヨリム、マタテ、レビ、三〇 シメオン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エリヤキム、三一 メレヤ、メナ、マタテ、ナタン、ダビテ、三二 エツサイ、オベテ、ボアズ、サラ、ナアソン、三三 アミナダブ、アアミン、アルニ、エスロン、パレス、ユダ、三四 ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、三五 セルゲ、レウ、ベレゲ、エベル、サラ、三六 カイナン、アルバクサテ、セム、ノア、ラメク、三七 メトセラ、エノク、ヤレテ、マハラレル、カイナン、三八 エノス、セツ、アダムに至る。アダムは神の子なり。

◎紀元二十六年の頃、羅馬の皇帝テベリオ、カイザルの下に、總督ピラト、國守ヘロデ、アンテパス（ヘロテ王の子である）大祭司アンナスとカヤパ等、人柄の餘り宜しくない人達が、揃ふてユダヤを支配する時代に、硬直熱誠の眞男兒、バプテスマのヨハネの如き人物が現はれて、罪の悔改めを叫んだのは、痛快の事である。昔の人も「父争子あれば、則ち身不義に陥らず。」士争友あれば、則ち身命を離れず」などいふ

て居る。社會には、いつも正面から、其の時代の罪惡を叱咤する正義の人がなくてはならぬ。後世サボナローラの以太利に於ける、ベルナルドの佛國に於ける、エドワードの米國に於ける如きは、何れも皆忠誠なる神の僕が、一世に罪の悔改めを促した、著しき實例である。私共は今も國民に悔改めを警告する、義人の聲を要するものである。(一至六)

◎ヨハネは罪人に義罰の來るべきこと、先祖や家柄の頼むに足らぬこと、又人は皆悔改めて、それに相應しき行の果を結ばねばならぬこと等を、警告した。「ヨハネは彼等が隱家の屋根をめくり、神の暴風を其の頭上に吹きこませた」と、バーカーが言ふたのは本統の事である。彼の説教には人の肺腑を穿つ能力があつた。群衆は彼に對ひ「我等何を爲すべきか」と問ひ。取税人も、兵卒も、こもこも來りて「我等何を爲すべきか」と尋ねたとある。ツラムバルの言に「聽衆をして、我等は我を爲すべきかと問はしめぬ説教は、大したものではない。又聽衆に、彼等が何を爲すべきかを答へ得ぬ説教者は、大したものではない」といふてゐる。私共は罪人を覺醒して、彼等に其の爲す

べき所を示し得る様でなくてはならぬ。(七至十四)

◎「謙遜は眞正なる偉人の、第一の證據である」と、ラスキンは言ふて居る。ヨハネは謙遜の人であつた。彼は自分の事を耶穌かと取違へる世の人に對ひ、「我は水にて汝等にバプテスマを施す。されど我より能力ある者來らん、我は其の鞋の紐を解くにも足らず、彼は聖靈と火にて汝等にバプテスマを施さん云々」と言ふた。ヨハネは唯水にて人の身體を洗ふ儀式を行ふたのであれど、耶穌は聖靈の火を以て、人の心の穢れを焼き盡すお方だといふ意味である。カルヴァインは言ふて居る「耶穌は麥を倉に納め、殻を火にて焼くとあれど、元來殻ばかりの様な私共は、どうなるとかと心配するには及ばない。凡て選ばれたる者は、假令其の性質が殻の如きものでも、神の恵によりて、能く麥に變化することが出来るのである」と。(十五至十七)

◎國守ヘロデ、アンテパスは、其の兄弟ビリポの妻ヘロデヤを奪ふて、同棲して居つたゆゑ、ヨハネはそれを譴責した。これはエリヤがアハブを責め、(王上二一〇廿至二四)ナタンがダビデを戒めたのと、(母後十二〇七)似たやうな話である。然るにヘロデはダ

ビデの様に悔改めないうで、反つてアハブのごとく其の心を頑固にした。即ち「更に復一つの悪き事を加へてヨハネを獄に閉ぢこめたり」と、ある通りである。ホイツチコートの言に、「第二の罪は第一の罪よりも、餘程犯し易いものである。又第二の罪は第一の罪よりも、餘程改め難いものである」と、いふてある。戒むべきことではないか。
 (十八至二十)

◎耶穌がバプテスマを受けて祈り給ふ時、聖靈の如く其の上へ降り、又天から神の御聲が聞へたとある。これは聖書に録された、彼が最初の祈禱である。此の以外に尙ルカ傳に録された彼の祈禱が、約七回あり。即ち劇しき労働の後(五〇六)使徒を任命する前夜(六〇十二)ペテロが信仰を告白する前(九〇十八)變貌山にて(九〇二八)ペテロの爲に(二二〇三三)ゲツセマネにて(二二〇四一)彼を殺す者の爲に(二三〇三四)及び其の死の間に於ける祈禱等(二三〇四六)これである。亦以て彼が如何に祈禱の人として、祈禱の生活を營み給ふたかを、察するに足るのである。(二一、二二)

◎彼が世に出で、福音を宣傳し始められたのは、其の三十歳の時のことであつた。孔

子が「三十にして立つ」と言ふたのも、思ひ合さるゝではないか。こゝに一つの問題があつて、それはルカ傳にある彼の系圖と、マタイ傳にある系圖とに、齟齬する點があり、殊にダビデからヨセフまでの間が、全部相違して居るのは、どうしたわけかといふことである。それに就いて種々なる説明もあることなれど、最も信據するに足らぬしい説は、ルカ傳の方はマリヤの家の系圖にて、マタイ傳の方はヨセフの家の系圖である。マリヤは家附の娘であつた故、ヨセフが彼女の父ヘリの家を嗣いだことになり、それで實家と、養家と、二つの系圖が傳はつたのだといふのである。ルカが「アダムは神の子也」といふたのは、「神其の像の如くに人を造り給ひ。」(創一〇二七)人は皆神の子供である。而してアダムは其の始祖であつたといふものに、外ならない。(二三至三八)

(八) 悪魔の試み

【ルカ傳第四章一至三十一】

ニ倍イエス聖靈にて満ち、ヨルダン河より歸り荒野にて四十日のあひだ御靈に導かれ、ニ悪魔に試みら

れ給ふ。この間なにも食はず、日數満ちてのち餓
ゑ給ひたれば、三 悪魔いふ、「なんぢ若し神の子なら
ば此の石に命じてパンと爲らしめよ」四 イエス答へ
たまふ、「人の生くるはパンのみに由るにあらず」と
録されたり」五 悪魔またイエスを携へのぼりて瞬間
に天下のもろもろの國を示して言ふ、六 この凡ての
權威と國々の榮華とを汝に與へん。我、これを委ねら
れたれば、我が欲する者に與ふるなり。七 この故に
もし、我が前に拜せば、ことごとく汝の有となるべ
し」八 イエス答へて言ひたまふ、「主なる汝の神を拜
し、たゞ之にのみ事ふべし」と録されたり」九 悪魔ま
たイエスをエルサレムに連れゆき、宮の頂上に立た
せて言ふ、「なんぢ若し神の子ならば、此處より己が
身を下に投げよ」十 それは「なんぢの爲に御使たちに
命じて守らしめ給はん」十一 「かれら手にて汝を支へ
その足を石に打當つる事なからしめん」と録された
るなり」十二 イエス答へて言ひたまふ、「主なる汝の

神を試むべからず」と云ひてあり」
十三 悪魔あらゆる嘗試を盡してのち暫くイエスを離
れたり。

十四 イエス御靈の能力をもつてガリラヤに歸り給へ
ば、その聲聞あまれく四方の地に弘る。十五 斯て諸
會堂にて教をなし、凡ての人に崇められ給ふ。
十六 俗その育てられ給ひし處の、ナザレに到り例の
ごとく、安息日に會堂に入りて聖書を讀まんとて立
ち給ひしに、十七 預言者イザヤの書を與へたれば、
其の書を繙きて、かく録されたる所を見出し給ふ。
十八 「主の御靈われに在す。これ我に油を注ぎて貧し
き者に福音を宣べしめ、我を遣して囚人に救を得
ること、盲人に見ゆる事とを告げしめ、壓へらる、
者を放ちて自由を與へしめ、十九 主の喜ばしき年な
のべつた
宣傳へしめ給ふなり」二十 イエス書を卷き、係りの
者に返して坐し給へば、會堂に居る者みな之に目を
注ぐ。二一 イエス言ひ出でたまふ、「この聖書は今日

なんぢらの耳に成就したり」二三 人々みなイエスを
譽め、又その口より出づる惠の言を怪しみて言ふ、「こ
れヨセフの干ならずや」二四 イエス言ひ給ふ、「なん
ぢら必ず我に俚諺を引きて、醫者よ、みづから己を醫
せ、カペナウムにて有りしといふ、我らが聞ける事と
もを己が郷なる此の地にても爲せ」と言はん」二五
た言ひ給ふ「われ誠に汝らに告ぐ、預言者は己が郷に
て喜ばるゝことなし」二六 われ實をもて汝らに告ぐ
エリヤのとき三年六ヶ月、天とちて全地、大なる饑饉
なりしが、イスラエルの中に多くの寡婦ありたれど

二六 エリヤは其の一人にすら遣されず、唯シドンな
る、サレプタの一人の寡婦にのみ遣されたり。二七
た預言者エリシヤの時、イスラエルの中に多くの癩
病人ありしが、其の一人だに潔められず、唯シリヤの
ナアマンのみ潔められたり」二八 會堂に在る者みな
之を聞きて憤恚に滿ち、二九 起ちてイエスを町より
逐ひ出し、その町の建ちたる山の崖に引き往きて、投
げ落さんとせしに、三十 イエスその中を通りて去り
給ふ。

◎ 耶穌は荒野にて悪魔に試みられ給ふた。四十日の間何をも食はずして、餓ゑ給ふた
頃合を見計らひ、悪魔は彼が石をパンに變へて食はんことを勸告した。然るに彼は、
「人の生くるは、パンのみに由るにあらず」(申八〇三)といふ聖書の一句を引いて、之を却
け給ふたのである。岡山孤兒院の石井十次君は、其の保護の下にある數百の孤兒を養
ふべき食物が盡きた時、建築費として寄附せられた金を流用しやうかと考へたが、直

ぐに思ひ直し、「私は石をパンに變へて食ふてはならぬ」と、空腹を忍んで只管神に祈つて居ると、不思議に巨額の寄附金が届き、急場を免れたといふことがある。私共も幾ら窮迫したからといふて、其の信仰、主義、節操、良心等を、パンに變へて食ふ如きことがあつてはならぬ。(一至四)

◎悪魔は次に耶穌を高き處に誘ひ、幻の如く天下の諸ろの國々を、其の眼前に展開して言ふた。「若し我が前に拜せば、悉く汝の有となるべし」と。然るに耶穌は、「主たる汝の神を拜し、唯之にのみ事ふべし」(申六〇十六)といふ聖書の句を引いて、再び之を却け給ふた。其の如く私共も、神以外の何物をも拜んではならぬ。米國人は、「全能の弗」といふことを言ふ。しかし乍ら眞に全能なる者は、唯神のみである。ブース夫人(カザリン)は、此の世に流行、利益、智識といふ三體の偶像があり、それを神よりも愈りて信仰する者の多いとを戒めて居る。私共は「己の爲に何の偶像をも彫むではならぬ」(出二〇四)反つて主たる神を拜し、唯之にのみ事ふべきものである。(五至八)

◎悪魔は更に耶穌を伴ひ行きて、エルサレムの宮の頂上に立たせ、數百尺の高所よ

り身を投せんことを要めた。しかも彼は、「汝の爲に御使達に命じて守らしめん云々」(詩九一〇十二)といふ聖書の句を引いて、之を勧誘したのである。「悪魔は其の勝手な目的の爲に、聖書を引用するものである」(ヘキスピヤ)併し乍ら耶穌は三たび聖書の句を引いて「主なる汝の神を試むべからず」(申六〇十六)といひ、美事に敵を撃退し給ふた。今も悪魔は私共を勧めて、往々高い所から飛ぶ様な真似をしろといふ。即ち人事を盡さずして天命を俟ち、自ら助けずして神の助を求めしめやうとする。けれども私共は神を祈ると共に、自らの本分を盡さねばならぬ。昔クロンウエルは其の部下の兵士に、「神に祈れ、而して汝の彈藥を乾かせ」と、命令したといふではないか。(九至十二)

◎斯くて悪魔はあらゆる試煉を盡したる後、「暫く耶穌を離れた」とある。何れ復好い機を見て出直すつもりであつたものと見える。或少女が其の母に對ひ、「お母さん、あなたは何時でも、人の善い所ばかり褒めて在らつしやるが、そんなら悪魔にでも何か善い所がありますか」と尋ねると、「然うです。悪魔からは其の根氣の好い所を學ぶのです」といふた話がある。悪魔は如何にも執着力の強いものであるから、私共もそれに根

氣負けをせぬやう、「善を以て惡に勝つ」(羅十二〇二)の工夫が何より肝要である。(十三)

◎耶穌は試煉終りてガリラヤに歸り、後郷里なるナザレを訪づれ給ふた。其の少年時代からの慣例にしたがひ、安息日に會堂に入り、依頼せらるる儘に聖書を讀んで、一場の警告を試みられたが。其の讀まれたイザヤ書の數節は、其の儘彼の身に當る預言であつた。即ち「主の御靈我に在す」とある如く彼は神我等と偕に在すもの、インマヌエルにて在し給ふた。(太一〇二四)「これ我等に油を注ぎて貧き者に福音を宜べしめ」とある如く、彼の福音は先づ民衆に傳へらるべきものであつた。次に「我を遣はして囚人に救を得ること、盲人に見ゆる事とを告げしめ」とあり。耶穌は罪惡の捕虜を解放し、盲人の靈眼を開かせ給ふお方である。又「壓へらるる者を放ちて自由を與へしむる」とあり。凡て壓迫を受けたる階級、若くは人民の、眞の自由を得べき望は、唯彼の上に懸つて居るのである。ユダヤ人は又五十年目に一度「主の喜ばしき年」(利二五〇八至十七)といふものが來ると、考へて居つたが、しかし乍ら耶穌の救の普及する所、年々皆喜ばしき年である、日々これ好日であるといふ。是れが其の日耶穌

の且つ讀み、且つ説かれたる所であつた。(十四至二二)

◎「預言者は己が郷にて喜ばるゝとなし。」エリヤの時の饑饉に際し、イスラエルの寡婦等は取りのこされて、唯サレプタの一寡婦が彼に助けられたのも。又エリヤの時代にイスラエルの多數の癩病人は醫されないうで、唯シリヤのナアマンのみ潔められたのも。畢竟皆彼等が眼前の聖者を認むるに吝かであつた爲ぞと、戒められた。ナザレの人民は大に彼を憤つて、果ては彼を町外れの崖から下に、投げ落さうと企てたが、耶穌は靜かに人民の間を通つて出でゆき給ふた。諺に「燈臺下暗し」といふこともあれば、私共は神の惠と其の御業とを、狎れ侮ることなきやう、氣をつけねばならぬ。(二三至三十)

(九) カペナウム

【ルカ傳第四章三十一乃至四十四】

三二 斯てガリラヤの町カペナウムに下りて、安息日

ごとに人を教へ給へば 三三 人々その教に驚きあへ

り。その言、權威ありたるに因る。

三三 會堂に穢れし悪鬼の靈に憑かれたる人あり、大聲に叫びて言ふ、三三「ああ、ナザレのイエスよ、我らは汝となにの關係あらんや。我らに亡さんとて來給ふか。我はなんぢの誰なるを知る、神の聖者なり」三五 イエス之を禁めて言ひ給ふ、「黙せ、その人より出でよ」悪鬼その人を人々の中に倒し傷つけずして出づ。三六 みな驚き、語り合ひて言ふ、「これ如何なる言ぞ權威と能力とをもて命ずれば、穢れし悪鬼すら出で去る」三七 爰にイエスの噂あまれく四方の地に弘りたり。

三八 イエス會堂を立ち出でて、シモンの家に入り給ふ。シモンの外姑おもき熱を患ひ居たれば、人々これが爲にイエスに願ふ。三九 その傍に立ちて熱を責

◎ガラリヤの町カペナウムに下りて後、耶穌は「安息日毎に人を教へ給ふ」たとある。これは前にナザレにて、「例の如く安息日に會堂に入り」（路四〇十六）給ふたといふのと

めたまへば、熱去りて女たちどころに起きて彼らに事ふ。

四〇 日のいる時さまざまの病を患ふ者をもつ人、みな之をイエスに連れ來れば、一々その上に手を置き、て醫し給ふ。四一 悪鬼もまた多くの人より出で叫びつつ言ふ「なんぢは神の子なり」之を責めて物言ふことを免し給はず、悪鬼そのキリストなるを知るに因りてなり。

四二 明る朝イエス出でて寂しき處にゆき給ひしが、群衆たづねて御許に到り、その去り往くを止めんとせしに、四三 イエス言ひ給ふ「われ又ほかの町々にも神の國の福音の宣傳へざるを得ず、わが遣はれしは之が爲なり」四四 斯てエダヤの諸會堂にて教を宣へたまふ。

思ひ合せて、彼が如何に安息日を重んじ給ふたかを知るべき事實である。コレリツヂは安息日のことを「一年五十二の春」といひ、フイリツプ、ヘンリーは之を「一週中の眞珠」多くの日の中の女王」と呼び。グラハムは又之を「貧民の日」と名づけた。此の日は貧民迄も、打ちくつろいで神の恵を樂み得るといふの意であらう。新島襄氏が米國留學中、岩倉具視公の一行が外遊せられ、其の通譯を頼まるゝことになると、彼は初から堅く約束し、日曜日には一切旅行しないで、獨り靜に神を禮拜し、月曜日には追ひかけて一行に加はり、一緒に旅路を續けたといふことである。彼は「安息日を憶えて、之を聖くし」（出二〇八）たのであつた。（三一）

◎耶穌の御言に權威があつたわけは、其の宣傳へらるる眞理にもよつたであらう。其の神々しき人格にもよつたであらう。亦其の神より來る靈の能力にもよつたであらう。後に「金口」と呼れたクリソストムも、其の初は左程人を動かす雄辯家でなかつたが、或時彼は自分が天の使の群に圍まれ、耶穌の御前に立つて説教する有様を幻に見、その時から急に、非常な力を得るに至つたと傳へられて居る。即ち神の眞理を、其の

御力によりて、其の御前に語るやうになつた爲に、斯がる變化を身に經驗したるものと見える。どうかもつともつと、權威を以て神の御言を教ふる人物が、現はれて欲しいものである。(三三二)

◎耶穌は安息日に、會堂にて、穢れし惡鬼に憑れた者を醫し給ふた。マツクゴワンの書いた物に、次の如き物語がある。或時二疋の惡魔が途中で出會ふた。一方は甚しく疲れて、一方は如何にも元氣好く見えた。元氣の好い方が言ふには、「僕は今日或宴會に出席したが、集まつた者は皆我が黨の士にて、飲んで、浮かれて、騒いで、うつちやつて置いても差支ない連中であつたから、大きに樂をした」と、いふのを聞いて。今一疋の方が言ふには、「僕は今日基督教の集會に出席したが、何れも生眞面目な連中の寄合であるから、其の或者は之を睡眠に導き、或者は之に傍觀をさせ、或者は又他事を考へさせ、而して播かれた福音の種を、傍から奪ひ取つてまはるなど、仲々大變な骨折であつた。お蔭ですつかり疲れてしまふた」とのことであつた。それ故私共は惡魔が安息日にも、會堂にも、時を擇ばず、處を嫌はず、入り來ることを知つて、

不斷の警戒を怠つてならぬ。(三三三至三七)

◎「漁夫の家といへば、どんなものであつたか、大概想像されるではないか。其處へ耶穌が親しく臨み給ふたといふのは、私共の高慢心を、足の下に蹂躪すべきことを教ふるものである」と、クリソストムは言ふて居る。耶穌はシモン(一名、ペテロ)の茅屋を訪れ給ふた。折柄彼の姑が重き熱病に罹つた居つたので、人々は其の爲に、耶穌に願ふたとある。其の如く私共も耶穌と罪人との間に立つて、いつも仲保の祈禱をして居らねばならぬ。彼女は其の病が醫されると、直ぐに起きて彼等に事へた。これは感謝の念より出づる奉仕、誠意の籠つた奉仕、又彼女の身に相應しき奉仕であつたと、いふことが出來やう。私共も亦お互に、此うした眞實なる奉仕を勵みたまきものである。(三八、三九)

◎日の入る頃、さまざまの病を患ふ者を連れ來りたるに、耶穌は一々其の上へ手を置いて、之を醫しておやりなされた。「彼は疲れず、倦まず、又何人をも拒絶せず」と、詩人が歌ふたのは眞實の事である。しかも彼が一人一人に手を置いて、彼等の病を醫し

ておやりなされたといふのは、其の柔和と、親切と、愛とを、示すものである。アウ
ガスタン言に「我等先づ彼を棄つるにあらざれば、彼は我等を棄て給はない」といふ
てある。彼は真に頼邊なきものの、最上無二の朋友である。(四十、四一)

◎明る朝、彼は寂しき所に行き給ふた。これは人を選けて祈禱をする爲であつたに相
違ない。耶穌はいつでも祈禱の時を有し給ふた。若しさもなければ、之を造り給ふた。

これは兎角祈禱を怠り勝ちの、私共に對する警戒である。(ミラー)それと同時に、彼
は亦福音の宣傳に努め給ふた。即ちその言に「我又他の町々にも神の國の福音を宣傳
へざるを得ず、わが遣はされしは之が爲なり」と、ある通りである。「福音の宣傳はエリ

コ城外の喇叭の聲と同じく、むなしき音聲の如く輕蔑せらるゝこともあれど、實は
悪魔の堅壘を陥るゝの力である。それ故神は宣教の愚を以て、信する者を救ふを善
しとし給ふのである。(テラー) 私共も御言の宣傳に熱心せねばならぬ。(四二至四四)

(一〇) 深處に乗り出せ

【ルカ傳第五章一至十六】

一 群衆おし迫りて神の言を聞きたる時、イエス、ゲ
ネサレの湖のほとりに立ちて、二渚に二艘の舟の
寄せあるを見たまふ。漁人は舟をいでて網を洗ひ居
たり。三イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼
に請ひて陸より少く押し出さしめ、坐して舟の中
より群衆を教へたまふ。四 語り終へてシモンに言ひ
たまふ「深處に乗りいだし、網を下して漁れ」五 シモ
ン答へて言ふ「君よ、われら終夜勞したるに何をも
得ざりき、然れど御言に隨ひて網を下さん」六 斯く然
せしに魚の夥多しき群を圍みて網裂けかかりたれば
七 他の一艘の舟になる組の者を差招きて來り助けし
む。來りて魚を二艘の舟に滿したれば、舟沈まんばか
りになりぬ。八 シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝

下に平伏して言ふ「主よ、我を去りたまへ。我は罪あ
る者なり」九 これはシモンも僧に居る者もみな漁り
し魚の夥多しきに驚きたるなり。十 セペダイの子に
してシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり
イエス、シモンに言ひたまふ「懼るな、なんぢ今より
後人を漁らん」十一 かれら舟を陸につけ一切を棄て
てイエスに従へり。
十二 イエス或る町に居給ふとき、視よ全身癩病を患
ふ者あり。イエスを見て平伏し、俯ひて言ふ「主よ、
御意ならば我を潔くなし給ふを得ん」十三 イエス手
のべ彼につけて「わが意なり、潔くなれ」と言ひ給
へば、直ちに癩病されり。十四 イエス之を誰にも語
らぬやうに命じ、かつ言ひ給ふ「ただ往きて己を祭司

に見せ、モーセが命じたるごとく汝の深のために獻物して、人々に證せよ。十五、されど彌増々イエスの事、ひろまりて、大なる群衆あるひは教を聽かんとし、

或は病を醫されんとして集り來りしが、十六、イエス寂しき處に退きて新り給ふ。

◎ユダヤ人はゲネサレの湖（一名、ガリラヤの湖）を、特に其の誇りとして居つた。「神は七つの湖海を造り、其中よりゲネサレの湖を擇んで、彼の有となし給ふた」とか。又「ゲネサレの湖は、即ち樂園の門である」とか、いふた位であつた。耶穌は此の湖の畔にて、彼に聽かんとておし迫まる群衆を見、シモン（一名、ペテロ）の舟に乗り、陸より少しく押し出さしめ、坐して舟の中から彼等を教へ給ふた。ゴードットが「耶穌は小舟を講壇として、岸邊に群がる民衆に、御言の網を打ちかけ給ふた」といふたのは、それである。彼は會堂でなくばとか、又は講壇からでなければとか、仰せられず。海邊でも、山の上でも、街頭でも、野原でも、いつも、あらゆる機會に、福音を宣傳へ給ふたのである。（一至三）

◎語り終へて後、彼はシモンに對ひ、「深處に乗り出し、網を下して漁れ」と命じ給ふ

た。其の如く彼は、今も私共に對ひ、いつ迄も信仰生活の淺瀬に躊躇して居らず、思ひ切つて神の恩寵の深處に乗り出すべきとを、督促して居給ふ。「汝我に呼び求めよ、我汝に應へん。又汝が知らざる大なる事と、隠れたる事とを汝に示さん。」（耶三三〇三）又「我を信する者は我が爲す業をなさん、且つ之よりも大なる業をなすべし。」（約十四〇十二）とあり。私共は神の御軍を戦ふ上に、小成に安んずることを許されぬ。ブ羅斯大將（ワイリアム）が日本を去らんとする時、横濱の埠頭に於ける告別の辭に、「私は日本に來て、益裁といふものを見、其の纖巧にして雅致あるを愛した。しかし乍ら私の事業は、あんな風に、大きくなるべき性質のものを、小さくするのではなくて。反つて小さく固まらんとするものを、大きく育てるのである」との事であつた。それにつけても私共は、芥種の如く小さき神の御業が、應て天の鳥を宿す木となる程の成長を期待して、其の爲、盡瘁する所がなくてはならぬ。（四至七）

◎其の前の晩、終夜勞して何の得る所なかつたものを、今は忽ち二艘の舟も沈まんなばかりの大漁があつたのだから、彼等は驚いた。中にもシモンは耶穌の膝下に平伏し、

「主よ我を去り給へ、我は罪ある者あり」と叫んだとある。これはイザヤが異象の中に、聖なる神の稜威を拜み、「禍なる哉、我亡びん、我は穢れたる民の中に住みて、穢れたる唇の者なるに、わが眼は萬軍のエホバに在す王を見まつればなり」(賽六〇五)といたふのと、似た事實である。此の如く人は神の御威徳を仰ぎ見る時、其の御前に、畏れ戦かざるを得ない筈のものである。(八、九)

◎耶穌はシモンに「懼るな、汝今より人を漁らん」と仰せられると、彼は其の二三の友人と共に、舟を陸につけ、一切を棄て、耶穌に従ふた。其の事に就いて或人の説に、「此の場合の舟は教會、漁夫は傳道者、網は福音、海は世の中、而して岸邊は永遠の世界に譬へることが出来る」とあり。又他の人の説に、「ペテロは耶穌が語り給ふ時聞き、命じ給ふ時行ひ、約束し給ふ時信じ、召し給ふ時従ふた。彼は此等の點に於て、後の基督者に模範をのこしたものである」と、いふてある。何れも最もこの事と考へられる。(十、十一)

◎ユダヤ人は癩病を神の怒の徴、即ち天刑病であると考へた。然るを耶穌が親ら手を

觸れて之を醫し給ふたのは、全く其の大なる御愛心によるものである。しかし乍ら復考へて見れば罪人の心はいつの代にも癩病の如くに腐爛して居る。「其の頭は病ざる所なく、其の心は疲れ果てたり。足の裏より頭に至る迄全き所なく、唯創痕と打傷と腫物とのみなり。而して之を合すものなく、包む者なく、亦油にて軟らぐる者なし」(賽一〇五、六)とは、其の状態ではないか。しかも斯く迄罪惡に穢れた靈魂を醫し得るものは、唯主耶穌の他にない。「耶穌の血凡ての罪より我等を潔む」(約壹一〇七)とは、其の謂ではないか。(十二至十五)

◎耶穌は寂しき所に退いて祈り給ふた。ライトフットが「耶穌は、人々の間に在す時には、彼等に善を行ひ、人々の間を離れた時には、神と物語り給ふた」と、言ふたのは實際の事である。マードックの話に、彼が三週間大統領官邸に客となつた時のことださうである。或夜深更隣室に人聲がする故不思議に思ひ、竊と起き出で、窺いて見ると、ランコルンは薄暗い燈火の下に、聖書を前に置いて、神に祈つて居る處であつた。「神よ、昔ソロモンに、國民を治むる智慧を與へた如く、それを今私にも與へ

給へ。さもなくば、愚かにして弱く、罪深き私に、どうして此の國民を指導するこ
とが出来ませう。今私に聽いて、國民を救ひ給へ」と。此の如きものが、彼が夜半の
祈禱であつたさうである。私共も、もつと人を避けて、獨り神に祈る習慣を養ひた
きものである。(十六)

(一一) 汝の罪赦されたり

【ルカ傳第五章十七至三十九】

十七 或日イエス教をなし給ふとき、ガリラヤの村々
ユダヤ及びエルサレムより來りしパリサイ人、教法
學者ら、そこに坐しゐたり、病を醫すべき主の能力
イエスと借にありき。十八 視よ、人々、中風を病める
者な、床にのせて擔ひきたり、之を家にに入れて、イ
エスの前に置かん、すれど、十九 群衆によりて擔ひ
入るべき道を得ざれば、屋根にのぼり、瓦を取り除け
て床のまま、人々の中にイエスの前に縋り下せり。

二十 イエス彼らの信仰を見て言ひ給ふ「人よ汝の罪ゆ
るされたり」二一 爰に學者パリサイ人ら論じ出でて
言ふ「潰言をいふ此の人は誰ぞ、神より他に誰か罪
を赦すことを得べき」二三 イエス彼らの論する事な
さとり、答へて言ひ給ふ「なにを心のうちに論する
か。二三 「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起き
て歩め」と言ふと孰が易き、二四 人の子の地にて罪
をゆるす權威あることを汝らに知らせん爲に」――

風を病める者に言ひ給ふ――「なんぢに告ぐ、起き
よ、床をとりて家に往け」三五 かれ立刻に人々の前に
て起きあがり、臥しゐたる床をとりあげ、神を崇め
つつ己が家に歸りたり。二六 人々みな甚く驚きて神
をあがめ懼に満ちて言ふ「今日われら珍しき事を見
たり」

二七 この事の後イエス出でて、レビといふ取税人の
收税所に坐しなるを見て「われに従へ」と言ひ給へば
二八 一切を棄ておき、起ちて從へり。二九 レビ己が家
にて、イエスの爲に大なる饗宴を設けしに、取税人
および他の人人も多く、食事の席に列りゐたれば、
三十 パリサイ人および其の曹輩の學者ら、イエスの
弟子たちに向ひ、咳きて言ふ「なにゆゑ汝らは取税人
罪人らと共に飲食するか」三一 イエス答へて言ひた
まふ「健康なる者は醫者を要せず、ただ病ある者、こ
れを要す。三二 我は正しき者を招かんとあらず。

罪人を招きて悔改めさせんとて來れり」三三 彼らイ
エスに言ふ「オ、ホの弟子等は、しばしば斷食し祈禱
し、パリサイ人の弟子たちも亦然するに、汝の弟子
たちは飲食するなり」三四 イエス言ひ給ふ「新郎の
友だち新郎と借に在るうち、彼らに斷食せしめ得
んや。三五 然れど日來りて新郎をとられん、その日
には斷食せん」三六 イエスまた譬を言ひ給ふ「たれ
も新しき衣を切り取りて、舊き衣を繕ふ者はあらじ。
もし然せば新しきものも破れ、かつ新しきものより
取りたる裂も舊きものに合はじ。三七 誰も新しき葡
萄酒を、ふるき革囊に入ることとは爲じ、もし然せば
葡萄酒は囊をほりさき漏れ出でて囊も廢らん。三八 新
しき葡萄酒は、新しき革囊に入るべきなり。三九 誰
も舊き葡萄酒を飲みてのち、新しき葡萄酒を望む者
はあらじ「舊きは善し」と云へばなり」

◎中風患者は自分で歩く力がない故、其の友人が之を床のまゝ擔ふて來た。しかも人ごみにて、耶穌に近づくことが出来ない故、屋根に上り、瓦を除き、穴をあけて、そこから下につちおろした。これは彼等が人を救主に連れ來るの、熱心をあらはすものである。西洋に「千代經し巖」といふ畫が二種あつて、一つは水に溺れた人が、海中の孤巖に十字形の石柱が立つのを見出し、それに絶つて助かる處をえがいたもので。今一つは、斯くして彼が自ら助かるのみならず、一方の手に今一人、同じく水に溺るゝ人を助けつゝある處を、えがいたものである。しかも此の第二の、自ら救はるゝのみならず、他人を救ふ爲に苦心する處に、基督教の眞精神が、最もよくあらはれて居ると言はねばならぬ。私共は「救はん爲に救はれたものだからである。」(十七至十九)

◎耶穌は中風患者と其の友人との信仰を認めて、病人に對ひ、「人よ、汝の罪赦されたり」といひ。然る後、「起きよ、床をとりて家に往け」と、仰せられた。彼は先づ其の靈魂を救ふて後に、やがて肉體の病をも醫しておやりなされたのである。靈魂の救は第一の事である。肉體上の祝福は之に附隨すべきものである。ピーター、ジョン

又は黒人から出でたる宗教家であるが、彼は言ふた。「神が基督によりて私を赦し給ふた其の日、世界は私に取つて全く新しきものとなり、萬有は全部改造せられた様に見えた。私は周圍を見まはした。然る時に、野原や、草木は、これ迄とちがふて綠に、湖水は青く、日は輝き、空は微笑む如くに覺えられた。私は罪を赦された其の日から、天地が一變したのである」と。即ちダビデが「其の徳を赦され 其の罪を掩はれし者は幸福なり。不義をエホバに負せられざる者、心に偽りなき者は幸福なり。」(詩三三〇一、二)と歌ふたのも、之と同じ經驗をいふたのではないか。(二十至二六)

◎此の事の後耶穌は出で、レビ(一名、マタイ)といふ取税人の收税所に坐し居るを見て、「我に従へ」といひ給ふと。彼は一切を棄て置き、起ちて従ふたとある。其の當時ユダヤで「取税人」といへば直ぐに「悪黨」と取らるゝ位、彼等の中には不正不義を行ふ者が多くあつた。然るに耶穌がレビをさうした仲間から擇んで、之を其の弟子となし、後には使徒の一人とならせ給ふたのは、全く其の絶大なる、御慈愛によるものである。古語に「良匠は材を棄るなく、明君は士を棄るなし」とあり。それを最もよく事

實に行ふた者は、耶穌であつた。ウエスレーは、「レビが一切を棄て置き、耶穌に従ふたといふ中には、殊に彼が其の職業と利益とを擲つたことを、含んで居る」といふた。さう考へて見れば、彼としても亦、よくこそ思ひ切つて、それだけの犠牲を拂ふたものと、いはねばならぬ。(二七、二八)

◎レビは己が家にて、耶穌の爲に大なる饗宴を設け、取税人及び他の友人を多く迎へて、そこで新しき信仰の發表會の如きことを行ふた。そは「人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらはして救はるべきものだからである。」(羅十〇十)パリサイ人や學者等は、耶穌が取税人や罪人等と食事を共にし給ふことを非難した故。耶穌は彼等に答へていひ給ふた。「健康なる者は醫者を要せず、唯病ある者之を要す、我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招きて悔改めさせんとて來れり」と。今潜水夫が水の中に居るは、彼等が水棲動物だからではなくて、唯水の中に何物かを探らん爲に外ならない。それと同じ様に、耶穌が罪人の中に入りて之と交はり給ふのは、罪人の行に與みせん爲にはあらで、反つて彼等を罪の生活より救ひ出さんとの、御目的によるものである。

他日彼が弟子達の爲に祈りて、「わが願ふは、彼等を世より取り給はんことならず、惡より免らせ給はんことなり」(約十七〇十五)と仰せられたのも、全く之と同じ御精神によるものである。(二九至三二)

◎斷食の事に就いて、弟子達を咎める者があると、耶穌は答へて、「新しき衣を切りて舊き衣を繕らふ者なく、新しき葡萄酒を舊き革囊に入るゝ者はない。新しき宗教に舊き形式は釣合はぬものぞ」とて、彼等を辯護なし給ふた。ブース大將(ワイリアム)は其の傳道生活の初に於て、彼の眼前に、聖なる宗教界と、俗なる實社會と、二つのかけ隔たつた世界が存在する事實を見出し。これではならぬと、身を挺んで、聖なる宗教界から俗なる實社會に突進し、思ひ切つて之が濟度に健闘するうち、いつしか救世軍てふ新しき組織が成立つたのだと、物語つたことがある。私共も亦時代の要求に應ずるに爲に、宗教の激潮たる生命を、その時々の新しき形式に應用して、之を世に行ふ工夫が何より大切である。(三三至三九)

(一一一) 幸福なる哉貧しき者よ

【ルカ傳第六章一至二十六】

一 イエス安息日に麥島を過ぎ給ふ時、弟子たち穂を摘み、手にて採みつつ食ひたれば、ニパリサイ人のうち或者ども言ふ『なんぢらは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』三 イエス答へて言ひ給ふ『ダビデその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事をすら讀まぬか。四 即ち神の家に入りて、祭司の他は食ふまじき供のパンを取りて食ひ、己と借なる者にも與へたり』五 また言ひたまふ『人の子は安息日の主たるなり』

六 またかの安息日にイエス會堂に入りて、教をなし給ひしに此處に人あり其の右手なえたり。七 學者、パリサイ人ら、イエスを訴ふる廉を見出さんと思ひ

て、安息日に人を醫すや否やを窺ふ。八 イエス彼らの念を知りて手なえたる人に『起きて中に立て』と言ひ給へば起きて立てり。九 イエス彼らに言ひ給ふ『われ汝らに問はん、安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと亡すと、孰かよき』十 かくて一同を見まはして、手なえたる人に『なんぢの手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ然しなれば、その手痛ゆ。十一 然るに彼ら狂氣の如くなりて、イエスに何をたさんと言ひ合へり。

十二 その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつ夜を明したまふ。十三 夜明になりて弟子たちを呼び寄せ、その中より十二人を選びて、之を使徒と名

け給ふ。十四 即ちペテロと名け給ひしシモンと其の兄弟アンデレとヤコブと、ヨハネと、ピリポとバルトロマイと十五 マタイと、トマスと、アルパヨの子ヤコブと熱心黨と呼ぶるシモンと、十六 ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダとなり。このユダはイエスを賣る者となりたり。十七 イエス此等とともに下りて平かなる處に立ち給ひしに、弟子の大なる群衆およびユダヤ全國、エルサレム又ツロ、シドン、の海邊より來りて或は教を聽かんとし、或は病を醫されんとする民の大なる群も、そこにあり。十八 穢れし靈に惱まれたる者も醫さる。十九 能力イエスより出でて凡ての人を醫せば、群衆みなイエスに觸らん事を求む。二十 イエス日をあげ弟子たちを見て言ひたまふ『幸

ひ福なるかな、貧しき者よ、神の國は汝らの有なり。二二 幸福なる哉、いま飢うる者よ、汝ら飽くことを得ん。二三 幸福なる哉、いま泣く者よ、汝ら笑ふことを得ん。二四 人なんぢらな憎み、人の子のために遠ざけ誇り汝らの名を惡しとして棄てなば、汝ら幸福なり。二三 その日には、喜び躍れ。視よ、天にて汝らの報は大なり、彼らの先祖が預言者たちに爲ししも、斯くありき。二四 されど禍害なるかな、富む者よ、汝らは既にその慰安を受けたり。二五 禍害なる哉、いま飽く者よ、汝らは飢ゑん。禍害なる哉、いま笑ふ者よ、汝らは悲しみ泣かん。二六 凡ての人、なんぢらな譽めなば、汝ら禍害なり。彼らの先祖が虚偽、預言者たちに爲ししも、斯くありき。

◎「安息日に荷物を持つて歩いてはならぬ。手巾を持つて歩くのも宜しくない。但し着物に結びつけてあつたら、差支ない。」「安息日に釘をうつた履物を穿いて歩いては

ならぬ。「盲人と雖も、安息日に杖を携へてはならぬ。」又「安息日に宿から二千歩以上歩いてはならぬ。最も前日そこらに辨當を預け置き、立ちつて食べての上なら、更に二千歩あるいても宜い。」などと、當時のバリサイ人は、愚にもつかぬ言傳に拘泥して、安息日の守り方を喧ましく言ふて居つた。彼等は其の筆法にて、耶穌の弟子が安息日に麥の穂を摘んで食べたことを非難した。然るに耶穌は反つて弟子達の行動を是認し、ダビデの故事を引いて、安息日と雖も必要の事を行ふに、何の妨げもあるべからざる道理を説き示し給ふた。「人の子は安息日の主たるなり」と。彼は安息日の守り方を定むべき權威のある者として、彼等に臨み給ふたのである。(一至六)

◎他の安息日に、彼は又右の手の痿えたる男を醫し給ふた。これは石工を業とする者であつたと、傳へられて居る。斯くして耶穌は更に「安息日に善をなすは可し」(太十二十二)といふ眞理を、示し給ふたのである。ブース大將(ウイリアム)は嘗て安息日の守り方を語りて、第一、其の日には自ら不必要の勞働を息み、他人にも同じく之を息ましむべき事。第二、其の日には公けに於ても、私に於ても、特に禮拜に時を用ゆべ

き事。第三、其の日には特に他人に親切を行ふことを心がけ、同胞の靈と肉との祝福の爲に盡瘁すべき事、以上三箇條を説いた。どうか安息日を聖として、之を有意義守りたきものである。(六至十一)

◎十二使徒を選ぶ前夜、耶穌は山に入りて、夜どほし神に祈り給ふた。これは大事を決行する前、時を惜まず、心靜かに神の指導と助力とを求めん爲であつた。昔から神の前に力ある人々は、往々夜を徹し、日を通じての祈禱を勤めたものである。ブラムエルは或叢を過ぐる時、其の同伴者に言ふた「私は曾て彼處にて、二十六時間神に祈禱したことがある」と。フィンニーは寒い晩、毛皮にくるまつて枯草の中に轉がりながら、夜どほしの祈禱をしたなどいふことがあり。彼等が人を動かすの力は、斯くして隠れたる所に、先づ神を動かしたるによる所、最も多きものである。(十二)

◎選ばれたる十二人は、何れもそれぞれ性格の異なる人物であつた。或人の説によれば、ペテロは向ふ見ずで、アンデレは世話好きで、ヤコブは短氣で、ヨハネは親切で、ピリポは因循で、バルトロマイは慧敏で、マタイは罪を悔いた男で、トマスは懷疑家で、

アルバヨの子ヤコブは椽の下の方持をする人で、シモンは慷慨家で、ヤコブの子ユダは狭量の人で、イスカリオテのユダは虚偽の人であつた、といふてある。それが悉く當つて居るか、否やは別問題として、兎も角も彼等が異種異様の性格を備へた人達であつた丈は、疑ふべき餘地がない。それにも拘らず、彼等の中には學者がなく、財産家がなく、名譽ある人がなく、彼等はおしなべて所謂「無學の凡人」(徒四〇十三)であつたが。それでも能く、使徒として選ばれるに足つたことを見れば、誰も失望すべき必要がない。神は能く貧しく、弱く、愚かなる私共をも潔めて、用ゐ給ふことが出来るのである。(十三至十九)

◎耶穌は貧しき者、飢うる者、泣く者、人から憎まれ棄てらるる者の、幸福を説き給ふた。しかもこれは、彼が日頃から其の身に經驗しつゝ、實行を以て之に裏書し給ふ所の眞理であつた。後世に於ても、フランシスは一生娶らず、「聖貧」を妻として、専心神への奉仕を勵み。ルーテルは死んだ時、葬式を出す費用がなかつたと傳へられた。ウエスレーは感謝しつゝ、路傍の苺を食ふて、其の空腹を宥めたことがあるといひ、

ブリス大(ウイリアム)はパンとチーズとあれば足れりとして、奮闘の生活を續けた人だといはれて居る。それ故私共は、貧苦窮乏の中にも尙善人たるべく、又有用幸福の人たるを得べきことを知りて、奮發興起せねばならぬ。(二十至二三)

◎耶穌は又富む者、飽く者、笑ふ者、人から賞めらるる者の禍を戒め給ふた。スポルジョンの言に、「金持は往々、黄金の階段を下りて地獄に墜つるものである」とあり。ルーソーは其の時代の貴族を罵つて、「彼等は人間から墮落して貴族となつたものだ」といふたことがある。それ故財産や、地位や、権力や、名譽のある人々は、それを残らず神の有として献げ、己が一身の爲ならで、社會公共の爲に、最も有益に使用せんことを、心がけねばならぬ。然らざれば折角戴いたそれらの賜は、手械足械となつて、其の身と靈魂とを滅ぼす如き禍を見るの恐がある。(二四至二六)

(二三) 父の慈悲なる如く

【ルカ傳第六章二十七至四十九】

二七 われ更に汝ら聴くものに告ぐ、汝等の仇を愛し
 汝らに憎む者を善くし、二八 汝らを誼ふ者を祝し、
 汝らを辱しむる者のために祈れ。二九 なんぢの頬を
 打つ者には、他の頬をも向けよ。なんぢの上衣を取る
 者には、下衣をも拒むな。三十 すべて求むる者に與
 へ、なんぢの物を奪ふ者に復索しな。三一 なんぢら
 人に爲られんと思ふごとく人にも然せよ。三二 なん
 ぢらに愛する者を愛せばとて、何の嘉すべき事あ
 らん、罪人にて己を愛する者を愛するなり。三三
 汝等おのれに善をなす者に善を爲すと、何の嘉す
 べき事あらん、罪人にて然するなり。三四 なんぢ
 ら得る事あらんと思ひて人に貸すとも、何の嘉すべ
 き事あらん、罪人にて均しきものを受けんとて罪
 人に貸すなり。三五 汝は仇を愛し、善をなし、何を
 も求めずして貸せ、然らば、その報は大ならん。か
 つ至高者の子たるべし。至高者は恩を知らぬも
 の悪しき者にも仁慈あるなり。三六 汝らの父の慈悲

なるごとく、汝らも慈悲なれ。三七 人を審くな、然
 らば汝らも審かるる事あらじ。人を罪に定むな。然ら
 ば汝らも罪に定めらるる事あらじ。人を赦せ、然ら
 ば汝らも赦されん。三八 人に與へよ、然らば汝らも
 與へられん。人け量をよくし、押し入れ、搦り入れ
 溢るるまでにして、汝らの懐中に入れん。汝等おの
 が量る量にて量らるべし。三九 又また譬にて言ひたまふ「盲人は盲人を手引する
 を得んや、二人とも穴に落ちざらんや。四十 弟子は
 その師に勝らず、凡そ全うせられたる者は、その師
 の如くならん。四一 何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、
 己が目にある梁木を認めぬか。四二 おのが目にある
 梁木を見ずして争で兄弟に向ひて「兄弟よ、汝の目に
 ある塵を取り除かせよ」といふを得んや。偽善者よ
 先づ己が目より梁木を取り除け。さらば明かに見え、
 兄弟の目にある塵を取りのぞき得ん。四三 悪しき果
 を結ぶ善き樹はなく、また善き果を結ぶ悪しき樹は

なし。四四 樹はおのおの其の果によりて知らる。茨
 より無花果を取らず、野薊より葡萄を收めざるなり。
 善き人は心の善き倉より善きものを出し、悪しき人
 は悪しき倉より悪しき物を出す。それ心に満つるよ
 り、口は物言ふなり。
 四六 なんぢら我を「主よ主よ」と呼びつつ何ぞ我が言
 ふことを行はぬか。四七 凡そ我にきたり我が言を聽

きて行ふ者は、如何なる人に似たるかを示さん。四八
 即ち家を造つるに地を深く掘り岩の上に基を据ゑた
 る人のごとし、洪水いでて流その家を衝けども動す
 こと能はず、これ固く建られたる故なり。四九 され
 ど聽きて行はぬ者は、基なくして家を土の上に建て
 たる人のごとし。流その家を衝けば、直ちに崩れて
 その破壊、甚だし」

◎モーセの律法には、「目にて目を償ひ、齒にて齒を償へ」(出二二〇二四)といふてある。
 然るに耶穌は「汝等の仇を愛せよ」と教へ給ふた。律法と福音との相違が、これにても
 知らるゝではないか。耶穌は尙此の敵を愛するの主義を敷衍して、「汝等を憎む者を善
 くし」(行)「汝等を誼ふ者を祝し」(言)「汝等を辱しむる者の爲に祈れ」(祈)と仰せられ
 た。どこ迄も行届いた御教訓である。しかもかれは生涯を通じて、此の大なる愛を、
 身に行ふてお見せなされたのである。最後には十字架の上、現に彼を罵り、辱しめ、且
 つ殺さんとする者の爲に祈り、「父よ彼等を赦し給へ。其の爲す所を知らざれば也」(路

二三〇三四)と宣ふた。人間の愛は未だ曾て、これより以上に出でたることがないのである。(二七至三十)

◎孔子は「己の欲せざる所を人に施す勿れ」といひ。インクラテスは「他人から仕向けられて腹の立つ様なことを、他人に仕向けな」と説き。ラビ、ヒレルは「他人が汝に爲すを好まぬことを、他人に爲すな」と教へた。何れも有難い教訓ではあれど、惜しいことには消極的である。進んで他人を祝福するの気分が欠けて居る。そこへ耶穌が現はれて、積極的に「汝等人に爲られんと思ふ如く、人にも然かせよ」と教へられたのは、所謂百尺の竿頭一步を進めたものである。人間生活の最高の標準を、遺憾なく指示されたものである。それに就いてルーテルが「我等の教主は、複雑なる教訓を一つの小さき包に仕立て、何人も之を懐にして、容易く携帶し得るやうに計ひ給ふた」といふたのは、當つて居る。此の黄金律を政治にも、外交にも、實業にも、労働と資本との間にも、其の他一切の生活に實行せらるゝ日こそ、實に黄金時代の實現せらるべき時であれ。(三二)

◎基督者の、愛の生活の理想は神にある。「神は愛だからである。」(約壹四〇八) 耶穌はこゝに、恩を知らぬ者、悪き者にも、仁慈ある神を紹介し、「汝等の父の慈悲なる如く、汝等も慈悲なれ」と、仰せられた。第三世紀の頃カルセージの監督サイプリアンは、疫病の流行する中に起ちて言ふた。「斯かる場合に基督者が、若し唯其の仲間の病人のみ介抱する様なことであれば、罪人や異教徒と何の異なる所があらう。往いてあらゆる病苦に悩む者を救へ」と。乃ち信者一同總が、りにて、大に市民の救護に盡瘁したと、傳へられて居る。而して此の如きものは、眞に愛の神の子供たるに相應しき、行動であつたと言はねばならぬ。(三三至三六)

◎「人を審くな、人の罪を定むな、汝等が他人を量る量りにて、汝等も量らるゝであらう」と、戒められて居る。ウエズレーが「神は人をして彼の大きな審判の日に、如何なる標準によりて審かるべきか、自ら之を選択するに任せ給ふた」といふたのは、其の事である。それにつけても私共は、人を容るゝの度量がなくてはならぬ。リンコンは、其の大統領就任の辭に於て「萬人に對して慈惠あり、何人に對しても悪意なし」

といふた。彼が稀れなる雅量の人であつたことは、唯此の一語によりても知らるゝではないか。(三七、三八)

◎「盲人は盲人を手引するを得んや。」人を指導せんと欲する者は、己先づ神の御光に照されて居るべき必要がある。アラビヤ人の諺に「知らずして、其の自ら知らざることを知らぬ者は、愚人である、之を遠げよ。知らずして、其の自ら知らざることを知る者は、無智である、之を教へよ。知りて其の自ら知らざることを知らざる者は、睡眠者である、之を醒ませ。知りて其の自ら知らざることを知る者は、智者である、之に従へ」といふことがある。殊に大切なるは、私共が其の實踐躬行に於て、人の指導者たるに相應しき者となるべきことである。私共は他人の目の塵を取らせよといふ前に、先づ己が目の梁木を取り除いて居らねばならぬ。ウエスレーは言ふた、「先づ短氣てふ梁木を去れ、高慢てふ梁木を去れ、身勝手てふ梁木を去れ、世俗を愛するの梁木を去れ、殊に怠慢不注意と、無頓着との梁木を去れ。それでも尙餘裕があつたら、始めて他人の目の塵の世話することが、出来るであらう」と。如何にも適切なる訓言である

と思ふ。(三九至四五)

◎私共は耶穌を「主よ主よ」と呼ぶのみならず、其の日常生活の上に、耶穌の旨を行ふて居らねばならぬ。フィンニーの言に「凡て眞の宗教は服従によりて成立つものである。それ故幾ら基督教を是認しても、之に服従し居ない者は、未だ宗教を有するものでない」とある。しかし乍ら耶穌の御言を聴きて之を行ふ者は、地を深く掘り、岩の上に基を据ゑて家を建つる人と同じく、其の生活に基礎があり、其の品性に揺がぬ土臺がある。或愛蘭人が岩山の頂に立つ時、圖らず大地震に出あふて言ふた、「私の足は慄えたが、岩は慄えなかつた」と。其の如く「千代經し巖」なる耶穌を礎として立つ者は、如何なる場合にも、動かさるゝことがないのである。(四六至四九)

(一四) 預言者以上の預言者

【ルカ傳第七章一至三十一】

一イエス凡て此らの言を民に聞かせ終へて後、カペナウムに入り給ふ。

二時に或る百卒長、その重んずる僕やみて死ぬば
 かりなりしかば、三イエスの事を聴きて、ユダヤ人
 の長老たちを遣し、來りて僕を救ひ給はんことを願
 ふ。四 彼らイエスの許にいたり、切に請ひて言ふ「か
 の人は、此の事を爲らるるに相應し。五 わが國人を
 愛し、我らのために會堂を建てたり」六 イエス共に
 往き給ひて、その家は程近くなりしとき、百卒
 長、數人の友を遣して言はしむ「主よ自らを煩はし
 給ふな。我は汝をわが屋根の下に入れまつるに、足
 らぬ者也。七 されば御前に出づるにも相應しからず
 と思へり、ただ御言を賜ひて我が僕をいやし給へ。
 我みづから權威の下に置かるる者なるに、我が下に
 また兵卒ありて、此に「往け」と言へば往き、彼に「來
 れ」と言へば來り、わが僕に「これを爲せ」と言へば
 爲すなり」九 イエス聞きて彼を怪しみ振り反りて、從
 ふ群衆に言ひ給ふ「われ汝らに告ぐ、イスラエルの
 中にだに斯るあつき信仰は無し」と遺され

たる者ども家に歸りて、僕を見れば、既に健康とな
 れり。

十一 その後イエス、ナインといふ町にゆき給ひしに
 弟子たち及び大なる群衆も共に往く。十二 町の門に
 近づき給ふとき、視よ、昇き出さるる死人あり。これ
 は、獨息子にて母は寡婦なり、町の多くの人々これ
 に伴ふ。十三 主、寡婦を見て、憫み「泣くな」と言ひ
 て、十四 近より柩に手をつけ給へば、昇くもの立ち
 止る。イエス言ひたまふ「若者よ、我なんぢに言ふ、
 起きよ」十五 死人、起きかへりて物言ひ始む。イエ
 ス之母に付したまふ。十六 人々みな懼をいだき、
 神を崇めて言ふ「大なる預言者、われらの中に興
 り」また言ふ「神その民を顧み給へり」十七 この事
 ヌダヤ全國および最寄の地に傳ひるまりぬ。
 十八 俗ヨハネの弟子たち、凡て此等のことを告げた
 れば、ヨハネ兩三人の弟子を呼び、十九 主に遣して
 言はしむ「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべ

きか」二十 彼ら御許に到りて言ふ「パプテスマのヨ
 ハネ我らを遣して言はしむ「來るべき者は汝なるか、
 或は他に待つべきか」二一 この時イエス多くの者の
 病、疾患を醫し、惡しき靈を逐ひだし、又おほくの
 盲人に見ることを得しめ給ひしが、二三 答へて言ひ
 給ふ「往きて汝らが見聞せし所をヨハネに告げよ、
 盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者
 はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞
 かせらる。二三 おほよそ我に隨かぬ者は幸福なり。」
 二四 ヨハネの使の去りたる後、ヨハネの事を群衆に
 言ひいで給ふ「なんぢら何を眺めんとて野に出でし、
 風にそよぐ葦なるか。二五 然らば何を見んとて出で

し、柔かき衣を着たる人なるか、視よ華美なる衣を
 きて奢り暮す者は王宮に在り。二六 然らば何を見ん
 とて出でし、預言者なるか。然り我なんぢらに告ぐ、
 預言者よりも勝る者なり。二七 「視よわが使を汝の顔
 の前に遣す。彼は汝の前に汝の道を備へん」と録さ
 れたるは此の人なり。二八 我汝らに告ぐ、女の産み
 たる者の中、ヨハネより大なる者はなし。然れど神
 の國にて小き者も、彼よりは大きなり。二九 (凡ての民
 これを聞きて、取税人までも神を正しとせり。ヨハ
 ネのパプテスマを受けたるによる。三十 然れどマリ
 サイ人、教師らは、其のパプテスマを受けざりし
 により、各自にかかはる神の御旨をこぼみたり)

◎「雪の日やあれも人の子樽拾ひ。」又「わが子なら伴にはつれじ今日の雪。」など、あ
 り。人に大切なるは弱者に對するの同情である。こゝにある百卒長は、職務の上から
 言へば、武張つた羅馬の軍人であつたが、其の人柄から言へば、極めて親切にして思

ひやりある紳士であつた。ホール監督の言に、「當時耶穌の御許に來りたる、種々な人々の中には、其の子のために、其の娘のために、又は自らの爲に、願事をする者のみ多かつたが。唯此の百卒長一人は、其の僕の爲に彼の御助を求めた。即ち彼は其の僕が病氣したからといふて、之を遺棄しないで、其の家に臥さしめ、之を傍觀して居ないで、其の爲に醫療の法を講じ、尋常の醫者に依頼するよりも、耶穌の恵を祈つた。假令彼自身が病氣に罹り、其の僕が彼の爲に盡すのであつたとしても、これより以上の盡し方は無かつたであらう」と、いふてある。人の上に立つ人は、どうか此の百卒長の如く、其の下に屬する人々をいたはつて欲しいものである。(一至九)

◎使徒パウロは後に「ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む」(哥前二〇二二)といふた。耶穌の時代にも、學者とパリサイ人とが來りて、徴を見んことを求めた様な事實がある。(太十〇三八)斯かる場合に、此の百卒長が「望む所を確信し、見ぬ物を眞實とする」(來十一〇二)の信仰は、眞に見上げたものであつた。彼は軍隊に於ける命令、服従の實驗から推して、耶穌が唯一言を出し給へば、僕の病は癒えると信じた。

それ故耶穌は彼の信仰の通り、僕を醫しておやりなされたのである。而して「イスラエルの中にだに、斯かる篤き信仰を見しことなし」とまで、之を賞讃し給ふた。アワガستنが「耶穌は橄欖の木(イスラエル)に得られぬものを、胡頹子(異邦人)に於て見出し給ふた」といふたのは、其れであつた。(六至十)

◎ナインといふ町にて、耶穌は獨息子を喪ふた寡婦を見て、之を憫み、死んだ子を甦らせておやりなされた。これは「彼等が呼ばざるに我應へ、彼等が語り終へざるに我聽かん」(賽六五〇二四)といふ、御約束を實現せられたものといふても、差支あるまい。茲に耶穌は「寡婦を見て憫み」給ふたとある。彼はその心を動かし給ふたのである。聽て之に「泣くな」と聲をかけ給ふた。即ち彼の口から慰藉の言が、送り出でたのである。彼は又柩に「近より」給ふた。その足は人の救に急いだのである。しかる後手をつけて柩を止め、死人を起し給ふた。彼の手は愛の御業を行はん爲に差伸べられたのである。此の如く彼は心も、口も、手も、足も、其の全靈全身を擧げて、救世済民に打込んで居給ふたのである。亦貴いことではないか。(十一至十七)

◎如何なる信仰上の豪傑も、時としては失望落膽に陥る如きことがある。モーセも、(民十一〇至十五)ダビデも、(詩十〇一)エリヤも、(王上十九〇四)皆然うであつた。パプテスマのヨハネが、前にはあれ程熱心に、耶穌を世に紹介して置きながら、今は獄中より兩三人の弟子を遣はして、「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」と、問はしめたる如きも、亦信仰上の豪傑が、失望落膽に陥りたる一例と見ることが出来る。しかし乍らダビデは言ふて居る。「我驚き狼狽して言へらく、汝の目の前より絶たれたりと。されど我汝に呼び求めし時、汝我が願の聲を聴き給へり」と。(詩三一〇二二)私共は狼狽してさへせねば、落膽の沼にも尙、踏石を見出し得べきことを知つて、逆境に於ては尙更、主の導きを呼び求むる覺悟が大事である。(十八至二十)

◎耶穌はヨハネの弟子に對ひ、「往きて汝等が見聞せし所を、ヨハネに告げよ」と仰せられた。これは彼の宗教が、事實の宗教たることをあらはすものである。又「盲人は見、跛者は歩み、癩病人は潔められ、聾者は聞き、死人は甦へらせられる」と、仰せられた。これは彼の宗教が博愛の宗教にして、又奇跡の宗教たることを示されたものである。

る後更に、「貧き者は福音を聞かせらる」と、附け加へ給ふた。これは彼の宗教が民衆の宗教にして、又救靈の宗教であることを、物語られたものである。此の如く彼の宗教は事實の宗教、博愛の宗教、奇跡の宗教、民衆の宗教にして、同時に又救靈の宗教である。それ故に能く人を救ひ、又世を救ふ力があるのではないか。(二一至二三)

◎耶穌はヨハネを評して「彼は風に靡く葦の如き軟骨漢でなく、又美服を纏ふて王宮に出入する貴公子にもあらず、彼は預言者以上の預言者である」と、仰せられた。それにも拘らず「神の國にて小き者も、彼よりは大なり」と宣ふたわけは。畢竟巨人の肩に立つ侏儒は、巨人よりも遠く見ると同じく。耶穌の救を受けた私共には、ヨハネの知らざりし神の恵を経験し得べきことを、示されたものに外ならない。ファラーは嘗て言ふた「後世サボナローラ、ジエロメ、ルーテル等は皆ヨハネと似て、帝王を懼れず、議會を憚らず、大膽に所信を貫きたる人々であつた」と。ヨハネは神の軍隊に於ける、最も勇敢、大膽、熱誠、義烈なる、其の軍人であつたといふことが出来る。(二四至三十)

ルカ傳第七章三十一至五十

三一 然れば、我今の代の人を何に比べん。彼らは何に似たるか。三二 彼ら童市場に坐し、たがひに呼びて、「われら汝らの爲に笛吹きたれど、汝ら躍らす。歎きたれど、汝ら泣かざりき」と云ふに似たり。

三三 そればバプテスマのヨハネ來りて、パンをも食はず、葡萄酒をも飲まれば「惡鬼に憑かれたる者なり」と汝ら言ひ、三四 人の子きたりて飲食すれば「視よ、食を貪り、酒を好む人、また取税人、罪人の友なり」と汝ら言ふなり。三五 然れど智慧は己が凡ての子によりて正しとせらる

三六 爰に或るパリサイ人とともに食せん事をイエスに請ひたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給ふ。三七 視よ、この町に罪ある一人の女あり、イエスの

パリサイ人の家にて食事の席に給ふを知り香油の入りたる石甯の壺を持ちきたり、三八 泣きつつ御足近く後にたち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にてこれを拭ひ、また御足に接吻して香油を抹れり。三九 イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちと言ふ「この人もし預言者ならば觸る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪なるに」四十 イエス答へて言ひ給ふ「シモン、我なんちに言ふことあり」シモンいふ「師よ言ひたまへ」四一 「或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、四二 償ひかたなければ債主この二人を共に免せり。されば二人のうち債主を愛すること孰が多き」四三 シモン答へて言ふ「われ思ふに、多く免

されたる者ならん」イエス言ひ給ふ「なんちの判断は當れり」四四 斯て女の方振向きてシモンに言ひ給ふ「この女を見るか。我なんちの家に入りしに、なんぢは我に足の水を與へず、此の女は涙にて我が足を濡し、頭髮にて拭へり。四五 なんぢは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず、四六 なんぢは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。四七 この故に我なんちに告ぐ、

この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し」四八 遂に女に言ひ給ふ「なんちの罪は赦されたり」四九 同席の者ども心の内に「罪をも赦す此の人は誰なるか」と言ひ出づ。五十 爰にイエス女に言ひ給ふ「なんちの信仰、なんちを救へり、安らかに往け。」

◎ 耶穌は其の時代の人民の無理解なるを嘆息して、彼等は童子が市場に坐し、互に呼びて、「我等汝等の爲に笛吹きたれども汝等躍らず、歎きたれども汝等泣かざりき」と、いふに似て居る。即ちヨハネが來りて克己節制の生活を營めば、之を惡鬼に憑かれたる者なりと嘲り、耶穌が罪人と交りて彼等の救に腐心すれば、之を唯飲食に耽ける者、又は取税人、罪人の仲間のやうにいふと、仰せられた。或時英國救世軍の一士官にむかひ、「今の若さで、説教ばかりして居ないで、些と勞働でもしろ」と、罵るものがあつた

ゆる。彼は翌朝起き出で、自分で會館にペンキを塗り始めた。すると今度はそこを通りかゝつた男が「そんな真似して労働者の職業を奪はずとも、必死に傳道したが可い」と、叫んで去つた。それを聞いて、彼は今更のやうに悟る所あり。以來區々たる世評を氣にしないで、専心己が天職をいそしむに至つたといふ話がある。私共も無責任なる世の人の批評を、一々氣にして居つては、いつ迄も己が所信を行ふことは、出来ないものと思はねばならぬ。(三一至三四)

◎「されど智慧は己が凡ての子によりて、正しとせらる」とあり。眞の知己は多く得難いものであれど、さりとして全然、之を見出すことが出来ないわけのものでもない。ブース大將(サイリアム)が日本に來朝の砌、彼は言ふたのはある。「彼の富士の山を見るに、遠くから眺めて秀麗であるのみならず、近く麓を通つて眺めても、同じく秀麗に見受けられる。其の如く眞に神に潔められ、又用ゐらるゝ人物は、遠方から眺むる人に敬服せらるゝのみならず、亦近く寄つて眺むる者にも、認識せられない筈はないのである」と。それ故私共は、假令多數ではないか知らねど、若し幸に、我が心の誠

を理解してくれる、若干の知己を當世に見出すことが出来たならば、それを以て足れりとせねばならぬ。歌に「君ならで誰にか見せむ梅の花、色をも香をも知る人ぞ知る」とあり。此の世の中に、眞の知己くらゐ、貴いものは滅多にないのである。(三五)

◎此のパリサイ人は七分の好奇心と、三分の敬意とを以て、耶穌を家にお招き申上げたものかと、想像せられる。それ故彼の待遇は至つて冷淡不行届であつた。昔一休和尚は或人から御馳走に招かれ、其の前日乞食坊主の姿をして彼の家を訪ふと、散々侮辱した上追拂はれた。翌日は立派な袈裟衣を着て出かけると、今度は下にも置かない待遇をするのを見て、乃ち其の袈裟衣を脱いでそこに投出し「貴公は此の袈裟衣を接待するのであるから、愚僧に用はあるまい」と。昨日の乞食坊主の姿になつて、遁げ歸つたといふことがある。しかし乍ら耶穌はパリサイ人の冷遇を怒りもせず、反つて懇ろに彼の相手となつて、之に道を語り給ふた。これは其の「失せたる者を尋ねて救はん爲」(路十九〇十)の、大御心によるものである。「彼は太陽が如何なる汚物をも厭はず照すと同じく、いかなる罪人にも相手となつて、之を救に導き給ふた」と、ペラウベツト博

士が言ふたのは、眞實の事である。(三六)

◎そこへ一人の罪ある婦人が、香油の入りたる壺を携へて入り來り、泣きつゝ御足近く後に立ち、涙にて御足を濕ほし、頭の髪にて之を拭ひ、又御足に接吻して香油を塗つた。パリサイ人はそれに對して、如何にも不快に感じたが、耶穌は宣ふた。「此の女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なれば也。赦さるゝことの少き者は其の愛することも亦少し」と。或時ウエリントン老公が、會堂に跪いて祈つて居ると、其處へ見苦しい姿をした貧乏人が出て、一緒に並んで跪いた。教會の役員は之を見て、「そこに老公爵が跪いて居られる。少しそちらに寄つて下さい」と、言ふ聲を聞いて、ウエリントンは頭をあげ、「神の前に公爵はない。其の方を其の儘にして置いて下さい」と言ふた。其の如く神の前には貴賤貧富の差別なく、罪が深いか浅いかの隔でさへ、たんとない。唯悔改めて救を求めたるものと、頑固にして神に背けるものとの相違のみ、著しいのである。戒心すべきことではないか。(三七至四八)

◎耶穌は彼女に、三つの有難い御言を賜はつた。第一、「汝の罪は赦されたり」とは、

彼女の山なす罪が皆帳消しになつたことを、示されたのである。第二、「汝の信仰汝を救へり」とは、たゞに過去の罪を赦されたのみならず、以來新しき生命を授けられ、清く正しき世渡りをなし得べきことを、約束せられたのである。第三、「安らかに往け」とは、彼女がこの後、眞に安心と満足とを以て、生活を營むべきことを告げ給ふたのである。「耶穌は片手に罪の赦、片手に聖潔を携へて立つて居給ふ。しかも其の双方を一緒に求むる者にあらざれば、之に何れか一方だけ、授け給ふた例がない」と、アダムは言ふた。しかも此の婦人は、今や其の二つの恵を共に戴き、併せて眞の安心立命をさへ授けられたのである。亦忝けないことではないか。(四九、五十)

(一六) 種は神の言なり

【ルカ傳第八章一至二十五】

一、この後イエスを宣へ、神の國の福音を傳へつつ町々村々を廻り給ひしに、十二弟子も伴ふ。ニまた

前に悪しき靈を逐ひ出され、病を醫されなどせし女たち、即ち七つの悪鬼のいでしマゲダラと呼ぶる

マリナ、ヨヘロアの家司クレーザの妻ハンナ及びスザンナ、此の他にも多くの女ともなひゐて其の財産をもて彼らに事へたり。

四 大なる群衆むらがり町々の人、みもとに寄り集ひたれば譬をもて言ひたまふ、五 『種播く者、その種を播かんとて出づ。播くとき路の傍らに落ちし種あり、踏みつけられ、又その鳥これを啄む。六 岩の上へ落ちし種あり、生え出でたれど潤澤なきによりて枯る。七 茨の中に落ちし種あり、茨と共に生え出でて之を塞ぐ。八 良き地に落ちし種あり、生え出でて百倍の實を結べり』これらの事を言ひて呼ばり給ふ『きく耳ある者は聴くべし』

九 弟子たち此の譬の如何なる意なるかを問ひたるにイエス言ひ給ふ『なんぢらは神の國の奥義を知ること許されたれど、他の者は譬にてせらる。彼らの見て見ず、聞きて悟らぬ爲なり。十一 譬の意は是なり。種は神の言なり。十二 路の傍らなるは聴きた

るのち、悪魔きたり、信じて救はる事のならんために御言をその心より奪ふ所の人なり。十三 岩の上なるは聴きて御言を喜び受くれども、根なければ暫く信じて嘗試のときに退く所の人なり。十四 茨の中に落ちしは、聴きてのち過るほどに世の心勞と財貨、快樂とに塞がれて實らぬ所の人なり。十五 良き地なるは、御言を聴き、正しく善き心にて之を守り、忍びて實を結ぶ所の人なり。

十六 誰も燈火をともし器にて覆ひ、または寢室の下におく者なし、入り来る者のその光を見んために之を燈臺の上に置くなり。十七 それ隠れたるものの顯はれぬはなく、秘めたるものの知られぬはなく明かにならぬはなし。十八 然れば汝ら聴くこと如何と心せよ、誰にても有てる人はなほ與へられ、有たぬ人はその有てりと思ふ物をも取るべし。十九 さてイエスの母と兄弟と來りたれど、群衆によりて近づくこと能はず。二十 或人イエスに『なんぢ

の母と兄弟と汝に逢はんとて外に立つ』と告げたれば二 答へて言ひたまふ『わが母、わが兄弟は、神の言を聴き、かつ行ふ此らの者なり。』

三 或日イエス弟子たちと共に舟に乗りて『みづうみの彼方にゆかん』と言ひ給へば、乃ち船出す。三三 渡るほどにイエス眠りたまふ。颯風みづうみに吹き下し、舟に水満ちんとして危かりしかば、三四 弟子

たち御側により、呼び起して言ふ『君よ、君よ、我らはせぶ』イエス起きて風と浪とを禁め給へば、『共に鎮まりて風となりぬ。三五 斯て弟子たちに言ひ給ふ『なんぢらの信仰いづに在るか』かれら懼れ怪しみて互に言ふ『これ誰ぞ、風と水とに命じ給へば順ふとは』

◎四福音書に、計二十四人の異なる婦人の事が出て居り。マタイ傳には内十人、マルコ

傳には十二人、ヨハネ傳には八人、而してルカ傳には十九人の事を記してある。中にも其の九人は全く他の福音書にない人達である。之によつて見ても、ルカが如何に宗教上に於ける婦人の地位を重んじたか、察せらるゝではないか。古人の言にも『宗教なき美人は、香なき花の如きものである。』(ヘイン)『凡ての大事件の始に婦人がある。』(ラマルチン) 又『如何程婦人を重んずるかは、文明の試金石である。』(カワテス) など、あり。私共は婦人を尊敬し、彼等をして思ふ存分に、神への奉仕を行はしむるやうで

なくてはならぬ。(一至三)

◎ 耶穌は大なる群衆を相手に、所謂種蒔の譬を語り給ふた。路の傍らに落ちし種とは、無頓着に御言を聞いて、そばから忘れてしまふ人の事である。岩の上に落ちし種とは、早呑込みに信仰を受け入れど、それが心の奥に根をおろして居ない故、どうかするとすぐに、枯れてしまふもの事である。茨の中に落ちし種とは、二心にして、世俗的なる基督者の事である。即ち此の世の心勞と、財貨と、快樂とに塞がれて、實を結ばぬものである。良き地に落ちし種とは(一)心をこめて御言を聴聞し、(二)正しく善き心にて之を守り、(三)忍びて實を結ぶもの事である。昔の人の句に「ちりちりと照りつけられて實る秋」とあり。どうか良き地に落ちし種の如く、最後まで耐へ忍びて、實を結びたきものである。(四至八)

◎ 耶穌は譬の意味を解くに當り「種は神の言なり」と仰せられた。丁抹の彫刻師ソルワルドセンが、其の作品を羅馬から持歸つた時、苞包みに草花の種が附着して居つたものと見え、それが荷をほどいた周圍に散亂し、後に芽を生じ、葉を出し、やがてこれ

迄コツペンハーゲンに見たとのない、美しい花を開いたといふ話がある。神の御言も亦此の如く、往々意外の方法によりて、意外の處に播かれ、意外の成長と繁殖とを遂げるやうなことがある。しかもこれは御言の中に、活ける生命を蓄ふるが爲に外ならない。(九至十五)

◎ 私共は暗き世を照す爲の燈火である。宜しく燈臺の上に置いて、周圍に光を放たねばならぬ。救世軍は一つの大きな燈臺である。其の證言や、漁人や、悔改の座や、野戦や、樂隊や、「ときこのころ」賣や、制服や、克己週間や、社會事業等は、皆私共が據つて以て、神の御光を輝かすに、最も適當したる仕懸けである。絲じんの蠟燭ほど小さい光も、此の燈臺の上に置かれては、随分と家の隅々迄、隈なく照すほどの効用を現はすことが出来るのである。(十六、十七)

◎ こゝには「汝等聴くこと如何にと心せよ」とあり。マルコ傳には「汝等聴くことに心せよ」(可四〇二四)とある。前者は如何に聴くかに注意すべきことを教へ、後者は何を聴くかに氣をつくべきことを、説き示されたものである。此の何を、如何に、聴聞する

かといふことは、私共の靈性を養ふ上に極めて重大なる問題である。サア、ジョン、チエツクは言ふた、「私共は他の説教者には耳を傾くれども、ラチマーにのみは心を傾けて聴くのである」と。私共は平生心を傾けて、ラチマーならぬ耶穌の御聲を聴き、又之に従ふて居らねばならぬ。(十八)

◎耶穌は其の母と兄弟との來訪を好機會として、私共が皆二種の家族に屬するの道理を示し給ふた。即ち私共は肉に於て、其の父母、兄弟姉妹に繋がる如く、靈に於ては又世界の人類に繋がるものである。それ故私共は其の肉親を愛するの心を推して、世界の人類を愛し。やがては四海一家の黄金時代を、地上に打建てられんことを期待しつゝ、其の爲に奮闘努力せねばならぬ。主の祈禱に「願くは御名の崇められん事を、御國の來らんことを、御意の天の如く地にも行はれん事を」(太六〇九、十)とは、其の事を教へられたものである。(十九至二十一)

◎耶穌が舟中に眠り給ふたのは、其の人性をあらはすものにて。起きて風濤を禁め給ふたのは、其の神性をあらはすものである。即ちこゝに人にして神、神にして人なる、耶穌の御人格を窺ふことが出来る。コルストンといふ英人は、米國からの歸途、船が暗礁に乗りかけて底に大きな穴をあけ、最早沈没の他なき場合に、それでも熱心に神に祈り。若し助かつたならば、身も財産も、残らず御用の爲に獻ぐべきことを約束すると。不思議にも大きな鱒が一尾出て来て、頭を船底の穴に突込み、水の入り來ることが止まつて、船は危く沈没を免れた。コルストンは之によりて感激し、郷里ブリストールに歸着するや否や、全財産を投じて公園を設け、公會堂を建て、學校を起しなどしたが。何れも皆神の不思議な御守護を記念するしるしに、鱒をそこゝに刻みつけて居るのを見、見たことがある。舟にて海に浮び、大洋にて事を營む者は、エホバのみわざを見、又淵にて其の奇しき御業を見る」(詩百七〇二三)と、詩篇の作者が歌ふのも、思ひ合はさるゝではないか。(十九至二十五)

(一七) 耶穌に觸れよ

【ルカ傳第八章二十六至五十六】

二六 途にガリラヤに對へるゲラセネ人の地に著く。
 二七 陸に上りたまふ時、その町の人にて悪鬼に憑か
 れたる者きたり遇ふ。この人は久しきあひだ衣を着
 ず、また家に住まずして墓の中にゐたり。二八 イエ
 スを見てさげび、御前に平伏して大聲にいふ「至高
 き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん。願
 くば我を苦しめ給ふ」二九 これはイエス穢れし靈
 に、この人より出で往かんことを命じ給ひしに因る。
 この人ががれし靈にしばしば拘へられ、鏈と足枷と
 にて繋ぎ守られたれど、その繋をやぶり、悪鬼に逐
 はれて、荒野に往けり。三〇 イエス之に「なんぢの
 名は何か」と問ひ給へば「レギオン」と答ふ、多く
 の悪鬼その中に入りたる故なり。三一 彼らイエスに
 底なき所に往くを命じ給はざらんことを請ふ。三二
 彼處の山に多くの豚の一群、食し居たりしが、悪鬼
 ども其の豚に入るを許し給はんことを請ひたれば、
 イエス許し給ふ。三三 悪鬼、人を出でて豚に入りた

れば、その群、崖より湖水に墜け下りて溺れたり。
 三四 飼ふ者ども此の起りし事を見て逃げ往きて、町
 にも里にも告げられたれば、三五 人々ありし事を見んと
 て出で、イエスに來りて悪鬼の出でたる人の、衣服
 をつけ、慥なる心にて、イエスの足下に坐しなるを
 見て懼れあへり。三六 かの悪鬼に憑かれたる人の救
 はれし事柄を見し者ども之を彼らに告げられたれば、三
 セゲラセネ地方の民衆、みなイエスに出で去り給は
 んことを請ふ。これ大に懼れたるなり。爰にイエス
 舟に乗りて歸り給ふ。三八 時に悪鬼の出でたる人、
 ともに在らんことを願ひたれど、之を去らしめんと
 て、三九 言ひ給ふ「なんぢの家に歸りて、神が如何
 に大なる事を汝になし給ひしかを具に告げよ」彼ゆ
 きて、イエスの如何に大なる事を己になし給ひしか
 を徧くその町に言ひ弘めたり。
 四十 斯てイエスの歸り給ひし時、群衆これを迎ふ、
 みな待ちゐたるなり。四一 視よ、會堂司にてヤイ

口といふ者あり、來りてイエスの足下に伏し、その
 家にきたり給はんことを願ふ。四二 おほよそ十二歳
 ほどの一人娘ありて死ぬべかりなる故なり。イエス
 の往き給ふとき、群衆かこみ塞がる。
 四三 爰に十二年このかた血漏を患ひて醫者の爲に己
 が身代なごとく費したれども、誰にも癒され得
 ざりし女あり。四四 イエスの後に來りて、御衣の繻
 にさはりたれば、血の出づること立刻に止みたり。
 四五 イエス言ひ給ふ「我に觸りしは誰ぞ」人みな否
 みたれば、ペテロ及び共に在る者共言ふ「君よ、群
 衆なんちを圍みて押し迫るなり」四六 イエス言ひ
 給ふ「われに觸りし者あり、能力の我より出でたる
 を知る」四七 女おのが隠れ得ぬことを知り戦き來り
 て御前に平伏し、觸りし故と立刻に癒えたる事と
 な、人々の前にて告ぐ。四八 イエス言ひ給ふ「むす

めよ、汝の信仰なんぢを救へり、安らかに往け」
 四九 かく語り給ふほどに會堂司の家よりきたり
 て言ふ「なんぢの娘は早や死にたり、師を煩はすな」
 五十 イエス之を聞きて會堂司に答へたまふ「懼る
 な、ただ信ぜよ。さらば娘は救はれん」五一 イエス
 家に到りて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及び子の父母
 の他は、ともに入ること誰に許し給はず。五二
 人みな泣き、かつ子のために歎き居たりしが、イエ
 ス言ひたまふ 五三 「泣くな。死にたるにあらず、寢
 ねたる也」五四 人々その死にたるを知れば、イエス
 を嘲笑ふ。然るにイエス子の手をとり、呼びて「子
 よ、起きよ」と言ひ給へば、五五 その靈かへりて立
 刻に起く。イエス食物を之に與ふことを命じ給
 ふ。五六 その兩親おどろきたり。イエス此の有りし
 事を誰にも語らぬやうに命じ給ふ。

◎ 耶穌は對岸なるゲラセネ人の地に上陸し、そこにレギオン、即ち一聯隊の悪鬼に

とり憑れたといふ男に出あひ給ふた。彼は鍵と足械とを断ち切り、家を離れ、裸にて荒野や墓場を狂ひまはる者であつたが。耶穌が彼から悪鬼を逐ひ出し給ふと、忽ち慥かなる心に復り、衣服を着けて、御前に端坐するやうになつた。果ては家に歸りて、神が如何に大なる事を彼に爲し給ふたかを、證言するに至つたといふのは。これ如何なる反社會的の極悪人と雖も、耶穌に頼れば屹度救はるべき道理を示す、最も好き例證である。即ち「彼は己に頼りて神に來る者の爲に執成をなさんとして、常に生くれば、之を全く救ふことを得給ふ」(來七〇二五)のである。彼には救ふべからざるの民がないのである。(二六至三五)

◎ゲラセネ地方の人民は、悪鬼が豚の群に入り、海に墜ちて死んだのを見、損得づくから割出して、耶穌の其の地を出で去り給はんことを求めた。ルーテルが或貴人に宗教を勧めると、彼は答へて「けれども福音を信じたのでは、金が儲からない」といふた。そこでルーテルは譬喩を設け、或時獅子が大變な御馳走をして、あらゆる獸類を招くと、そこへ豚が來て「君よ、酒のしぼり渣は何處にありますか」と尋ねた。彼は

それ以上の御馳走を解し得なかつたからである。それと同じ様に、福音の中には神の愛がある、罪の赦がある、永遠の生命がある、其の他一切の祝福があるに。彼の肉に屬ける人々は、凡てそれらの物を理解すること能はず、徒らに唯金、金といふのであると戒めた。耶穌も他の場合に「先づ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡て此等の物は汝等に加へらるべし」(太六〇三四)と、仰せられて居るのである。(三六至三九)

◎耶穌がカペナウムに歸り給ふのを待受けて、會堂司ヤイロは、來りて彼の足下に伏し、其の一人娘の病を醫されんことを求めた。元來病氣は、好ましいものでない。しかし乍ら家に病人があれば、家族の間に思ひやりが生じ、身勝手が失せて、柔和親切の情が深くなり、又祈禱の精神が燃えて、一層神の導きと助けとを仰ぐ様になる。「悲痛は人をして耶穌に行かしめ、さもなくば受けられぬ祝福を、身に受けしめるものである、使徒パウロが「神を愛する者、即ち御旨によりて召されたる者の爲には、凡ての事相働きて益となるを、我等は知る」(羅八〇二八)といふたのは、此の場合に、よく當

嵌まる言ではないか。(四十至四二)

◎群衆は耶穌を取圍んで、わけもなく押合ふたが、之によりて何んの得る所もなかつた。けれども信仰の手を伸べて、御衣の總に觸つた婦人のみは、直ちに難病を醫されたのである。アウガスチンが「肉は押合ひ、信仰は觸つた」といふたのは其れである。彼女は其の初、恐々ながら竊と来て、後から彼に觸つたが、後には促がされて彼の御前に出で、ありし次第を證言した。ヒュー、ミューラーの言に、「火の子の中にも火がある故、捉へて薪に移し、之を煽れば、炎々たる焰を生ずる如く。弱き信仰も信仰であるから、之を大事に育つれば、蠟燭の火ほどの信仰が、やがて炬火の如くなるであらう」といふてある。それゆゑ私共は弱き信仰を守りて、之を強く健かに育て上げねばならぬ。(四三至四八)

◎耶穌は途上にて、血漏の女等相手にして居給ふた故、會堂司の家に着き給ふ時刻が後れた。しかし乍ら彼の來り給ふと遅ければとて、全く來り給はぬものと思違へてはならぬ。又は祈禱の應驗が後れたからといふて、終に應驗なきものゝ如く速断してはならぬ。緬甸傳道の使徒と呼ぶる、ジャドソンは、ユダヤ人の救の爲に、旦暮神に

祈つて居つたが。死ぬる數日前、或人からの手紙により、ジャドソンの傳記がユダヤ人の間に翻譯せられ、それを讀んで道に志したる人々が、新に一傳道地を開始せんとする由を報導せられ。彼の長い間の祈禱が、斯くして終に聽かれたことを感泣したと傳へられて居る。汝等神の御意を行ひて、約束の物を受けん爲に必要なるは忍耐なり(來一〇三六)と、教へてあるではないか。(四九、五十)

◎家に到りて後、耶穌は早や息を引取つた娘を甦へらせて、之を其の父母に渡し給ふた。此の如く今も耶穌は死んだ子供を、若し此の世に於てなくば、少くとも彼の世で甦へらせ、之を永遠の生命に入らせ給ふ。ルーサーフォールドの言に、「君は幼兒を亡したと言はるゝか。彼女は喪はれたのではなくて、耶穌に見出されたのである。彼女は何處かへ行つてしまふたのでなく、一足先きに遣られたのみである。彼女は假令肉眼には見えずとも、死んだり、失せたりしたのではなくて、唯異なる半球に星の如く、光を放つて居るのである」と、いふてある。眞に忝けない御取計ひではないか。(五一至五六)

(一八) 十二使徒の派遣

【ルカ傳第九章一至十七】

一 イエス十二弟子を召し寄せて、もろもろの悪鬼を制し、病をいやす能力と權威と 與へ、ニまた神の國を宣傳へしめ、人を醫さしむる爲に之を遣さんと
して言ひ給ふ、三「旅のために何をも持つな、杖も袋も糧も銀も、また二つの下衣をも持つな。四いづれの家に入るとも、其處に留れ、而して其處より立ち去れ。五人もし汝らを受けずば、その町を立ち去るとき證のために足の塵を拂へ」六爰に弟子たち出でて村々を歴巡り徧く福音を宣傳へ、醫すことを爲せり。

への預言者の一人、魅へりたりと言へばなり。九へ
ロテ言ふ「ヨハネは我すでに首斬りたり、然るに斯る事のきこゆる此の人は誰なるか」かくてイエスを
見んことを求めぬたり。
十使徒たち歸りきて、其の爲しし事を具にイエスに
告ぐ。イエス彼らを携へて窺にベツサイダといふ町
に退きたまふ。十一 然れど群衆これを知りて從ひ來
りたれば、彼らを接けて、神の國の事を語り、かつ
治療を要する人々を醫したまふ。十二 日傾きたれば
十二弟子きたりて言ふ「群衆を去らしめ、周圍の村
また里にゆき、宿をととりて、食物を求めさせ給へ。
我らは斯る寂しき處に居るなり」十三 イエス言ひ給
ふ「なんぢら食物を與へよ」弟子たち言ふ「我らに

ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、此の多くの人のために、往きて買はれば他に食物なし」十四
男おほよそ五千人あればなり。イエス弟子たち
に言ひたまふ「人々を組にして五十人づつ坐せしめ
よ」十五 彼等その如くにして、人々をみな坐せしむ。

十六 斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天
を仰ぎて祝し、擘きて弟子たちに付し、群衆のまへ
に置かしめ給ふ。十七 彼らは食ひて皆飽く。擘きた
る餘を集めしに十二筐ほどありき。

◎數月前選ばれて使徒となつた十二人は、(路六〇十三)今や遣はされて神の國を宣傳へ、
又病を醫す爲に出で行くこととなつた。彼等が如何に清貧勤苦に甘んじたかは、耶穌
が「旅の爲に何をも持つな、杖も、袋も、糧も、銀も、又二つの下衣をも持つな」と、
仰せられたのによりても、之を察することが出来る。同時に各地にある信仰の輩は、
又、歡んで彼等を迎へ、之に支給すべきことを期待せられて居つた。即ち一何れの家
に入るとも、其處に留まれ云々」とある通りである。其の事に就いてクリソストムの言
に「労働人の其の食物を得るは、相應しきことである。それ故教へらるゝ者は、教ふ
る者を支給するの義務がある。若しその義務を果さないならば、それは不義を行ふ事
であるのみならず、亦基督に對するの反逆である」と、いふてある。戒むべきことで

はないか。(一至五)

◎彼等は村々を歴巡り、徧く福音を宣傳へ、又醫すことをしたとある。「此の福音はユダヤ人を初め、ギリシヤ人にも、凡て信する者に救を得さす神の力」(羅二〇十六)であるから、私共も飽迄、これが宣傳に努めねばならぬ。醫療の事に就いては、基督教の如く早くから、行届いて、病人の爲に盡した宗教は、他にない。紀元三百八十年の頃、篤信なる貴婦人にてファピオラなる者が、羅馬の市外に一つの病院を起し、これ迄道路に横はつて居つた病人や、不具者を收容することゝなつたのは。世界に於ける最も舊き慈善病院であつたと、稱へられて居る。何れにもせよ、基督教は最初から、殊に病める者、苦める者の友であつた事實を、閑却してはならぬ。(六)

◎「悖逆者の途は艱難なり」(箴十三(十五))と、ソロモン王は戒めて居る。こゝに國守へロデ、アンテパスは、曩に罪もないパプテスマのヨハネを殺して以來、日夜良心の呵責に堪えず。偶ま耶穌の御噂を聞いても、これは我が首斬りたるヨハネが、蘇生したのではないかといふて、周章て惑ふたのである。後世に於ても、ネロ帝は、我が手

にかけて殺した母の靈に襲はれて、悶え苦み。カリグラは其の殺害した者共の顔が、目先にもらづいて懊惱し。リチャード三世は又、其の最後の戦に臨む前夜、夢の中に會て彼から殺された者が一人宛、順ぐり出て來ては、「失望して、死ね」と、詛ふのを聞いて、堪えられぬ苦悶をしたと傳へられて居る。「良心の聲は神の聲である。」此の世に良心の呵責を受くるほどの、大なる災禍はなきものである。(七至九)

◎使徒達は歸り來りて、其の各地にて爲し、事を具に耶穌に告げると。耶穌は彼等を携へて、密にベツサイダといふ町に退き給ふたとある。此の如く私共は一切萬事、之を耶穌に御報告申上げ、其の御裁斷を仰ぐつもりにて、之を行はねばならぬ。新島襄氏の言に、「今茲に道德界將來の審判者降り來り、我等を其の面前に呼び出し、我が過去の行爲を人々の前に暴露し給ふものと假定せよ。能く幾人か遠慮なく進み出で、其の大小の所行が悉く壁上に掲げられ、且つ萬人に讀まるゝことを辭せぬものぞ」と、いふてある。私共は「何事を爲すにも人に事ふる如くせず、主に事ふる如く、心より行」(西三〇三)はねばならぬ。(十)

◎ 群衆は耶穌が閑地に退き給ふたことを知つて、之に従ひ來りたる故、耶穌は彼等を接けて、神の國の事を語り、且つ治療を要する人々を醫し給ふた。昔周公は賢人を求むるに急にして、一度の食事に三度までも口中の食物を吐き、又一度湯を使ふに三度までも髪を握つて出て、之と應接したといふことである。今耶穌が人を救ふに忙はしき、亦之と似た所があつた。即ち「彼の耳は人民の呻き聲に傾き、其の手は人民の病苦を醫し、其の唇は神の國の福音を宣傳へる爲に、いつでも多忙を極めて居つた。彼に來る者の棄てられし例は、曾てなかつたのである。」彼は私共の最も頼み甲斐ある救主にて在し給ふ。(十一)

◎ 耶穌は人々の食物のこと迄、心配しておやりなされた。彼はどこ迄も思ひやりの深いお方である。彼は僅か五つのパンと二つの魚とを以て、五千人以上を養ひ給ふたが。不思議にも皆飽きたる後、残りの屑のみにて十二の筐に一ぱいあつた。スコーフラーが「地上の計算に於ては、與へれば無くなるのだが。神の國の計算に於ては、與へれば富むのである。」といふたのは、眞實の事である。それ故耶穌は他の場合に、誠に汝等

に告ぐ、我がため、福音の爲に、或は家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑を棄る者は、誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家、兄弟、姉妹、母、子、田畑を迫害と共に受け、又後の世にては永遠の生命を受けぬはなし。(可十〇二九、三十)と仰せられたのである。(十二至十七)

(一九) 神の基督

【ルカ傳九章十八至三十六】

十八 イエス人々を離れて祈り居給ふとき、弟子たち
 僧にかりしに問ひて言ひたまふ「群衆は我を誰と
 いふか」十九 答へて言ふ「マブテスマのヨハネ、或
 人はエリヤ、或人は古への預言者の一人、甦へりた
 りと言ふ」二十 イエス言ひ給ふ「なんぢらは我を誰
 と言ふか」ペテロ答へて言ふ「神のキリストなり」
 二一 イエス彼らを戒めて、之を誰にも告げぬやうに

命じ、かつ言ひ給ふ二三「人の子は必ず多くの苦難
 をうけ、長老・祭司長・學者らに棄てられ、かつ
 殺され、三日めに甦へるべし」三三 また一同の者に
 言ひたまふ「人もし我に従ひ來らんとせば、己を
 捨て、日々おのが十字架を負ひて我に従へ」三四 己
 が生命を救はんと欲する者は之を失ひ、我がために己
 が生命を失ふその人は之を救はん。三五 人、全世界

を辱くとも己なうしなひ己を損せば、何の益あらんや。二六 我と我が言とを耻づる者をば、人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの榮光をもて來らん時に耻づべし。二七 われ實をもて汝らに告ぐ、此處に立つ者のうちに神の國を見ろまでは、死を味はぬ者どもあり」

二八 これらの言をいひ給ひしのち八日ばかり過ぎてペテロ、ヨハネ、ヤコブを牽きつれ、祈らんとて山に登り給ふ。二九 かくて祈り給ふほどに、御顔の状かはり、其の衣白くなりて輝けり。三十 視よ、二人の人ありてイエスと共に語る。これはモーセとエリヤとにて、三一 榮光のうちに現はれ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを言ひぬた

るなり、三二 ペテロ及び備に在る者いたく睡氣したれど、目を覺してイエスの榮光および備に立つ二人を見たり。三三 二人の者イエスと別れんとする時、ペテロ、イエスに言ふ「君よ、我らの此處に居るは善し、我ら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの爲にせん」彼は言ふ所を知らざりき。三四 この事を言ひ居るほどに、雲おこりて彼らを覆ふ。雲の中に入りしとき、弟子たち懼れたり。三五 雲より聲出でて言ふ「これは我が選びたる子なり、汝ら之に聽け」三六 聲出でしとき、唯イエスひとり見え給ふ。弟子たち黙して見し事を何一つ其の頃たれにも告げざりき。

◎ペテロは耶穌が、「汝等は我を誰と言ふか」と宣ふに答へて、「神の基督なり」といふた。「基督」とは「油注がれたる者」の義にて。即ち彼は神より就任の徴の油を注がれた

る、救主であるとの意味に外ならない。今日の私共も亦、耶穌を唯大なる教師、又は高尚なる模範として尊ぶのみならず、彼を神の基督として信仰し奉らねばならぬ。或時丁抹のコツベンハーゲンに、耶穌の肖像を作りたる人あり。傑作の譽れが高い故、或人が之を參觀し、縦から横から眺むれど、どうも其の姿勢に腑に落ちない所がある。終に其の前に跪いて、下から之を見上ぐるに及び、始めて彼の柔和慈仁なる御姿が、活けるが如く拜せられたといふ話がある。その通り私共も亦、耶穌の御前に膝を屈め、彼を神の基督として禮拜し、之に信頼し奉らねばならぬ。(十八至二十二)

◎耶穌は弟子達に、彼が間もなく、長老、祭司長、學者等に棄てられ、且つ殺され、三日目に甦へるべきことを示したる後。「人若し我に従ひ來らんとせば、己を棄て、日々己が十字架を負ひて我に従へ」と仰せられた。己を棄てるとは、己に克つことである。即ち昔の人が「神よ、私を私自らより救ひ給へ」と祈りたる如く、私共は先づ、一切の身勝手より救ひ出されねばならぬ。といふ意味は、常に不道理なる私の行より救はるゝのみならず、若し必要ならば、道理に合ふ行ですら、之を抑制

して、神と人にと盡すべきことを含んで居る。ウイリアム、ベンが「たゞに不合理の己の克つのみならず、亦合理的の己に克つ」といふたのは、其の事ではないか。(二三三至二五)

◎斯くて後耶穌は語をつぎて、「我と我が言とを耻づる者をば、人の子も亦己と、父と、聖なる御使達との榮光を以て來らん時に、耻づべし」と仰せられた。或時一人の青年が路傍に耶穌を證言して居ると、聴衆の中から「そんな下手な演説などして、耻づかしくないか」と罵る者があつた。すると青年は靜に答へて、「演説の下手なことは耻づかしいが、主耶穌基督は耻づかしくない」と、いふたさうである。其の如く、私共の爲に血を流し給ふた耶穌に就いては、幾ら誇つたからといふて、尙足りないことを覺える。私共は彼と其の言とを耻づべき理由がないのである。(二二六、二二七)

◎八日ほど後、耶穌はペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人をひきつれ、山に登りて祈り給ふ間に、御顔の状は變り、其の衣は白くなつて輝いた。モーセと、エリヤとは、榮光の中に現はれて、彼と物語つたのである。これは耶穌が神の位を棄て、人の姿をとつて

は在し給ふたが、此の時ばかりは、暫し其の本來の御威徳があらはれて。弟子達は「十字架の向ふに冠あり、墓の彼方に勝利あり、王者としての榮光と權力と、彼に伴ふことを、一瞥し得たのであつた。」即ちペテロが後年、「我等は親しく其の稜威を見し者なり、甚も貴き榮光の中より聲出で、こは我が愛しむ子なり、我之を悦ぶと言ひ給へる時、主は父なる神より尊貴と榮光とを受け給へり」(彼後一〇十六、十七)と、言ふた通りであつた。(二八至三一)

◎ペテロはその神々しき光景に、感激止みがたく、耶穌にむかひて、「君よ、我等の此處に居るは善し、我等三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの爲にせん」といふたが、それは許されなかつた。私共も亦幾ら密室に退いて、神と交はることが楽しいからといふて、現在脚下に悩み苦む同胞を見殺しにして置いて、自分達のみ靈の豊かなるを、喜んで居るわけには行かない。傳説によれば、昔エノクは罪より潔められて神と偕に歩み、此の世ながら天國に在る如き生活を續けて、うるさい世間の事務などにたづさはることを好まなかつたが。神は強て彼

を世の中におくり出し、其の時代の人民を治めしめ給ふと。間もなく、人々は途に遣ちたるを拾はず、夜戸をしめずとも盜賊の憂なきほどになつたと、いふてある。私共は亦自分が罪惡から潔めらるゝのみならず、進んで世の人を罪惡より救ひ出さん爲に、戦争すべきものである。(三三二、三三三)

◎聲雲より出で、「これは我が選びたる子なり、汝等之に聴け」と、いはれたかと思へば、早やそこにはモーセも、エリヤも居なくなりて、唯耶穌のみ一人見え給ふた。カルヴァインの言に、「私共は彼一人の許に弟子入りをなし、彼一人によりて救の道を學び、彼一人にのみ信頼すべきことを命せられて居る。一言にいへば、私共は唯彼一人に聴くべきものである」と、いふてある。それ故私共が説教を聞くのは、説教者を通じて語り給ふ耶穌に聴かん爲である。私共が聖書を讀むのは、聖書を通じて教へ給ふ耶穌に學ばん爲である。私共は他の凡ての聲に耳を閉ざして、唯耶穌一人に聴き従はんことを、心がけねばならぬ。(三四三至三六)

(二一〇) 枕する所なし

〔ルカ傳第九章三十七至六十二〕

三七 次の日、山より下りたるに、大なる群衆イエスを迎ふ。三八 視よ、群衆のうちの或人さけびて言ふ「師よ、願くば我が子を顧みたまへ、之は我が獨子なり。三九 視よ、靈の憑るときは俄に叫ぶ、痲撃つて洩をふかせ、甚く害なひ、漸くにして離るるなり。四十 御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど、能はざりや」四一 イエス答へて言ひ給ふ「あ

四四 人々みなイエスの爲し給ひし凡ての事を怪しめる時、イエス弟子たちに言ひ給ふ、「これらの言を汝らの耳になさめよ。人の子は人々の手に付さるべし」四五 かれら此の言を悟らず、辨へぬやうに隠されたるなり。また此の言につきて問ふことか懼れたり。四六 爰に弟子たちの中に、誰が大なるの争論をおこりたれば、四七 イエスその心の争論を知りて、幼児なとり御側に置いて言ひ給ふ、四八「おほよそ我が名のために此の幼児を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を遣しし者を受くるなり。汝らの中に、最も小き者はこれ大なるなり」四九 ヨハネ答へて言ふ「君よ、御名によりて惡鬼を逐ひいだす者を見しが、我等とともに従はぬ故に、

之を止めたり」五十 イエス言ひ給ふ「止むな。汝らに逆はぬ者は、汝らに附く者なり」
 五一 イエス天に擧げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、五二 己に先だちて使を遣したまふ。彼ら往きてイエスの爲に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、
 五三 村人そのエルサレムに向ひて往き給ふさまなるが故に、イエスを受けず。五四 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言ふ「主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給ふか」五五 イエス顧みて彼らを戒め、五六 遂に相共に他の村に往きたまふ。

五七 途を往くとき、或人イエスに言ふ「何處に往き給ふとも我は從はん」五八 イエス言ひたまふ「狐は穴あり、空の鳥は壻あり、されど人の子は枕する所なし」五九 また或人に言ひたまふ「我に從へ」かれ言ふ「まづ往きて我が父を葬ることを許し給へ」六〇 ナイエス言ひたまふ「死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の國を言ひ弘めよ」六一 また或人いふ「主よ、我なんちに從はん、然れど先づ家の者に別を告ぐることを許し給へ」六二 イエス言ひたまふ「手を鋤につけてのち、後を顧みる者は神の國に適ふ者にあらず」

◎ 耶穌は子を有つた親の心に、特別なる同情を表し給ふた。彼が前にナインの寡婦の子を甦へらせ、(路七〇十五)會堂司ヤイロの娘を起たせ、(路八〇五四、五五)今は又獨子の難病に心を痛むる父を憫み、少年の病を醫しておやりなされたのは、其の爲である。

それであるから今日の私共も、飽迄兒童の保護教導を重んじ、彼等をして神の御旨に適ふものとならしめん爲に、最善の努力を試みねばならぬ。サウセイの言に「どれほど難儀をして居つても、可愛い子供のある人を、不幸の人と呼んではならぬ」とあり。マイヤーは又「世界が若し救はるべくは、幼兒を通じて救はれねばならぬ」と、いふて居る。(三七至四三)

◎ 耶穌は其の弟子達にむかひ、再び、彼が遭難の日の、近づきつゝあることを語り給ふた。これは徐ろに弟子達の、それに對する心構へをなさしむべき爲であつたのは、いふ迄もない。同時にこれは又、彼の死が、自ら進んで之に就き給ふたものにて、決して偶然の事變でなかつたことを示すものと、言はねばならぬ。「人之を我より取るにあらず、我自ら捨つるなり。我之を捨つる權あり、復之を得る權あり、我この命令を我が父より受けたり」(約十〇十八)とは、其の謂ではないか。(四四、四五)

◎ 弟子達の中に「誰か大ならん」との争論が起ると、耶穌は幼兒を御側に置き、「汝等の中にて最も小き者は、これ大なるなり」と、説き諭し給ふた。ライル博士の言に、

「人の警戒と祈禱とを要すること、高慢の罪の如きはない。これは暗黒に歩む所の疫癘である、日中に害ふ所の厲しき疾である。昔から如何なる法王も、未だ己といふ法王くらの、人から崇められたものはないとは、奇妙な言草であれど、極めて實際に當つた言である」と、いふてある。それ故私共は力めて其の己に克ち、殊に高慢心を抑制せねばならぬ。(四六至四八)

◎ヨハネは、耶穌の御名によりて惡鬼を逐ひながら、彼等の仲間に加はらぬ者があるのを見て、其の行動を停止した由、報告に及ぶと。耶穌は答へて、「止むな、汝等に逆はぬ者は汝等に附く者なり」と仰せられた。昔モーセは其の從者ヨシユアから、部下の者が豫言するとの訴を聞き。「汝我が爲に嫉みを起すや、エホバの民の皆豫言者とならんこと、又エホバの其の靈を之に降し給はんことこそ、願はしけれ」(民十一〇二九)といひ。パウロは又「或者は嫉妬と紛争とによりて基督を宣傳へ、或者は善き心によりて之を宣傳ふ。孰も宣ぶる所は基督なれば、我之を喜ぶ」(腓一〇十五至十八)といふて居る。私共は又寛大なる度量を以て、自分と流儀の異なる人々を容れねばならぬ。「愛

は寛容にして慈悲あり」(哥前十三〇四)と、教へてあるではないか。(四九、五十)

◎耶穌は堅き決心を以て、一步一步エルサレムに近づき給ふた。ボンペーは危険なる航海をして羅馬に往かねばならぬ場合に言ふた、「私の往くことは必要であれど、私の生くることは必要でない」と。ルーテルがウオルムズの大會に臨む時、彼は言ふた「假令惡魔の數は、ウオルムズの瓦の數ほど多くとも、私は往かねばならぬ」と。此の如く私共も、時としては、所謂生を捨て義を取るべき必要に迫まらるゝことがある。私共には、寧ろ身命を擲つても、飽迄神の御旨を遂行するの覺悟がなくてはならぬ。(五一)

◎サマリヤの或村にて、耶穌をうけつけぬのを見て、ヤコブとヨハネとは、「天より火を呼び下して、彼等を滅ぼすことを欲し給ふか」と尋ねた。彼等は耶穌の爲に熱心であつた。けれ共「其の熱心は知識によらざる」(羅十〇二)ものであつた。彼等は人を救ふ爲に來り給ふた耶穌の御意を取違へて、人を滅さんことを願ふたのである。しかし乍ら多年の後、曾ては此程迄サマリヤ人を詛ふたヨハネが、今一度サマリヤに出直し

て、懇ろに其の人民の救の爲に盡力したことを見るのは、(徒八〇十四)眞に驚くべきの變化ではないか。(五二至五六)

◎耶穌は輕卒に彼に従はんとする者を戒めて、「狐は穴あり、空の鳥は罅あり、されど人の子は枕する所なし」といひ。獻身犠牲の覺悟なしに、神の御軍には従ひ得ぬことを示し給ふた。又親の最後を見届けて後、來り従はんとしふ二心の者を戒めて、「死にたる者に其の死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の國を言ひ弘めよ」と宣ふた。これは他の人に出來ることは他の人に任せ置きて、汝は汝に命せられたる神の御用をなせとの、御旨に外ならない。又不決斷なる人を戒めて、「手を鋤につけて後、後を顧みる者は、神の國に適ふ者にあらず」と仰せられた。ルーテルの言に「地獄に行く道は、善良なる願望を敷石として、しいてある」とあり。西郷南洲は「狐疑猶豫は、義心の不足より發するものなり」といふて居る。大切なる熟慮を伴ふ所の、果斷決行でなくてはならぬ。(五七至六二)

(三二) 七十人の弟子

【ルカ傳第十章一至二十四】

一、この事ののち、主、ほかに七十人をあけて、自ら往かんとする町々處々へ、おのれに先立ち二人づつを遣さんとして言ひ給ふ、二「收獲はおほく勞働人は少し。この故に收獲の主に勞働人をその收獲場に遣し給はんことを求めよ。三往け、視よ我なんぢらを遣すは、羔羊を豺狼のなかに入るるが如し。四財布も袋も靴も携ふ。また途にて誰にも挨拶すな。五孰の家に入るとも、先づ平安この家にあれと言へ。六もし平安の子、そこに居らば、汝らの祝する平安はその上に留らん。もし然らば、其の平安は汝らに歸らん。七その家にとどまりて、與ふる物を食ひ飲みせよ。勞働人のその値を得るは相應しきなり。家より家に移るな。八孰の町に入る

とも、人々なんぢらを受けなば、汝らの前に供ふる物を食し、九其處に在る病のものを醫し、「また神の國は汝らに近づけり」と言へ。十孰の町に入るとも人々なんぢらを受けずば、大路に出でて、「我らの足につきたる汝らの町の塵をも汝らに對して拂ひ棄つ、されど神の國の近づけるを知れ」と言へ。十二われ汝らに告ぐ、かの日にはソドムの方その町よりも耐へ易からん。十三禍害なる哉。コランツよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業を、ツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布をき、灰のなかに坐して、悔改めしならん。十四然れば審判にはツロとシドンとのかた汝等よりも、耐へ易からん。十五カペナウムよ、汝

は天にまで擧げらるべきが、黄泉にまで下らん。十
六 汝らに聴く者は我に聴くなり、汝らを棄つる者は
我を棄つるなり。我を棄つる者は我を遣し給ひし者
を棄つるなり」

十七 七十人よろこび歸りて言ふ「主よ、汝の名に
よりて悪鬼すら我らに服す」十八 イエス彼らに言ひ
給ふ「われ天より閃く電光のごとくサタンの落ちし
を見たり。十九 視よ、われ汝らに蛇・蠍を踏み、仇
の凡ての力を抑ふる權威を授けたれば、汝らを害ふ
もの断えてなからん。二十 然れど靈の汝らに服する
を喜ぶな、汝らの名の天に録されたるを喜べ」
二一 その時イエス聖靈により喜びて言ひたまふ「天

地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智きも
の慧き者に隠して嬰兒に顯したまへり。父よ、然り
此のごときは御意に適へるなり。二三 凡ての物は我
わが父より委ねられたり。子の誰なるを知る者は、
父の外になく、父の誰なるを知る者は、子また子の
欲するままに顯すところの者の外になし」二三 斯て
弟子たちを顧み物に言ひ給ふ「なんぢらの見る所を
見る眼は幸福なり。二四 われ汝らに告ぐ、多くの預
言者も、王も、汝らの見るところを見んと欲したれ
ど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれど聞かざ
りき」

◎「基督の王國は攻勢的、進取的、膨脹的である。それ故初には十二使徒、次には七
十人の弟子、やがては五百人の兄弟、又幾千人の信者を見るに至つたのである」と、
ダアン、ドーレン教授は言ふて居る。耶穌は七十人の弟子を二人宛、三十五組に分け

て各地に遣はし給ふた。「一人の兄弟に援けらるゝ一人の兄弟は、武装したる都市の如
し」と、いふた人もあり。耶穌に在りて結合せられた二人は、二人以上の力がある。
或は言ふ、バルサバと稱ふるヨセフ、及びマツテヤ(徒一〇二三)バルナバ(徒四〇三六)ソス
テネ(哥前一〇二)等は、何れも此の七十人の弟子の一人であつたと。耶穌は彼等に告げ
て宣ふた、「收穫は多く、勞働人は少し。この故に收穫の主(即ち神)に、勞働人を其の
收穫場に遣はし給はんことを求めよ」と。蓋し需用は即ち召である。世の人が救を待
望める状態は、其の儘神が私共を召して、其の救の御軍に従ふべきことを促し給ふ、
御聲に外ならない。それ故私共は、もつと世の救の爲に祈らねばならぬ。又主の召
に應じて、起つて其の身も靈魂も、神の御用の爲に獻げねばならぬ。(一、二)
◎彼等は「羔を豺狼の中に入るゝが如く、」身を以て患難と迫害とを冒すべき必要があ
つた。しかも「財布も、袋も、鞋をも携へず、」清貧勤苦に甘んじ。途中で人に出あ
ふても、餘計な挨拶をする暇には、直ちに其の靈魂に肉薄すべきことを期待せられた。
アムブローズが「挨拶は美しい、けれ共迅速なる實行は更に美しい」といふたのは、

其の事ではないか。孰の家に入るも先づ平安を祈り、到る處爐邊に福音を證し。財政上に於ては、又其の往く先々にて、自給自營の方針を取るべきことを示されて居つた。「勞働人の其の値を得るは、相應しきことであつた」からである。パウロも後に同じ意味を語りて、「主も亦福音を宣傳ふる者の、福音によりて生活すべきことを定め給へり。」(哥前九〇十四)といふて居る。(三至七)

◎彼等が耶穌より命せられた務は、病の者を醫すことと、神の國の近づけるを、教ふる事とであつた。しかもホスターが言ふたる如く、「奇跡は教訓に對する注意を促すべく、世を覺醒する所の鐘聲であつた。」病の者を醫すことは、畢竟、人の心を用意して福音をうけいれしめ、又は福音をうけいれたる後、之を堅うせしめん爲に行はれた、謂はゞ福音宣傳の附屬物であつた。それ故いつの時代にも、最も大切なるものは靈魂の救である。(八至十二)

◎耶穌はコラジンの、ベツサイダの、カペナウムだのいふ町々の人民が、多の能力ある業を見、重ね重ね貴き御教を耳にしなから。其の大なる特權に孤負し、更に悔

改むることをしないのを見て、之を責め給ふた。フインニーの言に「凡て眞の宗教は服従より成立つものである。それ故幾ら基督教を是認しても、之に従はない人は、何等の宗教をも有せぬ人である」とあり。マツクス、ミューラーは又、或印度人が基督教に救はれて後英國に渡り、そこには基督教國の名に相應しき、基督に似た人民のみ多く見らるゝことかと思ふた處が、全く正反對であるのに、甚く失望した物語を、其の著書の中に載せて居る。大切なるは「唯御言を聞くのみにして、已を欺く者とならず、之を行ふ者となる」(雅一〇二二)の心がけである。(十三至十六)

◎七十人の弟子は喜び歸り、耶穌の名によりて、悪鬼すら服した事を報告に及んだ。耶穌は其れに答へて、「靈の汝等に服すを喜ぶな、汝等の名の天に録されたるを喜べ」と、仰せられたとある。彼の大なる審判の日には、曾て主の名によりて悪鬼を逐ひ出し、又多く能力ある業をなし、者にて、反つて「不法をなす者よ、我を離れ去れ」(太七〇三三)と、宣告せらるゝ人もあるといへば。私共は外部の目に見ゆる事功よりも、内部に於ける神との關係の、幾層倍緊要なることを知らねばならぬ。私共は神の世

嗣たり、天國の人民たる資格を、どこ迄も大事に擁護せねばならぬ。(十七至二十)

◎耶穌は世の智者學者が知り得ない真理を、反つて單純正直なる民衆が悟りて、之を樂しむ狀を見て喜び、之を神に感謝し給ふた。使徒パウロの言に「知識は人を誇らしめ、愛は徳を建つ。若し人自ら知れりと思はば、知るべき程の事をも知らぬなり」(哥前八〇一、二)とあり。クーパーの詩には又、「知識は其の、多く學べることを誇らしめる。けれども智慧は、更に多く知らざることを卑下せしめる」といふてある。昔から神の前に大なる人物は、皆自らの足りないことを知り、謙遜りて其の御旨を學び、又其の指導に従ふたものである。他の場合に耶穌が「若し汝等驕へりて幼兒の如くならずば、天國に入ることを得ず。されば誰にても、此の幼兒の如く己を卑下する者は、これ天國にて大なる者なり。」(太十八〇三、四)と仰せられたのも思ひ合されて、最も有難き御教訓であると思ふ。(二二至二四)

(二二) 善きサマリヤ人

【ルカ傳第十章二十五至四十二】

二五 視よ、或る教法師、立ちてイエスを試み言ふ「師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか」二六 イエス言ひたまふ「律法に何と録したるか、汝いかに讀むか」二七 答へて言ふ「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし。また己のごとく汝の隣を愛すべし」二八 イエス言ひ給ふ「汝の答は正し、之を行へ、さらば生くべし」二九 彼おのれを義とせんとしてイエスに言ふ「わが隣とは誰なるか」三十 イエス答へて言ひたまふ「或人エルサレムよりエリコに下るとき強盜にあひしが、強盜どもその衣を剥ぎ、傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。三一 或る祭司たまたま此の途より下り、之を見てかたを過ぎ往けり。三二 又レビ人も此處にきたり、之を見て同じく彼方を過ぎ往けり。三三 然るに或るサマリヤ人、旅して其の

許に來り、之を見て憫み、三四 近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ傷を包みて己が畜にのせ、旅舎に連れゆきて介抱し、三五 かくる日ナリ二つを出し、主人に與へて「この人を介抱せよ。費もし増さば我が歸りくる時に償はん」と云へり。三六 汝いかに思ふか、此の三人のうち、孰か強盜にあひし者の隣となりしぞ」三七 かれ言ふ「その人に憐憫を施したる者なり」イエス言ひ給ふ「なんぢも往きて其の如くせよ」三八 斯て彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給へば、マルタと名くる女おのが家に迎へ入る。三九 その姉妹にマリヤといふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聽きをししが、四十 マルタ響應のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ」四一 主

答へて言ひ給ふ「マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思ひ煩ひて心勞す。四二されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善

きかたを選びたり。此は彼より善ふべからざるものなり」

◎或教法師が「我永遠の生命を嗣ぐ爲に何をなすべきか」と問ふと。耶穌は「律法に何と録したるか、汝如何に讀むか」と反問し給ふた。そこで彼が「汝心を盡し、精神を盡し、力を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし。又己の如く汝の隣を愛すべし」と、舊約聖書を引いて(申六〇五、利十九〇十八)答へるのを聞き。耶穌は「汝の答は正し、之を行へ、さらば生くべし」と宣ふたのである。こゝに「心を盡し、精神を盡し、力を盡し、思を盡して云々」とあるのは。今でいふたら、智を盡し、情を盡し、意を盡し、即ち至人格を打込んで、汝の神を愛すべしとのことである。又「己の如く汝の隣を愛すべし」とは、耶穌が他の場合に教へ給ふた「汝等人に爲られんと思ふ如く、人にも然かせよ」(路六〇三二)といふ、所謂黄金律と全く同じ意味である。あらゆる宗教も道德も、詮じ来れば神を愛し人を愛する、愛の一字に歸着する。なせかと

いふに、「愛は世界最大のもの」(哥前十三〇十三)だからである。(二五至二八)

◎エルサレムからエリコに下る道は、僅か二十哩足らずにて、實に三千五百呎の勾配があつたといへば、それが如何なる難路であつたかも、想像せられる。殊にヘロデ王が宮の普請を終へ、(約二〇二十)四萬の人夫を解雇して以來、急に多數の失業者を生じ、其の或者は此の邊にて強盜となつたのもあるらしい。耶穌が此の街道にて、追剌に遭ふた者の譬喩を語り給ふたのも、尤も千萬の事である。ブラス大將(ワイリアム)は嘗て言ふた「諸君、人生の行路は意外に險阻なる所が多く、そこには幾多の遭難者、負傷者、落伍者等を見出される。諸君は彼等を如何にするつもりであるか」と。これは耶穌の此の御物語と思ひ合せて、如何にも意味深き言である。(二九、三十)

◎或祭司と、レビ人とは、途上に半死半生の旅人を認めながら、顔をそむけて通り過ぎた。彼等は平生宗教を教へ、又宗教上の事務に服する者でありながら、更に宗教的の實行がなかつたのである。けれども私共は愛を口にするのみならず、之を其の身に行はねばならぬ。ロバート、ピールの娘が、或時西倫敦の一商館から、當時流

行の美しい刺繍した上着を求めた。然るに之は東倫敦の或貧しい女が仕立てたものにて、其の女は折柄悪性の熱病に罹つて居つた故。それが上着を媒介としてピールの娘に傳染し、彼女は暫く悶え苦んだ後に死んだ。此の如く他人の身の上は、我が身の上である。私共が若し、世の弱く頼りなき同胞を粗末にして居るならば、禍は必ず遠からぬうちに、我が身に報い來る恐れがあらう。氣をつけねばならぬことである。(三三二、三三三)

◎當時のユダヤ人は、主としてユダヤ、ガリラヤ、ペレヤの三地方に居住しをり。サマリヤは地理的には中間に介在すれども、其の人民には異邦人の血が混じて居るといふ理由を以て、ユダヤ人からは甚く輕蔑せられて居つた。然るに耶穌は其のサマリヤ人が、途上の遭難者を見て之を憫み、近寄りて應急手當をなし、己が馬にのせて旅舎に伴ひ、之を介抱して、翌日出立の際は若干の金さへのこし、後の世話まで頼んだといふ話をせられた。これは國籍、人種、信仰箇條等の如何に關はらず、唯愛の實行のみ貴きことを、示し給ふたものである。トルストイは「愛の在る所に神あり」といひ。

ベンゲルは又一人は唯其の宗派心や、國民的偏見を棄て、後、始めて眞に、自由にして且つ完全なる、慈愛を實行することが出来る」と、いふて居る。共に道理至極の説である。と考へられる。(三三三至三七)

◎耶穌が或村(ベタニヤ)に入り給ふ時、マルタといふ女が彼を「己が家に迎へ入れ」たとある。其の如く私共も亦、耶穌を其の家に迎へ入れねばならぬ。ジェームス、ハミルトンの言に、「基督者の家庭は天國から渡來したものである。これは我が父の家に住處多しいふ、其の家に象りて造られたものにて。私共が聽て彼處に入るべき爲に豫備教育を施す所である。これは主耶穌の賜の一つにて、基督教の一特産物である」と、いふてある。私共の家庭を、然うした、耶穌の御旨の行はるゝ所たらせたまものである。(三三八)

◎マルタの如く起つて働くことの必要を知る者は、亦マリヤの如く坐して主の御旨を學ぶことの、更に一層大切なることをも知らねばならぬ。耶穌が「マルタよ、マルタよ、汝各様の事により、思ひ煩ひて心勞す。されど無くてならぬものは多からず。唯一

つのみ。マリヤは善き方を選びたり」と、仰せられたのは其の爲である。昔アブラハムはマムレの橡林にて、天幕の入口に坐する時、神彼に現はれ給ひ。(創十八〇)弟子達は一つ處に集りて坐し居る時、ペンテコステの靈が彼等の上に降つた。(徒二〇二)而してエテオピヤの權官は又、車中に坐し居る時、神はピリポを彼に遣はし給ふた(徒八〇二八)などいふ例もあれば。それにつけても私共は、亦折々時を作つて耶穌の御前に出で、其の膝下に坐つて、其の教を受くる心がけが最も肝要である。(三九至四二)

(二三三) 祈ることを教へ給へ

【ルカ傳第十一章一至二十八】

一 イエス或處にて祈り居給ひしが、その終りしとき、弟子の一人いふ『主よ、ヨハネの其弟子に教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ』ニイエス言ひ給ふ『なんぢら祈るときに斯く言へ、父よ、願くば

御名の崇められん事を。御國の來らん事を。三 我らの日用の糧を日毎に與へ給へ。四 我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給へ。我らを嘗試にあはせ給ふな』五 また言ひ給ふ『なんぢらの

中たれか友あらんに、夜中にその許に往きて「友よ我に三つのパンを貸せ。大わが友、旅より來りしに之に供ふべき物なし」と言ふ時、七 かれ内より答へて「われを煩はすな、月にはや閉ぢ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて與へ難し」といふ事ありとも、八 われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて與へねと、求の切なるにより、起きて其の要する程のものを與へん。九 われ汝らに告ぐ、求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。十 すべて求むる者は得、尋ねる者は見出し、門を叩く者は開かるるなり』十一 汝等のうち父たる者、たれか其の子、魚を求めんに、魚の代に蛇を與へ。十二 卵を求めんに、鰥を與へんや。十三 さらば汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや。

十四 さてイエス惡の惡鬼を逐ひだし給へば、惡鬼

いでて啞、物言ひしにより、群衆あやしめり。十五 其の中の或者ども言ふ『かれは惡鬼の首ベルセアルによりて惡鬼を逐ひ出すなり』十六 また或者どもは、イエスを試みんとて天よりの徴を求む。十七 イエスその思を知りて言ひ給ふ『すべて分け争ふ國は亡び、分け争ふ家は倒る。十八 サタンもし分け争はば、其の國いかで立つべき。汝等わが惡鬼を逐ひ出すをベルセアルに由ると、言へばなり。十九 我もしベルセアルによりて、惡鬼を逐ひ出さば、汝らの子は誰によりて之を逐ひ出すか。この故に彼らは汝らの審判人となるべし。二十 然れど我もし神の指によりて、惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり。二一 強きもの武具をよるひて己が屜敷を守るときは、其の所有、安全なり。二二 然れど更に強きもの來りて、之に勝つときは、恃とする武具をことごとく奪ひて、分捕物を分たん。二三 我と備ならぬ者は我にそむき、我と共に集めぬ者は散すな

りの二四 穢れし靈、人を出づる時は、水なき處を巡りて、休を求む。されど得ずして言ふ「わが出でし家に歸らん」二五 歸りて其の家の掃き淨められ、飾られたるを見、二六 遂に往きて己よりも惡しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住む。さ

ればその人の後の状は、前よりも惡しくなるなり」二七 此等のことを言ひ給ふとき、群衆の中より或る女、聲をあげて言ふ「幸福なるかな、汝を宿しし胎、なんぢの嘔ひし乳房は」二八 イエス言ひたまふ「更に幸福なるかな、神の言を聽きて之を守る人は」

◎耶穌は其の弟子の需めに應じ、所謂「主に祈」を口授し給ふた。「父よ」と神を呼ぶ例は、舊約聖書になきことにて、全く耶穌に始まつたのである。「願くば御名の崇められんことを」とは、神の榮を求むるものである。「御國の來らん事を」とは、世の救を願ふものである。然る後物質上には「我等の日用の糧を日毎に與へ給へ。」心靈上には「我等の罪をも免し給へ。」誘惑に對しては、「我等を嘗試にあはせ給ふな」と、祈るべきことを教へられたのである。ピーチャーの言に「私は初め、主の祈を極めて簡短なるものと思ふたが。其の意味を考ふるに及び、之は中々一生かゝつても唱へ盡せぬ、祈禱であることに心付いた。例へば「父よ」といふ一語にても、之を満足に唱へ得る者は、一箇の聖徒でなくてはならぬ。さうでない人々には、之を唱へることが、十丈

の高塚の、攀づるに難き感があるであらう」と、いふてある。如何にも尤もの説と思はるゝ。(一至五)

◎夜半に友人の許に往きて、パンを借らんことを求むる人の譬喩は、他人の爲にする中保の祈禱の大切なること、又熱心なる祈禱の必要なることを、教ふるものである。ルーテルの祈禱は、「神に聽かれざることなし」と言はれた位、極めて熱心なるものであつた。ゴルドン將軍は又しばしば「私は今朝も三十分間、主の前にアガグ(母前五〇三三)を退治する爲に苦戦した」と、いふ様なことを言ふて居つた。これは彼が熱心なる祈禱を以て、舊き己に打克つ爲に、惡戦苦闘したことをいふたものである。極言すれば、熱心ならざる祈禱は、殆んど祈禱と呼ぶべき價值なきものと、思はねばならぬ。(五至八)

◎こゝに「求めよ」「尋ねよ」「門を叩け」などあるのは、祈禱に就いての御命令である。又それらの御命令をうけて、「さらば與へられん」「さらば見出さん」「さらば開かれん」などあるのは、祈禱が屹度聽かるゝとに就いての御約束である。親が子の願を叶へて

やるよりも以上に、神は喜んで私共の祈禱を聴き給ふ。「さらば汝等悪しき者ながら、善き賜物を其の子等に與ふるを知る。まして天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや」とあり。神が既に其の靈を私共に賜はるほどであれば、亦それより以下の物を、需用に循ふて與へ給ふのは、更に疑を容るべき餘地がない。ホール監督の言に「私は其の求めた物か、又は求むべき筈のものかを、神から與へらるゝことを確信する」と、いふてある。私共の神は祈禱に應へ給ふ神である。(九至十五)

◎こゝに又「悪鬼の首ベルゼブル」とある、此のベルゼブルといふ名は、もと「蠅の神」から出たものである。悪魔の首が蠅の神と呼ばれて居るのは、面白くないか。(一) 蠅は不潔な物の在る所に生ずる。其の如く悪魔は罪の穢れに集まるものである。(二) 蠅は病毒を媒介する。其の如く悪魔は罪惡を傳播し歩くものである。(三) 蠅は五月蠅いものである。其の如く悪魔は拂へども去らず、執念深く私共に附纏ふものである。彼が耶穌を試みた時、三度が三度共、美事彈ね附けられたにも拘らず、尙「暫く耶穌を離れ」(路四〇十三)たのみにて。聽て又機を窺ふて、出直して來たといふのを見

ても、彼の執着心の強いことが解かるではないか。それ故私共は、油断なく悪魔を警戒すべき必要がある。(十四至二三)

◎穢れし靈が一度其の人を出でたる後、他の七つの靈を連れて歸り來るといふ譬喩は、神なき社會改造、又救なき人格の修養が、そばから弊害にのみ陥りて、收拾すべからざることを、戒められたものである。或人がコレリツヂにむかひ、或種の社會改善策に就いて、盛んに其の効果の顯著なるべきことを語り出でると。コレリツヂは傍の蘆草をむしつて空に投げ、「御覽なさい、あの蘆草が支那の方角に向ふて投げられたことは間違ない。けれどもそれが支那迄到着すると否とは、全く別問題である。恐らくは風に弄ばれ、泥にまみれて、蘆草は日ならず廢滅に歸するであらう。歴史は神の御力を伴はぬ幾多の計畫が、亦此の如きものであることを、物語つて居るではないか」と、いふたさうである。ブシネルが「凡ての改善事業の魂は魂、の改善にある」といふたのも思合されて、意味深長なることを覺えられる。(二四至二六)

◎耶穌の有難い御教に聞きとれて、覺えずも「幸福なる哉、汝を宿し、胎云々」と叫

んだ婦人は、マルタとマリヤとの家に使はれた、マルセラといふ女中であつたとの傳説がある。けれ共耶穌は、それよりも尙幸福ある者は、神の言を聽きて之を守る人である」と、教へ給ふた。アウガスチンの言に、「これはマリヤが耶穌を其の胎に宿した如く、彼を其の心に宿す者の幸福を示されたのである」とあり。私共は耶穌を心に宿す者の、いと大なる幸福を身に經驗して居らねばならぬ。(二七、二八)

(二四) 身の燈火

【ルカ傳第十一章二十九至五十四】

二九 群衆おし集まれる時、イエス言ひ出でたまふ「今の代は邪曲なる代にして徴を求む。されどヨナの徴のほかには徴は與へられじ。三〇 ヨナがニネベの人に徴となりし如く、人の子もまた今の代に然らん。三一 南の女王、審判のとき、今の代の人と共に起きて、之が罪を定めん。彼はソロモンの智慧を聽かん

とて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝るもの此處に在り。三二 ニネベの人、審判のとき、今の代の人と共に立ちて之が罪を定めん。彼らはヨナの宣ふる言によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。

三三 誰も燈火をともして、穴藏の中または升の下に

おく者なし。入り來る者の光を見んために、燈臺の上に置くなり。三四 汝の身の燈火は目なり、汝の目正しき時は全身、明るからん。されど惡しき時は、身もまた暗からん。三五 この故に汝の内の光、闇にはあらぬか、省みよ。三六 もし汝の全身、明くして暗き所なくば、輝ける燈火に照さるる如く、その身全く明からん」

香その他あらゆる野菜の十分の一を納めて、公平と神に對する愛とを等閑にす、然れど之は行ふべきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。四三 禍害なるかなマリサイ人よ、汝らは會堂の上座、市場にての敬禮を喜ぶ。四四 禍害なるかな、汝らは露れぬ墓のごとし。其の上を歩む人これを知らぬなり。

三七 イエスの語り給へるとき、或マリサイ人その家にて食事し給はん事を請ひたれば、入りて席に著きたまふ。三八 食事、前に手を洗ひ給はぬを、此のマリサイ人見て怪みたれば、三九 主、これに言ひたまふ「今や汝らマリサイ人は、酒杯と盆との外を潔くす、然れど汝らの内は貪慾と惡とにて滿つるなり。四十 愚なる者よ、外を造りし者は、内をも造りしならずや。四一 唯その内にある物を施せ。さらば、一切の物なんぢらの爲に潔くなるなり。四二 禍害なるかな、マリサイ人よ、汝らは薄荷、芸

四四 汝らは先祖の所作を可しとする證人ぞ。それは彼らは之を殺し、汝らは其の墓を建つればなり。四九 この故に神の智慧、いへる言あり、われ預言者と使徒とを彼らに遣さん、その中の或者を殺し、ま

た逐ひ苦しめん。五十世の創より流されたる凡ての預言者の血、五一即ちアベルの血より、祭壇と聖所の間に於て殺されたるザカリヤの血に至るまでを、今の世に糺すべきなり。然り、われ汝らに告ぐ、今の代は糺さるべし。五二禍害なるかな、教法師よ、

なんぢらは智識の鍵を取り去りて自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり」
五三此處より出で給へば、學者、パリサイ人ら烈しく詰り寄せて様々のことを詰りはじめ、五四その口より何事なか捉へんと待構へたり。

◎南の女王は千里を遠しとせず、來りてソロモンの智慧を聴いた。(王上十〇一至九 彼女は求道者の鑑である。又ニネベの人民はヨナの宣ぶる言によりて、眞實に悔改めた。(拿三〇一至十) 彼等は改心者の模範とも見らるべきものである。然るに今ソロモンよりも、ヨナよりも、遙に大なる耶穌に接した私共は、彼を如何に扱ふて居るであらうか。昔神光といふ僧は、達磨大師の教を求めて、一夜雪中に立ち盡したる後、果ては左の臂を切つて其の前に投げ出し、始めて弟子入を許され、終に禪宗第二の祖となつたとかいふ話がある。今日の私共も、どうか古人に耻ぢぬ熱誠を以て、耶穌の教を學び、且つ之を身に行ひ度ものである。(二九至三二)
◎「誰も燈火を點して穴藏の中、又は升の下に置く者なし。入り來る者の光を見ん爲

に、燈臺の上に置くなり。」私共は神の御光を心に保つのみならず、進んで周圍の暗き世に住める人々を照さねばならぬ。或宗教家が一青年に、來りて日曜學校を教へんことを求めると。彼は斷つた。而して、「日曜學校を教へぬからとて、罰は當らないでせう」といふと。宗教家は答へて、「君は昔耶穌を拒んだサマリヤの或村民が、危なく天からの火にて焚かるることを免れた話を、知つて居るであらう。(路九〇五至五六) 彼等は、幸に天罰を免れた。しかし乍ら同時に彼等は、少くとも耶穌の御教を伺はず、其の病人を醫されず、彼等の中から一人の弟子をも出さなかつた。君の場合も亦其の如く、日曜學校を教へぬ爲に、靦面の罰を身に受けぬか知らねど。之によりて君が、善良有用の生活を送るべき機會を失ふことだけは、確實である」と言はれて、青年は其の非をさとす。乃ち進んで、日曜學校の一組を受持つやうになつたさうである。それ故私共も、あらゆる機會を捉へて、其の光を周圍の人に照さん爲に、努力する所がなくてはならぬ。(二三至三六)

◎パリサイ人の家に招かれたまふた時、耶穌が彼等の習慣の如く、食前に手を洗ひ給

はぬのを見て、パリサイ人が之を怪んだ。耶穌は答へて、「幾ら手ばかり洗ふても、心を洗はねば何の役に立たう。杯と盆との外のみ潔くしても、内は貪慾と惡とにて満ちて居るやうでは、斷じて神の御旨に適ふ所以でない」と、いふ意味の教をなし給ふた。使徒パウロが後に「儀文は殺し、靈は活かす」(哥後三〇六)といふたのも、之と同じ道理を教へたものであらう。ジエレミー、テラーの言に、「幾ら衣の塵を掃ふても、腹痛は癒えない」とあり。ピーボデー教授は又「より善き方法は、社會問題を扱ひ易からしむれど、より善き人によりてのみ、其の解決は出来る」といふて居る。それ故何より大切なるは、内部人心の改造にあることを知らねばならぬ。(三七至四一)

◎耶穌は尙それを機會に、パリサイ人が薄荷、芸香、其の他野菜物の十分一を神に奉納すれども、反つて公平と、神に對する愛とを缺ぐことを、戒め、「之は行ふべきものなり、而して彼も亦等閑にすべきにあらず」と、仰せられた。彼等は小さき善事に安んじて、更に大なる善事を怠つて居つたものである。サムエル、ジョンソンの祈禱に、「神よ、私が母に對して、不親切を行ひし罪を赦し給へ。又母に對して、親切を行

はざりし罪を赦し給へ」とあり。私共は亦己が怠慢の爲に、「善を行ふことを知りて之を行はぬ」(雅四〇七)等閑の罪を重ねぬやう、不斷の警戒を要する。(四二至四四)

◎當時のユダヤ人は、其の先祖が殺した預言者を追悼して、碑など建て置きながら、一方には、同じ時代の神の僕を迫害し、之を殺害しつゝあつたといふのは、どうした矛盾の行であらう。「歴史は人が、更に歴史に學ばぬことを教へる」と、誰か言ふたのは眞實の事である。彼等は先祖を咎めつゝ、其の尤めに倣ふものであつた。私共は神が時々需用に應じて起し給ふ其の僕を認め、彼等が言ふ所に聽き従はねばならぬ。耶穌は其の弟子を派遣するに當りて、「汝等を受くる者は我を受くるなり。我を受くる者は、我を遣はし給ひし者を受くるなり。凡そ我が弟子たる名の故に、此の小さき者の一人に、冷かなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝等に告ぐ、必ず其の報を失はざる可し」(太十〇四、四二)と、仰せられて居るではないか。(四五至五一)

◎耶穌は又教師等が自ら道を踏み迷ひ、他人を迄も同じ迷に陥らしむる事を責め、「汝等は知識の鍵を取り去りて自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり」と、宣

ふた。哲學者ヒュームが其の不信仰なる學説を以て、母の宗教上の信念を破壊し去りたる後、彼女は大患に罹り、書を旅先の我が子に寄せていふた。「母は前に患難の時の慰藉となりし信仰を失ひ、今深き失望の中に悶えて居る。直に書面でありと、汝が哲學的の慰安をおくれ」と。ヒュームは驚き、急ぎ郷里蘇格蘭に歸つたが、到着する前に母は死んで居つた。「此の世は蹟物あるによりて禍なる哉。蹟物は必ず來らん、されど蹟物を來らする人は禍なる哉」(太十八〇七)とは、これをいふのではないか。

(五二至五四)

(二二五) 愚なる富人

【ルカ傳第十二章一至三十一】

一その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合ふばかりなり。イエスマづ弟子たちに言ひ出で給ふ「なんぢら、パリサイ人のパンだれに心せよ、これ偽善

なり。二蔽はれたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬはなし。三この故に汝らが暗きにて言ふことは、明きにて聞え、部屋の内にて耳により

て語りしことは、屋の上にて宣べらるべし。四我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何を爲し得ぬ者どもを懼るな。五懼るべき者を汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ。我汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。六五羽の雀は二錢にて賣るにあらすや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。七汝らの頭の髪までもみな數へらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。八われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言ひあらはす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言ひあらはさん。九されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否まれん。十凡そ言をもて人の子に逆ぶ者は赦されん。然れど聖靈を潰すものは赦されじ。十一人なんぢらを會堂、或は司、あるひは權威ある者に引きゆかん時、いかに何を答へ、または何を言はんと思ひ煩ふな。十二聖靈そのとき言ふべきこととを教へ給はん」

十三群衆のうちの或人いふ「師よ、わが兄弟に命じて、副業を我に分たしめ給へ」十四之に言ひたまふ「人よ、誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ」十五斯て人々に言ひたまふ「慎みて凡ての慳貪をふせげ、人の生命は所有の豊なるには因らぬなり」十六また譬を語りて言ひ給ふ「ある富める人、その畑に實りたれば、十七心の中に語りて言ふ「われ如何にせん、我が作物を藏めおく處なし」十八遂に言ふ「われ斯く爲さん、わが倉を毀ち、更に大なるものを建てて、其處にわが穀物および善き物をことごとく藏めん。十九斯てわが靈魂に言はん、靈魂よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば、安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ」二十然るに神かれに「愚なる者よ、今宵なんぢの靈魂とらるべし、然らば汝の備へたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言ひ給へり。二一己のために財を貯へ、神に對して富まぬ者は、斯のごとし」

三三 また弟子たちに言ひ給ふ、「この故に、われ汝らに告ぐ、何を食はんと生命ことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな。二三 生命は糧にまさり體は衣に勝るなり。二四 鴉を思ひ見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養ひたまふ、汝ら鳥に優るること幾許ぞや。二五 汝らの中たれか思ひ煩ひて、身の長一尺を加へ得んや。二六 然れば最小き事すら能はぬに、何ぞ他のことを思ひ煩ふか。二七 百合を思ひ見よ、紡がず、織らざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソ

○「汝等パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり」とは、パリサイ人の事を爲す動機が偽善である故、其の眞似をすなとの御戒である。スボルジョンは、或時偽善者の特徴を擧げて、次の如く言ふて居る。(一)偽善者は其の言と行とが一致しない、(二)偽善者は人に見せん爲に善き事を行ふ。(三)偽善者は人の尊崇を求めぬ。(四)偽善者は宗教の生命を棄て、其の形式をとる。(五)偽善者の宗教は時と所とによりて、其の性

一四〇
ロモンだに其の服装この花の一つにも及かざりき。二八 今日ありて、明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く装ひ給へば、況て汝らをや、ああ信仰うすき者よ。二九 なんぢら何を食ひ、何を飲まんと思むな、また心を動かすな。三十 是みな世の異邦人の切に求る所なれど、汝らの父は此等の物の、なんぢらに必要なるを知り給へばなり。三一 ただ父の御國を求めよ。さらば此等の物は、なんぢらに加へらるべし。

質を變へる。(六)偽善者は人を責むるに急にして、自ら待つこと甚だ寛大である。私共は何卒、此うした偽善者の仲間に入り度ないものである。(一至三)
○「其の畏るゝ所を見れば、其の人となりが解かる」といふた人がある。私共は「身を殺して後に何を爲し得ぬ」人を懼れず、唯殺したる後、ゲヘナ(地獄)に投げ入るゝ權威ある」神を、畏れねばならぬ。一羽の雀をさへ忘れぬ神は、「多くの雀よりも優るゝ」私共を憶えて、之を護り給ふ。私共の頭の髪までも、皆數へられて居るのである。ピクトル、ユーゴーは言ふた、「春先き、榊樹に幾萬とも知れぬ若葉が萌え出る。其の一葉一葉を榊樹は記憶して、之に養分を送る如く。神は其の幾億の子供等を、一人一人記憶して、之に恩寵と保護とを加へ給ふのである」と。それ故私共は、古への詩人と共に言はねばならぬ。「エホバ我が方に在ませば我に懼れなし、人我に何をなし得んや」(詩百十八〇六)と。眞に心強いことではないか。(四至十二)
○群衆の中或人が「師よ、我が兄弟に命じて、嗣業を我に分たしめ給へ」といふと。耶穌は否みて、「人よ、誰が我を立て、汝等の裁判人、又分配者とせしぞ」といひ。

やがて人々にむかひ、「慎みて凡ての慳貪をふせげ、人の生命は所有の豊かなるには因らぬなり」と、告げ給ふた。つまりお互が慳貪をふせぎさへすれば、兄弟喧嘩も、財産争ひも、自然に痕を絶つべきことを示し給ふたのである。或時印度に兄弟二人、親の遺産を争ふて居る者があり。一宣教師に來りて調停を求めると、彼は其の問題には觸れないで、靜かに基督と其の十字架との話をした。すると兄弟はそれに感動して悔改め、救の恵を受けて見ると、最早何も相争ふほどの問題はなくなり。乃ち喜び勇んで共に其の家に歸つたといふことがある。概して言へば、一切の争議は、人々が其の私慾を去りて、己の欲する所を他人に施すやうになれば、自ら解決せられざるはなきものである。(十三至十五)

◎こゝに或富める人の物語がある。彼は平生神の事をも、人の事をも考へないで、只管其の私の爲に生くる人物であつた。即ち「我が作物」「我が倉」「我が穀物」「我が靈魂」と、言ふて居つた通りである。彼は又靈の事を忘れて、専ら肉の慾を充たさん爲に苦心する男であつた。即ち「安んせよ、飲食せよ、樂しめよ」と、獨りよがりをし

て居つた通りである。彼は尙生き存へて、「多年を過し」得べきものとのみ、考へて居つたが。神は之に「愚なる者よ、今宵汝の靈魂とらるべし。さらば汝の備へたる物は、誰が有となるべきぞ」と仰せられた。私共は假令此の世に多くの財寶を有せずとも、少く共「信仰に富み」(雅二〇五)「善き業に富み」(提前六〇十八)又「基督の測るべからざる富」(弗三〇八)を、世に傳へ得るやうでなくてはならぬ。(十六至二十一)

◎耶穌の讀み給ふた書物が三卷ありて、それは聖書と、人と、自然とであつた。即ちここに「鴉を思ひ見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし、然るに神は之を養ひ給ふ。」又「百合を思ひ見よ、紡がず、織らざるなり、されど我汝等に告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、其の服裝此の花の一つに及がざりき」といふて。私共が生活問題の爲に、滅多な思煩ひをすまじきことを示された如きは。彼が如何に、多くの大切なる教訓を、自然の中に見出して居給ふたかを、窺ふべきの事實である。テニソンの詩に、「壁の裂目に生へたる小さき草花を、根からもぎ取つて、掌の上に置き。この草花は何かといふとを、眞實に理解すれば、併せて神及び人は何かといふとをも、知らるゝ

であらう」と、いふ意味の句がある。此の如く私共も、自然に顯はれた神の眞理を學びたきものである。「自然は第二の聖書だからである。」(二二至三十)

◎「唯父の御國を求めよ、さらば此等の物は汝等に加へらるべし」とは、所謂「神第一」の主義を、教へ給ふたものに外ならない。エリサベス女皇が或實業家に、何かの務を命ぜられた時、彼は「陛下よ、其の間私の事業は如何相成りませうか」と尋ねると。女皇は答へて、「其の事は心配に及ばぬ。御身が朕の爲に盡して居る間は、朕も御身を保護するであらう」と、いはれた。それと同じ様に、私共が若し神の爲に盡して居れば、神は必ず私共を保護し給ふのである。即ち「又諸人の心勞を神に委ねよ、神汝等を慮かり給へばなり」(彼前九〇七)とある通りである。(三二)

(二一六) 戦争的の宗教

【ルカ傳第十二章三十二至五十九】

三二 懼るな小き群よ、なんぢらに御國を賜ふことは、汝らの父の御意なり。三三 汝らの所有を賣りて施濟をなせ。己がために舊びぬ財布をつくり、盡きぬ財寶を天に貯へよ。かしこは盗人も近づかず、蟲も壞らぬなり。三四 汝らの財寶のある所には、汝らの心もあるべし。

三五 なんぢら腰に帶し、燈火をともし居れ。三六 主人、婚筵より歸り來りて戸を叩かば、直ちに開くために待つ人のことくなれ。三七 主人の來るとき、目を覺しをるを見らるる僕どもは幸福なるかな。われ誠に汝らに告ぐ、主人帶して其の僕どもを食事の席に就かせ、進みて給事すべし。三八 主人、夜の半ころ若くは夜の明くる頃に來るとも、斯の如くなるを見らるる僕どもは幸福なり。三九 なんぢら之を知れ、家主もし盗人いづれの時來るかを知らば、その家を穿たすまじ。四〇 汝らも備へなれ。人の子は思はぬ時に來ればなり」

四一 ベテロ言ふ「主よ、この譬を言ひ給ふは我らにか、また凡ての人にか」四二 主いひ給ふ「主人が時に及びて僕どもに定の糧を與へさする爲に、その僕どもの上に立つる忠實にして慧き支配人は誰なるか」四三 主人のきたる時、かく爲し居るを見らるる僕は幸福なるか。四四 われ實をもて、汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌どらすべし。四五 若しその僕、心のうちに主人の來るは遅しと思ひ、僕、婢女をたたき、飲み食ひして酔ひ始めなば、四六 その僕の主人おもはぬ日、知らぬ時に來りて、之を烈しく笞ち、その報を不忠者と同じうせむ。四七 主人の意を知りながら用意せず、又その意に従はぬ僕は、笞たるること多からん。四八 然れど知らずして、打たるべき事をなす者は、笞たるること少からん。多く與へらるる者は、多く求められん。多く人に托くれば、更に多くその人より請ひ求むべし。四九 「我は火を地に投ぜんとて來れり。此の火すでに

燃えたらんには、我また何を望まん。五十されど我には受くべきマブテスマあり。その成し遂げらるるまでは思ひ通ること如何許ぞや。五一 われ地に平和を興へんために來ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。五二 今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争はん。五三 父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑嬢は嫁に、嫁は姑嬢に分れ争はん。五四 イエスマた群衆に言ひ給ふ「なんぢら雲の西より起るを見れば、直ちに言ふ「急雨きたらん」

と。果して然り。五五 また南風ふけば、汝等いふ「強き暑あらん」と、果して然り。五六 偽善者よ、汝ら天地の氣色を辨ふることを知りて、今の時を辨ふることを能はぬは何ぞや。五七 また何故みづから正しき事を定めぬか。五八 なんぢ訴ふる者とともに司に往くとき、途にて和解せんことを力めよ、恐くは訴ふる者、なんぢを審判人に引きゆき、審判人なんぢを下役にわたし、下役なんぢを獄に投げ入れん。五九 われ汝に告ぐ、一レプタも残りなく償はずば、其處を出づること能はじ」

◎財産を同胞の福祉の爲に用ひねばならぬ。これは「己が爲に舊びぬ財布を造り、盡きぬ財寶を天に貯ふ」る所以であると、耶穌は教へ給ふた。其の事に就いてアウガスチンの言に、「例へば友人が來て、君は家具を地面に置いて居る故、下の方から腐蝕する。もつと高い所に積み直し給へと、注意したなら、喜んで之に従ふであらう。其の如く基督は、朽ち果つべき地上の財産を、永遠に安全なる天上に積み直せと、教へ給ふのである」と、いふてある。私共は喜んで、此の有難き御訓誨に聽き従はねばならぬ。(三三三至三四)

◎ジエームス、スミスは死に臨んで言ふた、「私は旅客が旅装を調べて停車場に赴き、既に歩廊に立ち、切符を手にして、列車の到着を待つが如く。今は一切の用意悉く成りて、只管御使の來り迎ふるを待つて居るのである」と。ホイットフィールドは又しばしば言ふた、「私は今宵死んでも、手袋一つ取り散らして居ないと感じつゝ、臥床に入ることを好むのである」と。此の如きものは、耶穌がこゝに「汝等腰に帶し、燈火を點して居れ。」又「汝等も備へ居れ、人の子は思はぬ時に來ればなり」と宣ふた所を、其の儘身に行ふて居つたものと、いふことが出來やう。私共も亦何時、耶穌が來り給ふとも差支なきやう、日頃から其の用意がなくてはならぬ。(三五至四十)

◎耶穌は私共が「忠實にして慧き支配人」として、其の神から委託せられた務を、行ふて居るべきことを教へ給ふた。カーライルの言に、「其の職業を見出したる者は、幸福なる哉。彼をしてそれより以上の祝福を求めざらしめよ。汝の職業を知りて之を

なせ。しかもハイキュリースの如くに働け。此の世に唯一つの怪物あり、懶惰者が之である」と、いふてある。耶穌は又惡き支配人が「僕、婢女をたゝき、飲食して酔ひ始め」たとを語り給ふた。「此の如く人の上に立つ者の陥り易き罪惡が二つありて、それは部下を壓制する事と、放逸に流るゝ事とである。」(アポソト) 私共は又特に飲酒の惡風に反抗せねばならぬ。久しき以前、或米國人の祈禱に「神よ酒屋を誣ふて之を滅し給へ。酒屋營業者を助けて彼等を正業に就かせ給へ。而して我が國を救ひ給へ」と、いふてある。參考に資すべきことではないか。(四一至四六)

◎由來大なる特權には、大なる義務が伴ふものである。耶穌がこゝに「多く與へらるる者は、多く求められん」と、宣ふたのは之が爲である。それ故學問、財産、地位、其の他信仰上の便宜等、何でも人より餘計に授かつた者は、亦それだけ餘計に神に盡すの責任あることを知りて、奮發する所がなくてはならぬ。傳説に、聖マカリアスが一つの骸骨にむかひ「汝の中に宿つた靈魂は、今何處に居るか」と尋ねると、「邪神を信じた爲に、地獄に墜ちて居る」と答へた。「彼よりも深い、地獄の底に墜ちて居る者

があるか」と問ふと、「ある、耶穌に逆ふたユダヤ人が」といふた。「其のユダヤ人よりも尙深い、地獄のどん底に墜ちて居る者があるか」と問ふと、「ある、基督の救を知りながら、之を粗末にした基督者が」といふたさうである。それにつけても私共は「神の恩恵を徒らに受けざらん」(哥後六〇一) 覺悟が、何より大切なことを知らねばならぬ。(四七、四八)

◎エレミヤ記に、「彼等我が民の娘の傷を淺く醫し、平康からざるに、平康平康といへり」(耶八〇十一)とある。しかし乍ら耶穌の宗教は、刃を病根に觸れて、之を根本的に治療する所の宗教である。即ち人を凡ての禍の本なる罪より救ひ、又惡魔の支配を顛覆して、神の王國を打建つる迄は、満足し得ない所の宗教である。即ち耶穌が「我は火を地に投せん爲に來れり。此の火既に燃えたらんには、我又何をか望まん。我地に平和を興へん爲に來ると思ふか。我汝等に告ぐ、然らず、反つて分争なり」と、仰せられたのは、其の謂である。それ故一箇の基督者たるは、一箇の軍人たることである。耶穌の救に與かる者は、亦進んで彼の救世濟民の義戰に参加せねばならぬ。使徒パウ

口が「信仰の善き戦闘を戦へ。」(提前六〇十二) 又「汝基督耶穌の善き兵卒として、我と共に苦難を忍べ。」(提後二〇三)など教へたのも、全く同じ意味をいふたものに外ならぬ。 (四九五至五三)

◎「歴史は攝理の啓示である」と、コースーツは言ふた。私共は時の徴を辨へて、神が今日の私共に期待し給ふ所を、成就せんことを努めねばならぬ。しかも「神との和解は、基督の宗教の第一義である。」それ故、私共は何よりも先づ耶穌によりて罪を赦され、神との間に、全き平和を経験せねばならぬ。パスカルの言に、「中保者なければ、神との交通はあり得ない。」又レイトンの言に「基督が私共の爲に、如何ほど必要であるかを、知れば知るほど、益々彼を重んじ、彼を愛するのである」と、いふてある。げに耶穌は神に立てられて、私共の「智慧と、義と、聖と、救贖となり給ふ」(哥前一〇三十) た御方である。(五四至五九)

(二七) 汝等も悔改めずば

【ルカ傳第十三章一至二十一】

一その折しも或る人々きたりてピラトがガリラヤ人らの血を彼らの犠牲にまじへたりし事をイエスに告げられたれば、二答へて言ひ給ふ「かのガリラヤ人は斯ることに遭ひたる故に、凡てのガリラヤ人は斯る罪人なりしと思ふか。三われ汝らに告ぐ、然らず汝らも悔改めずば、皆おなじく亡ぶべし。四又シロアムの槽たふれて、押し殺されし十八人は、エルサレムに住める凡ての人に勝りて罪の負債ある者なりしと思ふか。五われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも悔改めずば、みな斯のごとく亡ぶべし」
*又この譬を語りたまふ「或人おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて果を求むれども得ずして七園丁に言ふ「視よ、われ三年きたりて此の無花果の樹に實を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地を塞ぐか」八答へて言ふ「主よ、今年も

なる此の女は、安息日にその繋より解かるべきな
「すや」十七 イエス此等のことを言ひ給へば、逆ふ
者はみな恥ぢ、群衆は擧りてその爲し給へる榮光
ある凡ての業を喜べり。

十八 斯てイエス言ひたまふ「神の國は何に似たるか、
我これを何に擬へん、十九 一粒の芥種のごとし。

人これを取りて己の園に播きたれば、育ちて樹とな
り、空の鳥その枝に宿れり」二十また言ひたまふ「神
の國を何に擬へんか、二一 パン種のごとし。女これ
を取りて、三斗の粉の中に入るれば、ことごとく服
れいだすなり」

◎總督ピラトが宮にて犠牲を献ぐる、ガリラヤ人を殺したといふ報導を齎して、耶穌
に來り告げる者があると。耶穌は答へて言ひ給ふた、「それらのガリラヤ人や、又は近
頃シロアムの櫓が倒れて壓殺された十八人の如き、非業の最後を遂げた者は、何れも
人並はづれて悪人であつた如く、想像してはならぬ。汝等も悔改めずば、皆同じく亡
ぶべきものである」と。それであるから私共は又、此の世にて、貧乏や、病氣や、災
難や、其の他種々不幸なる運命に遭遇して居る人々を、皆特に神から詛はれた者の様
に考へてはならぬ。詛はるべき者は唯罪のみである。それ故フイツプ、ヘンリーが
「私は悔改めを説教しつゝ、又は悔改めを實行しつゝ、世を去らんことを欲する」と

いふた如く。私共も亦常から、罪の悔改めといふことを何より大事として重んじ、
之を己が身に經驗するのみならず、又他人にも勧誘することを怠つてはならぬ。(一至五)
◎葡萄園の主人は「視よ、我三年來りて此の無花果の樹に果を求むれども得ず、之を
伐り倒せ、何ぞ徒らに地を塞ぐや」といひ。園丁は答へて「主よ、今年も容し給へ、
我其の周圍を掘りて肥料せん」といふた。此の葡萄園の主人とは神、園丁とは即ち耶
穌御自身のことである。私共人間は皆果を結ばぬ無花果の如きものであれど、神は
忍んで私共に今しばし、悔改めの機會を授けて置き給ふ。それ故私共は速に罪よ
り救はれて、「善き果を結ぶ樹」となるべき責任がある。ジョナサン、エドワードの
話に、彼の隣家に一人の凶悪なる男があり、或夜夢に、召されて神の前に出で、今更
のやうに其の罪の恐ろしいことが解り、戦ひ慄いて居ると。幸にも神は「向ふ一年
間汝に悔悛の機會を與へる」といふ、有難い御聲を賜はつたと見て、目が覺めた。爾
來暫くの間、彼は見違へる程、眞面目な生活を營んで居つたが。やがて再び醉酒放蕩
の悪習に陥り、後一夜銘酩して、不意に居酒屋の階段から轉がり墜ちて死んだ。エドワ

ードが其の日取を繰つて見るに、恰も彼が夢の中に、「向ふ一年間」と告げられた、其の満一年に該當して居つたといふことである。それ故私共は機会を失はぬ様、神の救を求めねばならぬ。即ち「遇ふことを得る間にエホバを求め、近く居給ふ間に呼び求む」(賽五三〇六)ることが絶対必要である。(六至十)

◎耶穌が安息日に會堂に行き給ふたといふ記事は、福音書の中に、少くとも三十八回ほど出て居る。之によつて見ても、彼が如何に、安息日の禮拜を重んじ給ふたか、推察せられるではないか。耶穌は十八年間病魔に取りつかれ、屈まりて少しも伸ぶること能はざる婦人を見て、憫み、之に語をかけ、之に手を按いて、醫しておやりなされた。「彼等が呼ばざる先に我應へ、彼等が語り終へざるに我聽かん」(賽六五〇二四)とある如く。耶穌は彼女がまだ何とも口に出して言はざる先に、早くも其の心の願を察して、之を助け給ふたのである。どこ迄も忝けない御恵ではないか。(十至十三)

◎會堂司は、耶穌が安息日に病人を醫し給ふのに反對した。しかし乍ら耶穌は「安息日に善を爲すは可し」(太十二〇十二)といふ主義を取りて立ち、敢然として其の所信を

行ひ給ふたのである。安息日を重んずべき事に就いては、或人の説に、「一兒童が若し毎年約八ヶ月宛、十年間學校に行くものとすれば、其の日数は計千七百五十日である。然るに人が若し十歳から七十歳迄、安息日を守るものとすれば、其の日数は實に計三千百三十五日に達する。それ故安息日の意味を辨へて、之を善用するに於ては、これほど大なる國民の教育機關は、他にない」といふてある。もつともつと安息日を、有効に守る工夫をし度ものである。(十四至十七)

◎ユダヤの國では、小さい物といふたら芥種といふ習であつた。其の小さい芥種が、地に播かれて成長すれば、往々、二丈五尺の高木となつたといへば。耶穌がこゝに「神の國は何に似たるか、我之を何に擬へん、一粒の芥種の如し、云々」と、仰せられた意味も、之を理解するに難くない。ギユリーキ博士の計算によれば、紀元一、〇〇〇年に於ける世界の基督者の數は、約五千萬であつたが、一、五〇〇年に至りて一億萬に達した。即ち五百年に倍加したのである。それが一、八〇〇年に至りて二億萬となつた。即ち三百年間に倍加したのである。進んで一、九〇〇年に至り、實に四億

七千七百萬を數ふることとなつた。即ち百年間に倍加した上、更に三割八分ほどの増加を見たわけである。而してこれは、一粒の芥種が園に播かれ、「育ちて樹となり、空の鳥其の枝に宿る」に至るのと似たる、著しき進歩成長を遂げつゝあるものと言はねばなるまい。(十八、十九)

◎耶穌は又「神の國を何に擬へんか、パン種の如し。女之を取りて三斗の粉の中に入るれば、悉く脹れ出す也」と仰せられた。芥種を園に播くのが男の働きであるとするれば、パン種を粉の中に入れるのは婦人の働きである。而して神の國は實に此の男女兩性の、それぞれの心盡しと、勤勞とに待つものぞといふのが、耶穌の御教訓であつた。「婦人を尊敬せよ、彼等は地上の生活に、天上の薔薇を編み入るゝものである。」(シルレル) 又「世に若し優美と、純潔と、善良との力を有するものあらば、それは婦人である。」(ピーチヤー) などいふた人もあり。私共はもつと、婦人が自覺して、大に神の國に貢献する所あらんことを祈り求めねばならぬ。(二十、二一)

(二一八) 我は進み往くべし

【ルカ傳第十三章二十二至三十五】

二三 イエス教へつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給ふとき、二三 或人いふ「主よ、救はるる者は少きか」 二四 イエス人々に言ひたまふ「力を盡して狭き門より入れ。我なんぢらに告ぐ、入らん事を求めて入り能はぬ者おほからん。 二五 家主おきて門を閉ぢたる後、なんぢら外に立ちて「主よ我らに開き給へ」と言ひつつ門を叩き始めんに、主人こたへて「われ汝らが何處の者なるか知らず」と言はん。 二六 その時、われらは御前にて飲食し、なんぢは我らの町の大路にて教へ給へり」と言ひ出でんに、二七 主人こたへて「われ汝らが何處の者なるか知らず、惡をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言はん。 二八 汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及

び凡ての預言者の、神の國に居り、己らの逐ひ出さるるを見れば、其處にて哀哭、切齒する事あらん。 二九 また人々、東より西より南より北より來りて、神の國の宴に就くべし。 三十 視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん」 三一 そのとき或るパリサイ人ら、イエスに來りて言ふ「いでて此處を去り給へ、ヘロデ汝を殺さんとす」 三二 答へて言ひ給ふ「往きてかの狐に言へ。視よ、われ今日明日、惡鬼を逐ひ出し、病を醫し、而して三日めに全うせられん。 三三 さて今日も明日も次の日も我は進み往くべし。それ預言者のエルサレムの外にて死ぬることは有るまじきなり。 三四 噫エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣された

る人々を石にて撃つ者よ、牝鶏の己が雛を翼のうち
に集むることく、我なんぢの子どもを集めんとせし
こと幾度ぞや。然れど汝らは好まざりき。三五 視よ

汝らの家は棄てられて汝らに遣らん。我なんぢらに
告ぐ、「讀むべきかな、主の名によりて来る者」と、
汝らの言ふ時の至るまでは我を見ざるべし」

◎時は短く事は多い。耶穌は其の最終の上京に際し、行くゆく町々村々に福音を宣
傳し給ふた。彼は間もなく、恐ろしい最後が、彼を待受けて居ることを豫知しながら、
それにも拘らず、我を忘れて、尙日夜他人の救に心を勞し給ふたのである。其の頃或
人が彼に來り、「主よ、救はるゝ者は少きか」とお尋ねをした。舊約と新約との間に
來た外典、エスドラスの書に、同じ問題に就いて「至高者は、此の世を多數の人の爲
に造り給ひたれど、來るべき世を少數者の爲に備へ給ふた。」又「濤は滴よりも大
なる如く、亡ぶる者の數は救はるゝ者より遙に多い」などあり。浮つがりして居ると、
救はるゝ者の數に入れないかも知れぬといふのが、此の質問者の心が、りであつたら
しく、寧ろ床しきことに覺えらるゝ。(二二二、二二三)

◎耶穌は答へて、「力を盡して狭き門より入れ云々」と仰せられた。他の場合に彼が、

「狭き門より入れ、滅に至る門は大きく、其の路は廣く、之より入る者多し。生命に
到る門は狭く、その路は細く、之を見出す者少し」(太七〇十三、十四)と宣ふたのも、全
く之と同じ意味である。黙示録に、神の都には十二の門ありて、終日閉ぢず、諸國の
人々はそこから入り來るのであれど、「凡て穢れたる者、又憎むべきことと、虚偽とを
行ふ者」は、此處に入る事を許されないとあるのも、思ひ合さるゝではないか。(黙二
一〇二五至二七) 私共は此の狭き門より入る爲に、力を盡さねばならぬ。天國は懶惰者
の寄り集まる所ではなくて、唯道の爲に努力奮闘した者のみ、入ることを許さるべき所
である。「バプテスマのヨハネの時より今に至る迄、天國は烈しく攻めらる。烈しく攻
むる者は之を奪ふ」(太十一〇十二)とも、教へられて居るではないか。(二四)

◎門を閉されたる後、おくれ馳せに來つて、「我等は御前にて飲食し、汝は我等の町の
大路にて教へ給へり」などいひつゝ、戸を叩く者があつても。主人は「我汝等が何處の
者なるかを知らず、惡をなす者共よ、皆我を離れ去れ」と、いふとある。それ故私
共は、幾ら基督者の家庭に生れ、基督者の友人と交り、又は基督教の集會に出席して

居つたからといふて。そんなことで、神の御前に立つことが出来るものと思ふてはならぬ。唯必要なるは個人的の宗教である。「人新に生れずば、神の國を見るも能はず。」(約三〇三) 私共は個々別々に生れて、個々別々に死ぬる如く、亦個々別々に神に來り、其の靈魂を救はれ、新なる生命を授けられて、現に今も耶穌を其の心に宿して居る様でなくてはならぬ。それ以外に私共が、主の御前に立つの資格といふてはないのである。(二五至二七)

◎耶穌は少くとも三度以上、「後なる者の先になり、先なる者の後になることあらん」といふ、教訓を垂れ給ふた。(太十〇三十、同二十〇十六参考) それ故私共はいつ迄も、神の恵の淺瀬に船がよりして居つてはならぬ。「深處に乗り出し、網を下して漁れ」と、命じ給ふ御聲が聞えるではないか。(路五〇四) 昔イスラエルの王ヨアシは、東の窓を開いて弓射れといはれ、唯三度だけ射て止めると。預言者は怒りて、「汝は五回も、六回も射るべかりし也。然かせしならば、汝スリアを撃ち破りて、之を滅し盡すことを得ん。されど今然かせざれば、スリアを撃ち破るとは三次のみなるべし」(王下十三〇十九)と、

言ふたと傳へられて居る。それであるから私共も、小成に安んじてはならぬ。所謂「後の鴉が先になり、逸早く神の恵を経験し出した者が、反つて後から出て來た人々に頭の上を乗り越され。自分は何時まで同じ地點に立ち停まり、若しくは曾て占め得た地點から、後しざりして居るやうでは、眞に申譯もなきこと、思はねばならぬ。(二八至三十)

◎或バリサイ人が耶穌に來り「出で、此處を去り給へ、ヘロデ汝を殺さんとす」といふた。此のヘロデとは、バプテスマのヨハネを殺したヘロデ、アンテパスの事である。(路九〇九) しかし乍ら「彼は悪き音信によりて畏れず、其の心エホバに依頼みて定まつて」居給ふた。(詩百十二〇七) 乃ち答へて、「往きて彼の狐(陰險にして卑怯なるヘロデのことである)に言へ。視よ、我今日明日、悪鬼を逐ひ出し、而して三日目に至らせられん。されど今日も、明日も、次の日も、我は進み往くべし」と。つまり今暫く爲すべき事を爲し終へ、エルサレムにて殺さるゝ迄は、勇往邁進して、止まぬであらうとの御意である。リヒテルが耶穌を「勇者の中の至聖者、聖者の中の最勇者」と評したのも、こ

これらの事を言ふものであらう。(三二一至三三三)

◎耶穌は遠からず、滅亡の悲運を見るべきエルサレムを哭し給ふた。「噫、エルサレム、エルサレム、預言者達を殺し、遣はされたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏の己が雛を翼の中に集むる如く、我汝の子供を集めんとせしごと幾度ぞや。されど汝等は好まざりき云々」と。これは又どうした悲痛の言であつたらうか。私共は神の恵を押し慢つてはならぬ。「主其の約束を果すに遅きは、或人の遅しと思ふが如きにあらず、唯一人の亡ぶるをも望み給はず、凡ての人の悔改めに至らんことを望みて、汝等を永く忍び給ふなり。」(彼後三〇九) 其の恵の門戸のまだ閉されぬ間に、私共は進み入りて、主が備へ給ふた、あらゆる祝福を、心と身とに経験させていたただかねばならぬ。(三三三、三三五)

(二九) 人々を強ひて連れ來れ

【ルカ傳第十四章一至二十四】

一 イエス安息日に食事せんとて、或るパリサイ人の頭の家に入り給へば、人々これを窺ふ。二 視よ、御前に水甕をわづらふ人あれば、三 イエス答へて「教師とパリサイ人と言ひ給ふ『安息日に人を醫すことは善しや否や』」四 かれら黙然たり。イエスその人を執り、醫して去らしめ、五 且かれらに言ひ給ふ『なんぢらの中その子あるひは其の牛、井に陥らんに、安息日には直ちに之を引揚げぬ者あるか』」六 彼等これに對して物言ふこと能はず。七 イエス招かれたる者の、上席をえらぶを見、醫をかたりて言ひ給ふ、八 『なんぢ婚禮に招かるととき、上席に着くな。恐らくは汝よりも貴き人の招かれんに、九 汝と彼とを招きたる者きたりて「この人に席を譲れ」と言はん。さらば其の時なんぢ耻ぢて末席に往きはじめん。十 招かるととき、寧ろ往きて末席に着け、さらば招きたる者きたりて「友よ、上に進め」と言はん。その時なんぢ同席の者の前に

はまれ 譽あるべし。十一 凡そおのれを尚うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり」十二 また己を招きたる者にも言ひ給ふ『なんぢ晝餐または夕餐を設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人などをよぶな。恐らくは彼らも亦なんぢと招きて報をなさん。十三 饗宴を設くるときは、寧ろ貧しき者・不具・跛者・盲人などを招け。十四 彼らは報ゆること能はぬ故に、なんぢ幸福なるべし。正しき者の復活の時に報いらるるなり』十五 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言ふ『おほよそ神の國にて食事する者は幸福なり』十六 これに言ひたまふ『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。十七 夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「來れ、既に備りたり」と言はしめたるに、十八 皆ひとしく辭りはじめ。初め者いふ「われ田地を買へり、往きて見ざるを得ず。請ふ、許されんことを」十九 他の者いふ「われ五糶

の牛を買へり、之を殺すために往くなり。請ふ許されんことを」二十 また他の者いふ「われ妻を娶れり此の故に往くこと能はず」二一 僕かへりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言ふ「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此處に連れきたれ」三三 僕いふ「主

よ、仰せのごとく爲したれど、尙ほ餘の席あり」三主人、僕に言ふ「道や籬の邊にゆき、人々を強ひて連れきたり、我が家に充たしめよ。二四 われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味ひ得る者なし」

◎「耶穌安息日に食事せんとて、或パリサイ人の頭の家に入り給へば、人々之を窺ふ」とあり。彼等は何とかして耶穌の落度を見出したいと、腐心して居つたのである。昔パピロン人は、其の國事に就いて、ダニエルを認へんことを試みたが、「何の隙をも、何の咎をも見出すことを得ず。」是に於て「此のダニエルは其の神の例典に就いて、之が隙を獲るにあらざれば、終に之を認ふるに由なし」といひ。(但六〇四、五) 彼が日々三度宛、神に祈禱するのを種に、之を陥れやうと企てた。今パリサイ人が耶穌を窺ふて、其の落度を探さうとした状が、亦之と似た處がある。しかし乍ら、彼等は耶穌が安息日に病人を醫し給ふた事の外に、何等非難すべき點をも見出すこと能はず。

その點に就いては又、彼から、安息日に善を爲すは、宜しきに適へる道理を辯明せられて見ると。これに對して、一言の返す辭もなかつたのである。是れ「善を行ひて、愚なる人の無知の言を止むるは、神の御意」(彼前二〇五)なるが故であつた。(一至六) ◎そこに招かれた者共の、互に上席をえらぶを見て、耶穌は謙遜の必要を説き示し、「凡そ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるゝなり」と、仰せられた。諺に「猿は高い處に登るほど、其の尻尾をあらはす」とあり。柄にもない眞似をして、人の上に立たうとするのは、見苦しいものである。けれども「謙遜は基督教道徳の女王である。」「謙遜は又天國に行くの旅券である。」或人の説に、「謙遜なる人は董の如く、低き處に身をおき、頭を地に垂れ、葉の中に其の花を隠しては居れど、其のかんばしき香の爲に、自然に人に認めらるゝものである」と、いふてある。どうか然うした謙遜の徳を、お互の身に備へたきものではないか。(七至十二) ◎耶穌は無報酬の善事を行ふべきことを教へて、「饗宴を設くる時は、寧ろ貧しき者、不具、跛者、盲人などを招け。彼等は報ゆること能はぬ故に、汝幸福なるべし」と宣

ふた。箴言に「貧しきものを憫れむ者は、エホバに貸すなり。其の施濟はエホバ償ひ給はん」(箴十九〇十七)とあり。ソクラテスも亦嘗て「汝若し饗宴をなさば、其の友を招かずして、乞食や、困窮民を招け。彼等は最も多く汝に感謝し、且つ汝の頭に祝福の宿らんことを祈るであらう」と、いふたことがある。さうした隠れたる善事を行ふ者を、神は黙つて見て居給ふことが出来ない。必ず「正しき者の復活の時に、之に報い給ふ」のである。他の場合に耶穌が「幸福なる哉、憐憫ある者、其の人は憐憫を得ん」(太五〇七)と、仰せられたのも、全く同じ意味を示されたものに外ならない。(十
二至十四)

◎同席の者の一人が、「凡そ神の國にて食事する者は幸福なり」と、いふたのを好い機として。耶穌は或人の、夕餐に人を招く譬喩を語り。角案内を受けた者の、種々口實を設けて、出て来ない狀に擬へて、世の人が、神の御招きに背ける罪を戒め給ふたのである。中にも「我田地を買ひたり、往きて見ざるを得ず」といふた者は、財産のため。「我五耦の牛を買へり、之を驗す爲に往くなり」といふた者は、事業のため。又「我

妻を娶れり云々」といふた者は、家事の都合の爲に、神の召を拒む者の譬であつた。或時「リバープール市民は、何故もつと、日曜日の禮拜に出席せざるか」といふ問題に就いて、研究せられたことがあり。其の席上、或人は、それは土曜日の勞働に疲れて居るからだといひ。或人は、會堂の位置が不便ゆゑだといひ。或人は、説教が六づかしいからだといひ。種々なる意見を述ぶる者のあつた後で、今一人が立ち上り、「けれども其の最も大なる理由は、彼等が敬虔の念に乏しいからである」と、いふたことがある。私共も亦、好加減な言草や、口實を作ること止め。反つてあらゆる障礙を排除しつゝ、眞實を以て、神の御聲に聽き従ふやうでなくてはならぬ。(十五至二十)

◎家の主人は僕にむかひ、「町の大路と小路とに往きて、貧しき者、不具者、盲人、跛者などを、此處に連れ來れ」といひ。やがて又「道や籬の邊に往き、人々を強ひて連れ來り、我が家に充たしめよ」と、命じたとある。これは型に入つた様な傳道のみして居ないで、往いて街頭の民衆に接觸せよ。尋常の手段で彼等が救へぬなら、非常の手段をとつて、働けといふの御命令である。ブース夫人(カザリン)が、如何に此の御言を

文字通りに實行して、貧民窟の戸毎訪問に成功したるかは、其の明文「人々を強ひて連れ來れ」といふのに、傳へられて居る。即ち救世軍の行軍、野戦、「ときのこる」賣、制服、證言、漁人、悔改の座等は、亦皆此の「人々を強ひて連れ來る」主義の産物だといふても、過言ではあるまい。久しい以前、ライトフット監督は言ふた、「私共が大路と小路とに往きて、人々を強ひて連れ來れて御命令を忘却し、彼處に一人、此處に一人と、偶まさかに、自ら進んで道を求むる者を救ふばかりで、満足して居る時。救世軍は大膽に起つて、文字通りに、人々を強ひて耶穌に連れ來つて居る。之は私共をして、既に久しく諸教會の中に銷磨し去りたる、靈魂に對する普遍的強制してふ精神を、今一度思ひ起さしむるものである」と。それにつけても私共は、更に一層大膽に進んで、此の救靈の御軍に、最善の努力を試みねばならぬ。(二一至二四)

(三〇) 十字架を負へ

【ルカ傳第十四章二十五至三十五】

二五 さて大なる群衆 イエスに伴ひゆきたれば、顧みて之に言ひたまふ、二六「人もし我に來りて、その父母・妻子・兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず。二七 また己が十字架を負ひて我に従ふ者ならでは、我が弟子と爲るを得ず。二八 汝らの中たれか樽を築かんとせば、先づ坐して其の費をかぞへ、己が所有、竣工までに足るか否かを計らざらんや。二九 然らずして基を据ふ、もし成就すること能はずば、見る者みな嘲笑ひて、三〇「この人は築きかけて成就すること能はざりき」

と言はん。三一 又いづれの王か出てて他の王と戦争をせんに、先づ坐して、此の一萬人をもて、かの二萬人を率ゐきたる者に對ひ得るか否か籌らざらんや。三二 もし及かすば、敵は遠く隔たるうちに使を遣して和睦を請ふべし。三三 斯のごとく汝らの中その一切の所有を退くる者ならでは、我が弟子となるを得ず。三四 鹽は善きものなり、然れど鹽もし効力を失はば、何によりてか味つけられん、三五 土にも肥料にも適せず、外に棄てらるるなり。聽く耳ある者は聽くべし」

◎「殉教者として死ぬることは易く、基督者として生くることは難い」と、言ふた人さへあり。一箇の聖徒として終始一貫、初の愛と信仰とを、いつ迄も持續くるは、決して容易の業でない。耶穌は大なる群衆の彼に従ふを見て、「人若し我に來りて、其の父母、妻子、兄弟、姉妹、己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず云々」と仰せられた。これは如何にも、劇烈峻嚴なる御訓戒である。「これより以前にも、また

以後にも、其の隨從者にむかふて、此の如きことを告げた人があるのを、私は知らない」と、ピーチャーが言ふたのは、尤もの事である。耶穌は彼に従ふ者の、數ばかり多からんよりは、寧ろ質に於て優らんことを望み、此うした教をなし給ふたものと、見ねばならぬ。(二五、二六)

◎それにしても、前には「汝等の仇を愛せよ」(太五〇四四)とさへ宣ふた耶穌が。今はすなはち「其の父母、妻子、兄弟、姉妹、己が生命をも憎まざれば」と仰せられたのは、どうしたわけかといふに。これは他の場合に、彼が「我よりも父、又は母を愛する者は、我に相應しからず。我よりも息子、又は娘を愛する者は、我に相應しからず」(太十〇三七)と、宣ふたのと同じく。全く私共が神の御旨と、此の世の義理人情との間に板挟みとなつて、當然の處置を誤まらざらん爲の、御警告に外ならない。ヘレン、ウオーカー女は早く父を喪ひ、獨りで母と妹とを世話するうち、妹が不義の子を生んで之を殺した爲に、證人として法廷に喚び出された。法廷ではヘレンの一言によりて、妹は無罪ともなるべく、又は死刑にも行はるべき場合に。彼女は妹よりも眞實を重ん

じて、斷腸の思をしながら、飽迄も眞實なる證言をした爲、妹は死刑の宣告を受けた。同時に彼女は、數百哩を徒歩して倫敦に出で、時の女皇ヴィクトリアに哀訴し、妹の命乞ひをすると、幸に聽届けられて、妹は危機一髪の際に、辛くも其を死を免せられたといふ物語がある。所謂「大義親を滅する」とは、ヘレンが法廷に立つた時の決心であつたに相違ない。私共も神の御旨と、人情の私との間に、其の處置を誤まらざるやう、日頃からの覺悟が大事である。(二六)

◎次に耶穌は「又己が十字架を負ひて、我に従ふ者ならでは、我が弟子となるを得ず」と、告げ給ふた。十字架を負ふとは、神と人との爲に、如何なる恥と苦みをも甘んじ。若し必要ならば、其の爲に死をだも厭はぬことをいふのである。それ故眞の基督者は、十字架の戦士でなくてはならぬ。即ちルーテルが「凡ての基督者は、十字架の負擔者である」といひ。バックスターが「十字架を負ひ、且つ之を運べ。我等には之を踏越したり、回避したり、又は拒絶したりする、自由を與へられて居ない」といふたのは、何れもこの道理を教へた言である。(二七)